第三版

學生必携 日本歷史問答

高等學校 中學師範校 商業學校 其他公私立諸學校 生徒參考用

青木俊太郎編纂

林扁落堂梓

049639-000-6

特20-27

日本歷史問答（学生必携）

青木俊太郎／著

M26

BEM-0342

特20
27

凡例

一本書ハ專ラ初學者ノ便益ヲ計リ編纂シタルモノナレハ成ルベク簡單ニ事實ヲ說明スルヲ期シ又タリトヽ雖モ倉卒ノ際ニ編纂シタルヲ以テ或ハ章句ノ妥ナラサル所アルカ如キハ固ヨリ免レサルベシ讀者之ヲ諒セヨ

一本書編纂ノ目的已ニ初學者ノ爲ニスルニアルヲ以テ其問題ヲ撰ブニモ及ブベキ事項ヲ區別シ一題中ニ數事項ヲ包含スルカ如キ方法ヲ避ケタリ之レ見易カラサルヲ欲スレハナリ

一古今ノ變遷ハ明瞭側ヘハ我國文學ノ變遷、風俗變遷ノ有樣、美術ノ沿革、刑律ノ沿革等ノ如キハ固ヨリ必要ノ問題ナリト雖モ別ニ之ヲ揭ケス編中各時代ニ分チテ之ヲ揭ケシヲ以テ讀者幸ニ之ニヨリテ其變革ノ順序ヲ諒セラレハ幸甚シ

一始メ余大ニ此類ノ書ノ必要ヲ感シタルニ際シ磊落堂主人ノ需アルニ逢ヒ其意ノ相投合シタルヲ喜ブノ餘直ニ之ヲ諾シテ遂ニ之ヲ編スルコトトセリ然レト

モ余ヤ淺學菲才固ヨリ歴史ヲ知ルモノニアラス其記スル所ノ事實或ハ錯誤ナキヲ保セス大方ノ諸君幸ニ是正セハ可ナリ

一本書ヲ編スルヤ僅々十數日ノ間ニ於テ倉卒稿ヲ終リ且ツ一部ノ草稿成ル毎ニ直ニ之ヲ印刷ニ附シタルヲ以テ訂正ノ暇ナク全編稿ヲ脫スルニ及ヒ熟之ヲ考フレハ其加除スヘキモノ少カラスト雖モ最早如何トモナシ難キヲ以テ已ムヲ得ス其儘之ヲ公ニス故ニ此書ノ不完全ニシテ世ノ嘲笑ヲ受クルカ如キハ固ヨリ預メ期スル所ナリ他日若シ機ヲ得ハ之ヲ訂正スルヲ怠ラサルベシ之レ編者ガ特ニ讀者ニ告ケテ其諒察ヲ仰カント欲スル所ナリ

明治二十三年十一月

編者識

曩ニ本書ヲ世ニ公ニスルヤ其撰固ヨリ疎漏ヲ免レサルヲ以テ機ヲ得テ之ヲ訂正センコトヲ讀者ニ約シタリキ是ヲ以テ第二版ニ付スルノ際之カ增訂ヲナサントト欲シタルモ故アリテ果ズ今ヤ第三版ニ付スルノ場合ニ至リタルヲ以テ聊カ訂正ヲ加ヘ增補ヲ爲シタリト雖モ未タ以テ完全ナラサルハ固ヨリナリ故ニ尙ホ讀者諸君ノ眷顧ト示教トニヨリ完全ノ訂正ヲナスノ日アランヿヲ期ス

明治廿六年六月

編者再識

日本歷史問答目錄

1 歷史ヲ學ブノ効益如何　壹頁
2 我國體ノ萬國ニ優ル所以如何　壹頁
3 我國固有ノ風俗如何　貳頁
4 國人ノ氣質ハ如何　貳頁
5 我國古來農業獨リ發達シテ商業ノ盛ナラザリシ原因如何　貳頁
6 神代トハ如何ナル時代ヲ云フヤ　貳頁
7 三種ノ神器ハ如何ニシテ傳ハリシヤ　參頁
8 神武天皇東征ノ要ヲ問フ　參頁
9 我國ヲ蜻蛉州ト云フ由來如何　參頁
10 崇神天皇神器ヲ遷サレシ事如何　四頁
11 始メテ四道將軍ヲ置キシハ何帝ノ時ナルヤ又其人々ノ姓名ヲ擧ゲヨ　四頁
12 殉死ヲ廢セシ顚末如何　四頁
13 角觝ノ始メハ如何　四頁
14 日本武尊熊襲征討ノ要概　四頁
15 日本武尊東征ノ大要　五頁

16 大臣大連ノ官ハ何レノ時代ヨリ始マリシヤ　五頁
17 神功皇后三韓征伐ノ大畧ヲトフ　五頁
18 三韓征伐ハ我國勢ニ如何ナル影響ヲ與ヘシヤ　六頁
19 我國文學ノ嚆矢ハ如何　六頁
20 織物業ノ進歩ハ何レノ時代ニ胚胎セシヤ　六頁
21 稚郎子讓位ノ事蹟ヲ擧ゲヨ　六頁
22 仁德帝ノ仁政　六頁
23 佛教渡來ノ始末ヲ問フ　七頁
24 醫術ノ始ヲ問フ　七頁
25 佛教ノ我國ニ渡來セシニヨリ如何ナル影響ヲ生ゼシヤ　七頁
26 蘇我馬子政ヲ專ニスルノ原因如何　八頁
27 蘇我氏專横ノ例ヲ擧ヨ　八頁
28 我國ニ成文ノ法律アルハ何レノ時代ニ始マリシヤ　八頁
29 中大兄皇子蘇我氏ヲ誅セラレシ顚末如何　八頁
30 上古ニ行ハレシ租稅ノ法ハ如何ナルモノナルヤ　九頁
31 上古兵制ノ大要ヲトフ　九頁

32 外國ト交通スルノ濫觴ハ何レノ時ニアルヤ　九頁
33 雄畧天皇繼体天皇ノ農蠶ノ業ヲ勸メ玉ヒシ事實如何　九頁
34 上古ニアリテ犯罪ノ判決ヲナスハ如何ナル法ヲ用ヒシヤ　十頁
35 我國支那ト交通スルノ始ハ如何　十頁
36 上古神ヲ尊ビ祭ヲ重ズルノ風如何　十頁
37 繪畫彫刻等ノ美術ハ何レノ時代ヨリ其發達ヲ見シヤ　十頁
38 上古人民ノ風俗及生活ノ狀態如何　十一頁
39 始テ曆日ヲ用ヒシハ何帝ノ時ナルヤ　十一頁
40 斗升斤量ノ制ヲ一定セシハ何レノ時代ナルヤ　十一頁
41 上古政治ノ狀態如何　十一頁
42 年號ノ始ヲトフ　十二頁
43 大化改新ノ概要ヲ問フ　十二頁
44 左右大臣幷ニ內臣ヲ置クノ始ハ如何　十二頁
45 大化ノ新政前後ニ於ケル國勢ヲ對照セヨ　十二頁
46 孝德帝ノキ上古ノ兵制一變セシ次第ヲ記セヨ　十三頁
47 孝德帝ノ德政ハ如何ナルヿゾ　十三頁

48 重祚ノ初例ヲ問フ　十三頁
49 忠臣鎌足ノ人ト爲リヲトフ　十三頁
50 天智天皇ノ時文物ノ景況如何　十三頁
51 壬申ノ亂トハ如何　十四頁
52 近江ノ朝ノ令トハ如何　十四頁
53 始テ漏刻ヲ置キシハ何レノ時ナルヤ　十四頁
54 天智天皇以後ハ如何ナル風俗トナリシヤ　十四頁
55 男女ヲシテ始テ結髮セシメタルハ何帝ノ時ナルヤ　十五頁
56 兵農ノ分ルヽハ何レニ兆セシヤ又其判然分立セシハ何レノ時代ナルヤ　十五頁
57 世ニ大寶ノ治ト稱スルハ如何　十五頁
58 元正天皇ノ時ニ至リ中央集權ノ制度全ク成レリト云フ其來歷ヲ聞カン　十五頁
59 始メテ金銀銅ヲ發掘セシ時代ヲトフ　十六頁
60 始テ銅錢ヲ鑄リシハ何レノ時ナルヤ　十六頁
61 祇ヲ右ニスルハ何レノ時代ニ始ルヤ　十六頁
62 奈良ノ朝トハ如何　十六頁
63 瓦屋ヲ築クハ何レノ時代ニ始ルヤ　十六頁

64 痘病流行ノ始ハ如何　十六頁
65 天皇削髮ノ始ハ如何　十七頁
66 始テ盂蘭盆會ヲ行ヒシ時代ヲ問フ　十七頁
67 假字ノ權輿ハ如何　十七頁
68 教育ノ庶民ニ普及スルハ何レノ時ニ始マルヤ　十七頁
69 藤原廣嗣ノ叛ヲ問フ　十七頁
70 僧道鏡ハ如何ナル人物ゾ　十八頁
71 和氣清麿忠烈ノヿヲ擧ヨ　十八頁
72 延曆遷都ノヿヲトフ　十八頁
73 歷朝ノ謚号ヲ定メシハ何レノ時ゾ　十九頁
74 我國刻版ノ始ハ如何　十九頁
75 天台宗幷眞言宗ノ始ハ如何　十九頁
76 帝都ヲ京都ニ定ムルノ前歷朝遷都ノヿ如何　十九頁
77 坂上田村麿ハ如何ナル人ナリシヤ併テ其効績ヲ記セヨ　十九頁
78 藤原氏專權ノ由來スル所如何　二十頁
79 關白職ノ始ハ如何　二十頁

80 菅原道眞ノ人トナリヲ記シ併セテ其貶謫ノ事實ヲ述ヨ　二十頁
18 宇多天皇菅原道眞ヲ登用セラレシ意如何　廿一頁
82 醍醐天皇ノ仁政　廿一頁
83 延喜ノ朝文學ノ景況如何　廿二頁
84 天皇ノ諡ヲ廢セシハ何レノ時代ナルヤ　廿二頁
85 天曆ノ治トハ如何　廿二頁
86 菅原道眞貶セラレシ後藤原氏ノ權勢如何　廿二頁
87 天慶亂ノ概畧ヲ記セヨ　廿三頁
88 源平二氏世々武臣トナルノ原因ヲ聞カン　廿四頁
89 藤原氏ハ如何ナル手段ヲ以テ政權ヲ掌握セシヤ　廿四頁
90 藤原道長專横ノ事實如何　廿四頁
91 藤原氏ノ權ヲ執リシヤ朝廷官吏ノ風俗如何　廿五頁
92 藤原氏專權ノ時ニ當リ諸國武士ノ感情如何　廿五頁
93 藤原氏ノヤ地方ノ政大ニ弛セシハ何故ナルヤ　廿五頁
94 藤原氏ニシテ攝關トナリシハ誰々ナリヤ　廿五頁
95 後三條帝ノ中興トハ如何　廿六頁

96 一條天皇ノ時才媛輩出ノ事實ヲ問フ　廿六頁
97 前九年ノ役ヲ略記セヨ　廿七頁
98 政ヲ院中ニ聽クノ始ハ如何又其旨趣如何　廿七頁
99 後三年ノ役トハ如何　廿七頁
100 葬制ヲ定メシハ何レノ時代ゾ又火葬ノ始ハ如何　廿八頁
101 天長節及四方拜ハ何レノ時代ニ定メラレシヤ　廿八頁
102 藤原氏專權以來實用文學ノ衰微セシ所以如何　廿八頁
103 保元亂ノ原因結果如何　廿九頁
104 平治ノ亂ノ概畧ヲ述ヨ　廿九頁
105 源頼朝ヲ伊豆ニ流スノコト如何　三十頁
106 平氏ノ顯榮ヲ極メシ景況如何　三十頁
107 始メ平氏ノ威風最モ盛ニナリシハ何ニ基クヤ　三十一頁
108 清盛狂暴ノ事例ヲ示セ　卅一頁
109 重盛ノ人トナリヲトフ　卅一頁
110 治承ノ亂ヲ略記シ併テ其影響如何ヲ示セ　卅二頁
111 源頼朝兵ヲ起スノコトヲ記セヨ　卅二頁

112 後鳥羽帝神器ヲ得ズシテ踐祚セラレシ所以如何　卅二頁
113 源義仲ノ反シタル時ノ事情ヲ聞カン　卅三頁
114 平氏滅亡ノ狀ヲ記セヨ　卅三頁
115 宇治川ノ戰狀ヲ略記スベシ　卅四頁
116 源頼朝ノ人トナリ如何　卅四頁
117 平氏遂ニ源氏ノ爲ニ滅ルヽニ至リタルニハ如何ナル原因アルヤ　卅五頁
118 中古僧徒跋扈ノ事如何　卅五頁
119 白河帝ノ頃ハ如何ナル風俗ナリシヤ　卅五頁
120 中古王朝時代ノ刑法ヲ問フ　卅五頁
121 莊園ノ起原如何　卅六頁
122 政權武門ニ歸セシ顚末ヲ聞カン　卅七頁
123 頼朝義經ヲ討ツノ始末ヲ述ヨ　卅八頁
124 保元平治以後文藝ノ變遷如何　卅八頁
125 頼朝範頼ヲ殺シタル所以如何　卅八頁
126 源頼家ハ如何ナル人ゾ　卅八頁
127 時政ハ如何ナル故ヲ以テ頼家ヲ殺セシヤ　卅八頁

128 源氏ノ正統絶ヘシハ如何ナルヿノアリシニヨルヤ　卅九頁
129 鎌倉三代將軍トハ誰々ナルヤ　卅九頁
130 北條氏執權職トナルノ始ハ如何　卅九頁
131 承久亂ノ原因及ヒ其結末如何　卅九頁
132 南北六波羅府ノ始ハ如何　卅九頁
133 泰時ノ政ハ如何　卅九頁
134 時頼ハ如何　四十頁
135 時宗及貞時ハ如何　四十頁
136 北條氏ノ政衰ヘシ所以如何　四十一頁
137 蒙古來寇ノ始末ヲ述ヨ　四十一頁
138 九州探題ハ何レノ時ヨリ始リシヤ　四十一頁
139 鎌倉時代佛教ノ景況如何　四十二頁
140 後深草龜山兩統更立ノ起リハ如何　四十二頁
141 源氏ノ治法ヲ問フ　四十二頁
142 北條氏ノ治法ハ如何　四十三頁
143 源氏時代ノ風俗如何　四十三頁
　　四十四頁

144 北條氏ノ風俗ハ如何　四十四頁
145 佛法習俗ノ一部トナリシ例ヲ擧ヨ　四十四頁
146 元弘ノ變トハ如何其始末ヲ述ヨ　四十四頁
147 後醍醐天皇楠正成ヲ召サレシ始末如何　四十五頁
148 後醍醐帝笠置山ヲ逃レ玉ヒシ時ノ景況如何　四十六頁
149 楠正成勤王ノ結果如何　四十七頁
150 楠正成赤坂城守ノ概略ヲ聞カン　四十七頁
151 兒島高德忠誠ノフヲ問フ　四十七頁
152 楠正成金剛山ヲ守ルフヲ記セヨ　四十八頁
153 新田義貞歸順ノ事ヲ問フ　四十八頁
154 新田義貞義兵ヲ擧ケシ時ノ狀況如何　四十九頁
155 後醍醐天皇ハ如何ニシテ隱岐ヲ逃レラレシヤ　四十九頁
156 官軍六波羅ヲ復スルフヲ記セヨ　五十頁
157 北條氏滅亡ノ景況ヲ問フ　五十頁
158 建武ノ中興トハ如何　五十頁
159 中興ノ業ノ衰フル所以如何　五十一頁

160 始テ楮幣ヲ行ヒシハ何レノ時ナルヤ又其理由如何　五十一頁
161 藤原藤房ハ何故ニ官ヲ舍テヽ去リシヤ　五十一頁
162 直義護良親王ヲ殺セシ顚末如何　五十二頁
163 尊氏ノ叛ヲ問フ　五十二頁
164 楠正成戰死ノ次第ヲ述ヨ　五十三頁
165 名和長年ノ戰死セシハ何レノ戰ナルヤ　五十四頁
166 菊池氏勤王ノフヲ記セヨ　五十四頁
167 南北朝ノ分ルヽ所以ヲ聞カン　五十五頁
168 義貞金崎城ヲ守ルフヲ記セヨ　五十五頁
169 義貞戰死ノ狀況ヲ問フ　五十六頁
170 後醍醐天皇ハ如何ニシテ崩セテレシヤ　五十六頁
171 楠正成戰死ノ次第ヲ說ケ　五十六頁
172 足利氏內閧ノフヲ記セヨ　五十七頁
173 男山ノ戰ヲ記セヨ　五十七頁
174 尊氏ノ人ト爲リヲ聞カン　五十八頁
175 鎌倉管領ノ始ヲ問フ　五十八頁

176 南北朝合一ノ事ヲ問フ　五十八頁
177 足利義滿ノ政略如何　五十九頁
178 義滿豪奢ノフヲ記セヨ　五十九頁
179 管領ヲ鎌倉ニ置キタル結果如何　五十九頁
180 赤松滿祐義教ヲ弑スル所以如何　六十頁
181 足利氏ノ衰亡セシ所以ハ如何　六十頁
182 應仁亂ノ原因及結果ヲ問フ　六十頁
183 足利時代文學ノ景況如何　六十一頁
184 戰國ノ世英雄割據ノ狀ヲ說ケ　六十一頁
185 足利時代ノ風俗如何　六十二頁
186 伊勢長氏ハ如何ニシテ人心ヲ得シヤ　六十三頁
187 鐵砲及ヒ火藥製造法ノ傳ハリシハ何レノ時ナルヤ　六十三頁
188 足利時代外交ノ景況如何　六十三頁
189 義滿義政ノ所爲ニ就キテ最モ國体ニ關係アルモノハ何ソヤ　六十四頁
190 弓槍ノ始メ如何且ツ古代戰鬪ノ狀ハ如何ナルモノナリシヤ　六十四頁
191 毛利元就陶晴賢ヲ討ヲシハ何故ナルヤ　六十五頁

192 兩上杉氏ノ滅亡セシ所以ヲ問フ　六十五頁
193 織田信長ノ威名ノ顯ハルヽハ何事ヨリセシゾ　六十五頁
194 足利氏ノ頃佛教ノ盛衰如何　六十六頁
195 北條氏時代ノ刑名如何　六十六頁
196 足利政府ノ財政ノ景況如何　六十六頁
197 長尾景虎剃髮ノ事情如何　六十六頁
198 甲越ノ戰ハ何事ヨリ起リシヤ　六十七頁
199 戰國ノ時ニ當リ撥亂反正ノ勅ヲ受ケシハ誰ゾ　六十七頁
200 織田氏足利氏ニ代ル顚末如何　六十八頁
201 武田晴信ハ如何ニシテ自立セシヤ　六十八頁
202 長篠ノ戰ヲ記セヨ　六十八頁
203 信長尊王ノ大義ヲ重セシ例ヲ示セ　六十九頁
204 義昭信長ト隙ヲ生セシ所以如何　六十九頁
205 耶蘇教ノ始ハ如何　六十九頁
206 武田氏ノ滅ヒタル顚末ヲ畧記セヨ　六十九頁
207 秀吉ハ如何ニシテ信長ニ仕ヘシヤ　七十頁

208 信長僧徒ノ跋扈ヲ制セシヿヲ問フ　七十一頁
209 明智光秀ノ叛ヲ記セヨ　七十一頁
210 秀吉光秀ヲ誅スルヿ如何　七十一頁
211 秀吉輝元講和ノ次第如何　七十二頁
212 賤岳ノ戰ヲ記セヨ　七十二頁
213 秀吉海内ヲ一統シタル次第ヲ述ヨ　七十三頁
214 秀吉朝鮮征伐ノ起リハ如何　七十四頁
215 秀吉ノ再ヒ朝鮮ヲ討ナシハ何故ナルヤ　七十四頁
216 關ケ原戰爭ノ起リハ如何　七十五頁
217 關ケ原戰爭ノ結果ハ如何　七十五頁
218 洋算及洋船製造術ノ我國ニ入ル始ハ如何　七十六頁
219 西教徒ニ對スル豐臣秀吉ノ處置如何　七十六頁
220 天主閣ノ始ハ如何　七十六頁
221 德川氏ノ始メ外交ノ景況如何　七十六頁
222 日本人歐羅巴ニ至ルノ始ヲ問フ　七十六頁
223 和蘭ト交通ノ始ハ如何　七十七頁

224 大坂冬ノ役ノ起リハ如何　七十七頁
225 大坂冬ノ役ノ結局如何　七十八頁
226 大坂夏ノ役ノ起リ及結果如何　八十七頁
227 德川氏控御ノ法如何　七十八頁
228 德川氏鎖國ノ主義ヲ執リシ所以如何　七十九頁
229 家康ノ人トナリヲ問フ　七十九頁
230 島津氏琉球ヲ征セシハ如何ナル次第ナルヤ　八十頁
231 德川氏ノ威權ハ何ニヨリテ定リシヅ　八十頁
232 島原ノ役ヲ問フ　八十一頁
233 德川時代文學ノ景況如何　八十一頁
234 天皇ノ火葬ヲ止メシハ何レノ時ナルヤ　八十一頁
235 家光家綱ノ時ノ人材ヲ擧ケヨ　八十二頁
236 德川氏初世武家ノ制度如何　八十三頁
237 綱吉ノ政ハ如何　八十三頁
238 德川光國ハ如何ナル人ゾ　八十三頁
239 德川氏中興ノ主トハ誰ソ又其治績如何　八十四頁

240 洋學ノ來歷如何　八十四頁
241 松平定信ノ政治ヲ問フ　八十五頁
242 吉宗以後德川氏ノ盛衰如何　八十五頁
243 德川時代ノ風俗ヲ聞カン　八十六頁
244 仝時代美術ノ景況如何　八十七頁
245 德川幕府ノ刑法ハ如何　八十七頁
246 至尊諡号ノ制ヲ復セシハ何レノ時ソ　八十七頁
247 米艦渡來ノ始末ハ如何　八十七頁
248 本邦國旗ノ制ハ何レノ時ニ定リシヤ　八十八頁
249 佐久間象山吉田松陰ノ禁錮セラレシ所以如何　八十八頁
250 櫻田ノ變トハ如何　八十八頁
251 虎列拉病流行ノ始ハ如何　八十九頁
252 種痘ノ始ハ如何　八十九頁
253 尊攘論者ノ主ナルモノヲ聞カン　八十九頁
254 安政ノ獄トハ如何　九十頁
255 東禪寺ノ變ヲ記セヨ　九十頁

256 生麥村ノ變ヲ問フ及其結局如何　九十頁
257 攘夷ノ期日ヲ定メラレシ時ハ如何ナル景況ナリシヤ　九十一頁
258 長藩ノ京師宿衛ヲ罷メシハ如何ナル事情ニヨルヤ　九十一頁
259 長州征討ノ初ハ如何ナル次第ナルヤ　九十二頁
260 長州謝罪ノ實証如何　九十二頁
261 再ヒ征長ノ兵ヲ出セシハ何故ゾヤ　九十二頁
262 薩長好ヲ通シタル始末ヲ聞カン　九十三頁
263 政權返上ノ始末ヲ問フ　九十三頁
264 德川時代稅法ノ概畧ヲ擧ヨ　九十四頁
265 慶應三年十二月ノ新制如何　九十四頁
266 一世一元ノ制ヲ立テシハ何レノ時ナルヤ　九十四頁
267 五事ノ誓約トハ如何　九十五頁
268 江戸遷都ノ「ハ何ニ基クヤ　九十五頁
269 鳥羽伏見ノ戰爭ノ起リハ如何　九十五頁
270 德川慶喜ハ何ニヨリテ恭順ノ實ヲ表セシヤ　九十五頁
271 會津城攻擊ノ略況ヲ記セヨ　九十六頁

272 箱館戰爭ノ結局ハ如何　九十七頁
273 外國公使朝見ノ始ハ如何　九十七頁
274 廢藩置縣ノ始末如何　九十七頁
275 征韓論ノ原因及ヒ其影響如何　九十八頁
276 臺灣征討ノ原因結果ヲ問フ　九十九頁
277 西南ノ役ノ起リハ如何　九十九頁
278 西南ノ役谷干城熊本城ヲ守ルヿヲ記セヨ　九十九頁
279 始テ太陽曆ヲ用ヒシハ何レノ時ナルヤ　百頁
280 維新後戸籍ノ法如何　百頁
281 全外交ノ景況如何　百頁
282 全宗教沿革ノ大要ヲトフ　百一頁
283 朝鮮事變ノ大畧ヲ語レ　百一頁
284 維新後刑律ノ沿革如何　百一頁
285 全教育ノ景況如何　百二頁
286 全兵制ノ概畧ヲ聞カン　百三頁
287 全通信ノ便ハ如何ナル有樣ニナレルヤ　百三頁
288 全稅法ノ大要ヲ擧ヨ　百四頁
289 全諸制度ハ如何ニ整備セルヤ　百五頁
290 新聞紙發行ノ始ハ如何　百五頁
291 明治十八年官制改革ノ大要ヲ記セヨ　百五頁
292 現時爵位ノ制ハ如何　百六頁
293 明治二十二年二月十一日ハ特ニ吾人ノ記臆スヘキ日ナリト云フハ何故ナルヤ　百六頁
294 帝國議會開設ノ始メ及其來歷如何　百七頁
295 假議事堂ノ燒失セシハ何レノ時ナルヤ　百八頁
296 湖南事變トハ如何　百八頁
297 濃美ノ震災ヲ記セヨ　百九頁
298 第二期議會ノ始末ハ如何　百九頁
299 第三期議會ノ始末ハ如何　百九頁
300 政体變遷ノ要領ヲ問フ　百十頁
301 種痘ノ制ハ何レノ時ヨリ一定セシヤ　百十頁
302 福島中佐單騎遠征ノ事實ヲ略記セヨ　百十一頁

朝鮮防穀事件ノ顚末ヲ略記セヨ

合計三百〇三題

日本歴史問答

青木俊太郎　編輯

〔1〕

歴史ヲ學ブノ益如何

歴史ハ數千年間ニ起リタル所ノ社會ノ現象即チ風俗政治ノ沿革ヲ知リ治亂興廢ノ本末ヲ考ヘ一ハ以テ尊王愛國ノ士氣ヲ煥發シ一ハ以テ既往ヲ鑑ミテ將來ヲ察ス是レ其大要ナリ夫レ社會ハ一大活劇場ニシテ五ヲ逐ヒ歳ニ從ヒ運動シテ止マサル者ナリ故ニ其間ニ起ル所ノ現象亦千樣萬態ニシテ或ハ悲ムベク或ハ憤リ或ハ喜ブベキ或ハ怒ルベキ者蓋幾億萬數ナルヲ知ラス而シテ之ヲ筆端ニ網羅シテ吾人ニ示シ數十萬年ノ遠ク其世ニ生レ其事ニ遭遇スルガ如キ思アラシムルモノ即歴史ノ効ニアラズシテ何ソ

〔2〕

我國体ノ萬國ニ優ル所以如何

神武天皇萬世不朽ノ皇基ヲ開カレシヨリ二千五百有餘年一系ノ皇統連綿トシテ以テ今日ニ至ル其間假令少シク政体ノ變革アリシト雖建國ノ大体ニ至テハ萬古不易如何ナル亂臣賊子ト雖モ未タ曾テ天位ヲ汚スヿ能ハス天胤ノ尊、實祚ノ隆萬古一日ノ如シ此後亦天壤ト共ニ窮極ナカランノミ嗚呼金甌無欠我國ノ如キモノ世界万國一モ之レアラサルナリ

〔3〕

我國固有ノ風俗如何

土地ノ形勢交通ノ便否ニヨリテ相異ナリテ風俗一樣ナラス今之ヲ概別スレハ俠ニシテ義ニ富ムハ關東ノ風ニシテ柔且雅ナルハ畿甸ノ俗ナリ九州人士ハ峭直ニシテ悍ニ中國ノ民ハ温ニシテ撲、北海道ハ頑ニシテ直ト云フヘク其他迂ナルハ琉球ニシテ裕ナルハ四國ナリ而レトモ概シテ温厚ニシテ忠君愛國ノ情誼ニ厚キハ我國特有ノ美風ナリ獨リ忍耐ノ力ニ乏ク小成ニ安ンズルノ風アルハ之レ我國民ノ欠典トス

〔4〕

國人固有ノ美質ハ如何

其氣質義烈ニシテ忠勇ノ氣ニ富ミ君臣ノ大義ヲ守リ古來曾テ之ヲ破ラス小心翼々トシテ萬世一系ノ皇室ヲ仰グ之レ大和民族一種ノ美風ニシテ他國ノ敢テ企及スベカラサル所ナリ

〔5〕

我國古來農業獨リ發達シテ商業ノ盛ナラサリシ原因如何

古來農ヲ以テ立國ノ基トナシ上世ニ在テハ皇族ノ尊キヲ以テスラ自ラ農桑ヲ勤メ給ヒ以テ人民ヲ奬勵セラルヽヿサヘアリキ之レ古來農業ノ發達シタル所以ニシテ加フルニ古來鎖國ノ方針ヲ取リ萬國ト交通セサリシモノ亦幾分カ之ヲ助ケタルモノヽ如シ

〔6〕

神代トハ如何ナル時代ヲ云フヤ

神代ハ邈トシテ其事實ノ詳ナルヿ固ヨリ知ルベカラス開闢ノ初ニ天御中主ノ神アリ次ニ高皇產靈神。神皇產靈神アリ之ヲ造化ノ主神トス皆特生ノ神ナリ數神ヲ經テ伊邪那岐伊邪那美ノ神ニ至ル男女偶生

ノ神ナリ皇女天照大神ヲ生ム天照大神三種ノ神器ヲ天孫瓊々杵尊ニ授ケテ瑞穗國〔日本〕ニ降ラシム尊乃チ日向高千穗ノ峯ニ降リ始テ居ヲ此ニ定ム傳ヘテ鵜草葺不合ノ尊ニ至ル

〔7〕

三種ノ神器ハ如何ニシテ傳ハリシヤ

天照大神天孫瓊々杵尊ニ三種ノ神器ヲ授ケ勅シテ曰ク豐葦原千五百秋瑞穗國ハ之レ我子孫ノ王タルヘキ地ナリ汝宜シク就キテ之ヲ治ムベシ寶祚ノ隆ヘソヿ當サニ天壤ト窮リナカラント尊之ヲ奉シ降リテ、日向高千穗峰ニ居ル傳ヘテ神武天皇ニ至リ列聖之ヲ承ク神器ハ即チ八咫鏡、村雲劍、八尺瓊勾玉之ナリ

〔8〕

神武天皇東征ノ大要ヲトフ

西國既ニ王化ニ霑フト雖モ東國遼遠ノ地未タ服セス夷酋互ニ爭鬪シテ統一スルヿナシ天皇之ヲ平定セント欲シ軍ヲ率ヒテ日向ヲ發シ行々諸賊ヲ征服シ河内ヨリ大和ニ入ラントス長髓彥ナルモノ饒速日命ヲ奉シテ皇軍ヲ拒ク乃チ道ヲ轉シテ紀伊ヨリ大和ニ入ル饒速日命長髓彥ヲ殺シテ降ルニ及ヒ諸賊悉ク平ク乃チ都ヲ橿原ニ定メテ帝位ニ即キ萬世無窮ノ基ヲ定メラレシヨリ今ニ至ルマテ一百二十余代二千五百五十余年皇統一系連綿相承ケ上下ノ分儼然トシテ一定シ天胤ノ尊、寶祚ノ隆千古尙一日ノ如シ日本ノ臣民タルモノ豈其原ツク所ヲ忘ルベケンヤ

〔9〕

我國ヲ蜻蛉州ト云フ由來如何

神武天皇巡幸シテ腋上ノ嗛間丘ニ上リ地形ヲ望ミ見テ曰ク美ナル哉國ヤ形蜻蛉ニ似タリト之ヨリ此名

アリ

〔10〕 崇神天皇神器ヲ遷サレシ事如何

崇神天皇大ニ神祇ヲ崇敬シ玉フ之ヨリ先キ列朝神器ヲ殿内ニ安置セラル天皇神威ヲ瀆サンヿヲ畏レ遷シテ倭ノ笠縫ノ邑ニ奉安シ別ニ鏡劍ヲ摸造シテ御座ニ置キ玉フ

〔11〕 始メテ四道將軍ヲ置キシハ何帝ノ時ナルヤ又其人々ノ姓名ヲ舉ヨ

崇神天皇ノ時大彦命ヲ北陸ニ武停川別ヲ東海ニ吉備津彦ヲ西海ニ道主命ヲ丹波ニ遣ハシ四方ヲ巡接セシムヿヲ四道將軍ト云フ

〔12〕 殉死ヲ廢セシ顛末如何

初メ皇族貴人死スルヰハ必ス其近臣ヲシテ之ニ殉死セシムルノ例アリ垂仁天皇痛ク之ヲ惻ミ詔シテ殉死ヲ禁ス野見宿禰土偶ヲ作リテ生ニ代ヘント乞フ之ヲ許シテ永制トナス

〔13〕 角觝ノ始メハ如何

垂仁天皇ノ朝野見宿禰當麻蹶速ト力ヲ角セシニ始ル

〔14〕 日本武尊熊襲討征ノ要概

熊襲屢叛シ勢頗ル猖獗ナリ景行天皇親ラ之ヲ征シ玉フ未ダ服セス皇子小碓ヲシテ之ヲ征セシム皇子時ニ年十六即チ女裝シテ賊中ニ入ル賊魁梟ヒ延テ坐側ニ置ク皇子其醉テ臥スルヲ見劍ヲ扳テ之ヲ刺ス賊魁其勇ニ感シ嘉号ヲ上リテ日本武尊ト云フ熊襲乃チ平グ

〔15〕 日本武尊東征ノ大要

蝦夷反ス日本武尊ヲシテ之ヲ征セシム尊乃チ神宮ヲ拜シ叢雲劍ヲ帶ヒテ行々諸賊ヲ破リ駿河ニ至ル賊伴リ降リテ尊ヲ誘ヒ火ヲ放テ尊ヲ圍ム尊劍ヲ以テ草ヲ薙キ却テ賊ヲ燒ク之ヨリ改テ草薙劍ト云フ遂ニ相摸ヨリ海ヲ渡リテ上總ニ赴キ進テ陸奥ニ至ル賊酋悉ク降ル乃チ軍ヲ還シテ伊勢ニ至リ病ヲ得テ薨ス初メ相摸ノ海ヲ過クルヤ暴風ニ逢ヒ船將ニ覆ラントス妃橘媛神ニ祈リテ海ニ投ス歸途碓日峠ニ登リ東望シテ曰ク吾妻者耶ト之ヨリ山東ヲ吾妻ト云フ

〔16〕 大臣大連ノ官ハ何レノ時代ヨリ始マリシヤ

成務天皇ノ時武内宿禰ヲ大臣トナス又仲哀天皇ノ時大伴武以ヲ大連トナス

〔17〕 神功皇后三韓征伐ノ大畧ヲトフ

仲哀天皇熊襲ヲ征シテ筑前ニ在リ香椎ノ行宮ニ崩ス皇后喪ヲ秘シ討テ之ヲ平ケ遂ニ新羅ヲ征ス蓋シ新羅ガ熊襲ニ聲息ヲ通セシニヨルナリ皇后自ラ男裝シテ舟師ヲ率ヒ進テ新羅ニ至ル新羅王大ニ惶レテ迎ヘ降リ百濟高麗亦風ヲ望テ降附シ皆朝貢ヲ誓フ乃チ振旅シテ筑紫ニ歸ル

〔18〕 三韓征伐ハ我國勢ニ如何ナル影響ヲ與ヘシヤ

神功皇后三韓ヲ征シテヨリ彼レ常ニ朝貢ヲ絶タス之ニヨリテ文學技藝ノ彼國ヨリ傳ヘ來ルモノ甚ク多

ク大ニ我國ノ開化ヲ助ケ風俗亦一變ス

〔19〕

我國文學ノ嚆矢ハ如何

古來文字ナキニアラスト雖モ未タ以テ文學ト稱スルコ足ルモノアラス應神天皇ノ朝ニ至リ百濟ノ王仁論語千字文ヲ献シ皇子稚郎子之ヲ師トシテ學ブ我國文學ノ興ル此時ニ始ル其後博士等ノ屢來リテ敎化ヲ敷ケルモノアリ之ヨリ文學漸ク盛ナリ

〔20〕

縫織及ヒ養蠶ノ業ノ進歩ハ何レノ時ニ胚胎セルヤ

往古ヨリ此等ノ業アリト雖モ未タ全ク開クルニ至ラス應神天皇ノ朝百濟ヨリ縫衣女ヲ献シ其後雄略天皇ニ至リ吳ヨリ女工吳織漢織ヲ献シ縫織ノ業ヲ傳ヘシヨリ大ニ其進歩ヲ見ル又養蠶ノ業ノ改良セシハ應神天皇ノ時百濟ヨリ歸化セシ秦ノ始皇ノ裔弓月君ヨリ始マル

〔21〕

稚郎子讓位ノ事蹟ヲ擧ヨ

應神天皇稚郎子ヲ愛シ立テ、太子トス天皇崩スルニ及ヒテ稚郎子皇兄大鷦鷯尊ノ賢ヲ知リ位ヲ皇兄ニ讓リテ菟道ニ避ク大鷦鷯尊亦敢テ位ニ即カス相讓ル〓三年ノ久シキニ及ヒ皇太子兄王ノ志奪フベカラサルヲ知リ遂ニ自殺ス是ニ於テ群臣强テ勸テ大鷦鷯尊ヲシテ位ニ即カシム之ヲ仁德天皇トス

〔22〕

仁德帝ノ仁政

天皇常ニ敬慮ヲ民生ノ〓ニ尽サセ玉ヒ曾テ高臺ニ登リテ炊烟ノ稀少ナルヲ見テ民ノ貧窮ヲ知リ自ラ節儉ヲ行ヒ宮敗レ垣頽レ𪜈修メス租稅ヲ除ク〓三年ニシテ復タ高臺ニ登リ炊烟ノ大ニ起ルヲ見テ喜テ曰ク朕既ニ富メリ皇后曰ク屋漏リ衣敗ル何ソ富メリト云ハン天皇曰ク天ノ君ヲ立ツルハ民ノ爲ナリ民ハ貧ハ則チ朕ノ貧ナリ民ノ富ハ即チ朕ノ富ナリト民相率テ宮室ヲ修メントヲ乞フ許サス又三年ヲ經テ始テ之ヲ許ス人民子ノ如ク來リ宮殿日ナラスシテ成ル

〔23〕

佛教渡來ノ始末ヲ問フ

欽明天皇ノ朝百濟ヨリ佛像及經論ヲ献ス此時蘇我稻目之ヲ奉セント請フ物部尾輿等之ヲ排斥シテ曰ク我國天地宗社ノ群神載テ祀典ニアリ今蕃神ヲ敬セハ恐ラクハ其怒ヲ致サント然ルニ帝聽カス遂ニ之ヲ稻目ニ賜フ稻目大ニ喜ヒ宅地ヲ捨シテ寺ヲ建テ之ヲ安置ス之佛敎ノ我國ニ入ル始トス

〔24〕

醫術ノ始ヲ問フ

大己貴命ハ醫師ノ祖ト稱セラレ大古已ニ其法アリシカ如シト雖モ外國ノ醫法ハ仁德帝ノ時大尙少尙ノ二人三巴汶ヨリ歸リシニ始ルト云フ

〔25〕

佛教ノ我國ニ渡來セシニヨリテ如何ナル影響ヲ生セシヤ

佛敎渡來ノ後其一般ニ弘マルニ及ヒテハ爲ニ風俗大ニ變化シテ柔弱ノ風ヲ長シ寺院ノ建設甚タ多クシテ僧尼ノ如キ遊食ノ民甚タ增セリ又上古ハ一般ニ肉食ノ行ハレシト雖モ佛敎傳來シテ殺生ヲ禁セシヲ以テ肉食ノ度大ニ減シタリ而ルニ之カ爲ニ殺伐ノ氣風ヲ減シ種々ノ工藝ヲ傳ヘシカ如キハ其利ナリト

云ヘルヘラス

〔26〕 蘇我馬子政ヲ專ニスルノ原因如何

用明天皇ハ蘇我氏ノ出ナリ崇峻天皇ハ馬子ノ立ル所ニシテ亦蘇我氏ノ出ナリ故ニ馬子策立ノ功ヲ恃ミ外舅ハ勢ヲ藉リテ其權ヲ專ニセルナリ

〔27〕 蘇我氏專權ノ例ヲ擧ヨ

蘇我馬子既ニ物部守屋ヲ殺シテ復タ憚ル所ナシ崇峻天皇之ヲ惡ミ竊ニ誅ヲ加ヘントス馬子畏レ遂ニ人ヲシテ弑逆ヲ行ハシム馬子死シテ其子蝦夷繼キテ大臣トナリ遺詔ヲ矯テ舒明天皇ヲ立ツ入鹿ニ至リテハ專横父ニ過キ大ニ第宅ヲ起シテ宮室ニ擬シ自ラ宮門ト稱ス遂ニ山背王ノ衆望アルヲ忌ミ兵ヲ遣シテ之ヲ殺ス其暴逆專横極リナク復タ忌ミ憚ル所ナシ宜ナリ久シカラスシテ誅戮ニ遇フヤ

〔28〕 我國ニ成文ノ法律アルハ何レノ時代ニ始マリシヤ

推古天皇ノ時廐戸皇子憲法十七條ヲ撰ヒシニ始ル

〔29〕 中大兄皇子蘇我氏ヲ誅セラレシヿヲ問フ

蘇我入鹿專横ニシテ潛ニ非望ヲ企ツ中臣鎌足慨然トシテ匡濟ノ志アリ機ヲ見テ之ヲ皇子ニ告ク皇子乃チ鎌足及蘇我石川麻呂ト共ニ之ヲ誅センヿヲ謀ル會三韓ノ使者來リ天皇之ヲ太極殿ニ見ル時ニ入鹿帝ノ側ニ侍ス此時ニ乘シテ入テ之ヲ誅シ奏シテ曰ク入鹿天崇ヲ滅シ竊ニ天位ヲ奪ハンヿヲ謀ル臣等宗廟ノ爲ニ之ヲ誅スト遂ニ兵ヲ遣シテ蝦夷ヲ誅ス蘇我氏權ヲ專ラニスルヿ三世六十余年ニシテ亡ブ嗚呼此誅戮ニ遇フ蓋シ自ラ招ク所ノ禍ナリ蝦夷誅セラルヽニ及テ多ク圖書ヲ燒ク舊記ノ亡ブルモノ甚タ多シ惜ムベキナリ

〔30〕 上古ニ行ハレシ租稅ノ法ハ如何ナルモノナリヤ

政治簡單ナルノ時世ニ在テハ租稅亦輕キハ固ヨリナリ神武天皇ノ頃ハ之ヲ詳ニスルヲ得ス崇神天皇ニ至リテ租庸調ノ法ヲ設ケ重ニ米穀ヲ徵シ布帛之ニ次ク但シ一定確立セル精密ノ稅法アリシニハアラサルニ似タリ

〔31〕 上古兵制ノ大要如何

上古兵ハ農ヲ別タス故ニ平時田ヲ耕シ野ニ耘ルモノモ時ヲ以テ武ヲ講シ事アレハ則チ臨時徵發ニ應シ戰陣ニ望マサルヲ得サルナリ

〔32〕 外國ト交通スルノ濫觴ハ何レノ時ニアルヤ

崇神天皇ノ時任那國入貢ス之ヲ外交ノ濫觴トス任那ハ始メ加羅ト稱ス俗ニ支那及三韓ヲ「カラ」ト呼ブハ之ニ原ツクナリ

〔33〕 雄畧天皇繼体天皇農蠶ノ業ヲ勸メ玉ヒシ事蹟イカン

雄畧天皇皇妃ヲシテ躬ラ桑ヲ取リテ蠶事ヲ勸メシメ諸國ニ令シテ桑ヲ植ヘシム繼体天皇亦詔ヲ下シテ

郡僚百姓ニ諭シ大ニ農蠶ノ業ヲ奬勵セラル

〔34〕 上古ニアリテ犯罪ノ判決ヲナスハ如何ナル法ヲ用ヒシヤ

上古ハ固ヨリ一定ノ法律ナシ唯有司ノ意ニ隨テ之ヲ行フノミ其重キモノハ死ニ處シ輕キモノハ或ハ杖シ或ハ黥シ或ハ収テ奴トナス又別ニ被除ノ法アリ神祇ニ祈リテ其罪ヲ解除セシム或ハ湯ヲ探ラシメテ以テ寃獄ヲ斷スルノ法アリ武内宿禰弟ニ讒セラレシ時探湯法ヲ行ヒ以テ其寃ヲ判セラレシカ如キ其例ナリ

〔35〕 我國支那ト交通スルノ始ハ如何

推古天皇ノ時小野妹子ヲ隨ニ遣ス國書ノ畧ニ曰ク日出ル所ノ天子書ヲ日沒スル所ノ天子ニ致ス恙ナキヤト之ヨリ前既ニ支那ト通セシヿアリシガ此ニ至テ始テ使聘ノ禮ヲ行フ

〔36〕 上古神ヲ尊ヒ祭ヲ重スルノ風如何

令ヲ臣下ニ下サントスルヤ先ツ神ニ誓ヒ兵ヲ海外ニ出サントスルヤ弓矢ヲ神祠ニ納ム蓋シ神武天皇中國平定ノ後神籬ヲ立テ八神ヲ祭リシニ起ルナリ日本武尊東征ノ時先ツ神宮ニ謁シ神功皇后三韓征伐ノ時神敎ヲ以テ意ヲ決セシカ如キ其例ナリ

〔37〕 繪畫彫刻等ノ美術ハ何レノ時代ヨリ其發達ヲ見シヤ

上古ヨリ其法アリシカ如シト雖ヒ其發達ヲ見シハ三韓ヨリ之ヲ傳ヘシ後ニシテ佛教渡來以後大ニ其進歩ヲ見ル

〔38〕 上古人民ノ風俗及ヒ生活ノ狀態如何

神武天皇ノ時マデハ人民多ク巢居穴處シテ家屋ヲ搆ヘス假令家屋ヲ建ルモ其建築極テ粗ニシテ低矮ナルモノヽミナリ一般ノ風俗質素ナリト雖モ倫理固ヨリ行ハレス東夷ノ如キニ至テハ强暴頑固ヲ免カレス衣服ノ如キハ窄袖ニシテ結束スルニ條帶ヲ以テス後世ノ濶大ナルカ如キモノニアラサリシガ三韓交通ノ後ニ至テ次第ニ變化セルカ如シ上古ノ人民固ヨリ定食ナシ飢フレハ山野ヲ徘徊シテ木實ヲ求メ河海ヲ彷徨シテ魚貝ヲ漁シ以テ之ヲ食ス食乏シケレハ乃チ相鬪フ後社會ノ秩序進歩スルニ及テハ朝夕二食ニシテ中食ヲ用フルヿナカリキ頭髮ノ如キハ男女共ニ幼時ハ垂髫ニシテ長スルニ及テ之ヲ兩分シテ左右ニ結ヒ男女皆櫛ヲ挿ス要スルニ衣食住ニ關スル總テノ事柄ハ應神天皇以後變改セシモノ多キニ居ル

〔39〕 始テ曆日ヲ用ヒシハ何帝ノ時ナルヤ

推古天皇ノ時始テ曆ヲ用フ

〔40〕 斗升斤量ノ制ヲ一定セシハ何レノ時代ナルヤ

舒明天皇ノ時始テ之ヲ定ム

〔41〕 上古政治ノ狀態如何

政治甚タ簡易ニシテ繁文ナラス唯宮中ノ宿衛アリ外朝ノ執政アリ而シテ諸國ニ國造縣首等アリテ其職ヲ世襲ス要スルニ祭政一致ノ治体ニシテ官制文武ヲ別タス兵刑職ヲ異ニセス後成務天皇大臣ヲ置キ仲哀天皇大連ヲ置クニ至リテ制度頗ル改マレリ

〔42〕 年號ノ始ヲ問フ

孝德天皇元年始テ年号ヲ立テ、大化ト云フ時ニ紀元千三百五年ナリ

〔43〕 大化改新ノ概要ヲ問フ

之ヨリ先キ國造縣首其職ヲ世襲シテ稍ク封建ノ体ヲナセリ是ニ至リ之ヲ廢シテ郡縣トナシ國司郡司ヲ置キテ地方ヲ治メシム又戸籍班田及租稅ノ制ヲ定メ始テ八省百官ヲ置キ國中悉ク朝廷ノ直轄スル所トナリ國勢大ニ一變セリ之レヲ我國勢第一ノ大變遷トナス

〔44〕 左右大臣并内臣ヲ置クノ始ハ如何

孝德天皇ノ朝ニ在リ天皇位ニ即クノ始メ阿部内麻呂ヲ左大臣トシ蘇我石川麻呂ヲ右大臣トシ中臣鎌足ヲ内臣ニ任ス

〔45〕 大化新政ノ前後ニ於ル國勢ヲ對照セヨ

新政以前大臣大連其職ヲ世襲シテ次第ニ封建ノ勢ヲ養成シ朝廷ノ威冷行ハレス租稅ノ如キハ全國一定ノ法ナク各地ノ族長恣ニ之ヲ課シ其勢漸ク强クシテ中央政府ノ權力削弱ヲ免カレザリシガ新政以後ニ至テハ國勢一變シテ郡縣ノ制トナリ地方族長ノ權力ヲ殺ギ租稅ヲ一定シ律令ヲ定メ漸ク中央集權ノ勢ヲナス

〔46〕 孝德帝ノ時上古ノ兵制一變セシ次第ハ如何

孝德帝臣連以下國造縣首ノ其部曲ヲ統屬スルヲ罷メ地方豪族ノ兵權ヲ解キテ之ヲ兵部省ニ管シテヨリ上古ノ兵制遂ニ大ニ一變スルニ至レリ然レ𪜈此時未タ兵農ノ別アラス

〔47〕 孝德帝ノ德政ハ如何ナルヿゾ

帝心ヲ人民ノ休戚ニ注ギ鐘置ヲ朝ニ設ケテ下情上達ノ道ヲ謀ル蓋シ尊長ノ訴訟ヲ審理セサルモノアレハ牒ヲ置ニ入レ寃抂アルモノハ鐘ヲ撞キテ之ヲ訴ヘシムルナリ又百姓ノ恣ニ土地ヲ賣買シテ私利ヲ謀ルモノヲ嚴禁シテ以テ貧弱ヲ兼併スルヲ得サラシム天下之ヲ喜ブ

〔48〕 重祚ノ初例ヲ問フ

孝德天皇崩シテ皇極天皇再ヒ踐祚シ玉フ之ヲ齊明天皇トス重祚此ニ始ル

〔49〕 中臣鎌足ノ人トナリヲ問フ

鎌足人トナリ忠亮ニシテ知テ言ハサルナク博學ニシテ器畧アリ典禮ヲ制シ律令ヲ定ムル多ク其手ニ出ヅ

〔05〕 天智天皇ノ時文物ノ景況如何

天皇學ヲ好ミ治体ニ明ニシテ學校ヲ興シ典禮ヲ制シ文物憲章粲然トシ見ルベシ後世天皇ヲ稱シテ中興ノ主トス

〔51〕壬申ノ亂トハ如何

天智天皇崩スルニ臨ミ後事ヲ皇弟大海人ニ屬ス大海人疾ト稱シ固辭シテ髮ヲ削リ吉野ニ入ル時人語テ曰ク虎ヲ山ニ放ツカ如シト太子大友立ツニ及ンテ大海人遂ニ兵ヲ擧グ天皇之ヲ拒キ戰敗レテ走テ山前ニ至リ自ラ縊レテ崩ス歳壬申ニ在リ故ニ之ヲ壬申ノ亂ト云フ

〔52〕近江朝ノ令トハ如何

天智天皇中臣鎌足等ト謀リ唐制ニヨリテ我國ノ古典ヲ斟酌シ新ニ律令ヲ制定ス之ヲ近江朝ノ令ト云フ蓋シ天皇此時近江大津宮ニ御セシヲ以テナリ

〔53〕始テ漏刻ヲ置キシハ何レノ時ナルヤ

天智天皇ノ四年ニアリ

〔54〕天智天皇以後ハ如何ナル風俗トナリシヤ

政治ノ狀態支那風トナリテヨリ衣服飲食ノ如キ其他ノ風俗亦大ニ變シ殊ニ元正聖武ノ朝以後ニ至テハ文弱ノ風養ハレテ勇壯ノ風俗廢レタルガ如シ

〔55〕男女ヲシテ始テ結髮セシメタルハ何帝ノ時ナルヤ

天武帝ノ朝ナリ

〔56〕兵農ノ別ルヽハ何レニ兆セシヤ又其判然分立セシハ何レノ時代ナルヤ

持統天皇人民ヲ四分シ其一ヲシテ武事ヲ習ハシムヽ之レ其兆ニシテ光仁帝冗兵ヲ省キテ農耕ニ就カシメシヨリ兵農全ク分レタリ

〔57〕世ニ大寶ノ治ト稱スルハ如何

文武天皇大寶令ヲ發シテ沿革一ナラサリシ所ノ冠位ノ制ヲ改メ易ルニ位記ヲ以テシ尋キテ又律令及ヒ度量ヲ天下ニ頒ツ又京都ニ大學ヲ置キ諸國ニ國學ヲ置キテ大ニ學事ヲ奬勵ス之ヨリ文物典章ノ美大ニ備ハル世之ヲ大寶ノ治ト稱ス

〔58〕元正天皇ノ時ニ至リ中央集權ノ制度全ク成レリト云フ其來歷ヲ聞カン

天智天皇大ニ律令ヲ制定シ天武天皇之ヲ修正シ後文武天皇ニ至リテ大寶律令ヲ制定ス元正天皇更ニ之ヲ修飾シテ新令ヲ制定シ之ヲ養老律令ト云フ初メ大化ノ新政ニ於テ國勢一變シ紀綱大ニ備ハレリト雖モ未タ全ク行ハレサル所アリシカ是ニ至テ中央集權ハ制全ク成レリ

〔59〕始テ金銀銅ヲ發掘セシ時代ヲトフ

天武天皇ノ時對島ヨリ銀ヲ出シ文武帝ノ時對島又金ヲ獻ス元明天皇ノ時ニ至リ武藏國ヨリ始テ銅ヲ獻ス

〔60〕始テ銅錢ヲ鑄リシハ何レノ時ナルヤ

元明天皇ノ時武藏國ヨリ銅ヲ獻ス詔シテ元ヲ和銅ト改メ命シテ銅錢ヲ鑄ラシム之ヲ其初トス

〔61〕袴ヲ右ニスルハ何レノ時代ニ始ルヤ

上古ハ左袴ノ風ナリシガ元正帝ノ時詔シテ袴ヲ右ニセシム

〔62〕奈良ノ朝トハ如何

元明天皇ヨリ元正聖武孝謙淳仁稱德ノ五朝ヲ經テ光仁ノ朝ニ至ル八十余年間都ヲ大和國奈良ニ定メテ他ニ移ラス之ヲ奈良ノ七朝ト云フ所謂六國史ノ成ルハ此朝ノ時ニアリ此間或ハ調庸ノ斤量長短法ヲ定メ或ハ天下ノ百姓ヲシテ袴ヲ右ニセシメ或ハ婦女ノ服制ヲ定メ或ハ孝順節義ノモノヲ旌表シテ風教大ニ行ハル

〔63〕瓦屋ヲ築クハ何レノ時代ニ始ルヤ

佛法東漸ノ後建築ノ法大ニ改マリシト雖モ中古ニ至ルマテ尙官舍寺院ノ外ハ皆板屋草舍ノ制ナリシガ營ミ難クシテ破レ易キヲ以テ聖武帝ノ時五位以上及庶人ノ營辨ニ堪フルモノハ瓦ヲ以テ屋ヲ葺カシム之レヨリ物變リ星移リ漸ク風ヲナスニ至レリ

〔64〕痘病流行ノ始ハ如何

聖武天皇ノ天平七年始テ支那ヨリ傳染シ夭死スルモノ甚多シ

〔65〕天皇削髮ノ始ハ如何

聖武帝深ク佛法ヲ信ジ自ラ三寶奴ト稱ス位ヲ讓ルニ及テ遂ニ髮ヲ削レリ之レ其始ナリ

〔66〕始テ盂蘭盆會ヲ行ヒシ時代ヲ問フ

齊明天皇ノ時始テ之ヲ行ヒ聖武天皇ノ時ヨリ恒典トナス

〔67〕假名ノ權與ハ如何

片假名ハ聖武天皇ノ朝吉備眞備漢字ノ點畫ヲ省キテ之ヲ作リ平假名ハ嵯峨天皇ノ時眞言宗ノ祖空海漢字ヲ草畧シテ之ヲ作ルト云フ

〔68〕教育ノ庶民ニ普及スルハ何レノ時ニ始ルヤ

孝謙天皇全國ニ令シテ每家必ス孝經一本ヲ備ヘ之ヲ誦セシム之レヨリ教育民庶ニ普及セリ

〔69〕藤原廣嗣ノ叛ヲ問フ

廣嗣上書シテ時政ノ失ヲ言ヒ僧玄昉等ノ姦ヲ指斥ス朝議以テ謀反トナシ兵ヲ發シテ之ヲ討ツ廣嗣時ニ太宰少貳タリ自ラ將トシテ豐前板櫃川ニ至ル佐伯常人呼テ曰ク廣嗣叛ス之ニ與スルモノハ族誅ヲ免レスト廣嗣馬ヨリ下リ拜シテ曰ク敢テ謀反ヲナスニ非ス唯姦臣ヲ誅セント請フノミ常人曰ク官符ヲ矯テ兵ヲ發ス之レ叛ニ非スンハ何ヲカ叛ト云ハンヤ廣嗣荅フル能ハス馬ニ上リテ退ク衆皆散シ去ル廣嗣遂ニ捕ヘラレテ斬ラル

〔70〕 僧道鏡ハ如何ナル人物ゾ

道鏡君臣ノ分ヲ辨セス天皇ノ寵ヲ恃ミテ氣滿チ意驕リ暴逆甚シク搢紳ヲ凌侮シ百姓ヲ虐使ス加之衣食皆供御ニ擬シ竟ニ天位ヲ奪ハントスルニ至ル此道鏡何者ゾ敢テ万世一系ノ國体ヲ汚サントスルニ至ル此道鏡何者ゾ敢テ万世一系ノ國体ヲ汚サントスル驕傲飽クマテ知ラサルノ妖僧神人共ニ許サヽル所余輩復言フ所ナ知サルナリ

〔71〕 和氣清麻呂忠烈ノ事蹟ヲ舉ヨ

僧道鏡傲極マリナク遂ニ非望ヲ企ツルニ至ル此時太宰ノ主神道鏡ニ諂ヒ宇佐八幡ノ託宣ト詐リ道鏡ヲシテ位ニ即カシメハ國家治平ナラントト奏ス天皇乃チ和氣清麻呂ヲ宇佐ニ遣ハシテ更ニ神敎ヲ受ケシム此時滿朝ノ百官皆道鏡ノ鼻息ヲ伺フノミ一人ノ氣節ヲ有スルモノナシ清麻呂歿スルニ臨ミ道鏡息威ヲ以テ之ヲ嚇シテ曰ク我ヲシテ天位ニ即カシメハ汝ヲ以テ太政大臣トセン然ラスンハ劍アルノミト清麻呂忠魂義膽鐵ヨリモ堅シ豈妖僧ノ威嚇ニ屈スルモノナランヤ歸リテ神敎ヲ奏シテ曰ク我國開闢以來君臣ノ分定ル未タ臣ヲ以テ君トセシヿアラス天ツ日嗣ハ必ス皇胤ヲ立ツヘシ道鏡何者ゾ敢テ天位ヲ覬覦ス速ニ誅戮ヲ加フヘシ滿朝ノ百官色ヲ失フ清麻呂遂ニ道鏡ノ爲ニ大隅ニ流サルト雖モ道鏡遂ニ志ヲ遂クルヲ得ス若シ此時清麻呂ナカリセハ或ハ言フニ忍ヒサルノヿアリシヤモ未タ知ルヘカラス嗚呼清麻呂ノ精忠日月ト明ヲ爭フト云フヘシ

〔72〕 延曆遷都ノヿヲ問フ

〔73〕 桓武天皇和氣清麻呂ノ奏議ヲ用ヒ玉ヒ山背葛野郡宇太邑ノ地ヲ相テ宮城ヲ營ム平安城即京都之ナリ山河禁帶自然ニ城ノ形ヲナスヲ以テ詔シテ山背ヲ改テ山城トス

〔74〕 歷朝ノ諡号ヲ定メシハ何レノ時ゾ

古來列朝皆稱スルニ諱ヲ以テセシカ孝謙帝ノ朝淡海三船ヲシテ神武天皇以來ノ諡号ヲ定メシム

〔75〕 我國刻版ノ始ハ如何

稱德天皇ノ朝陀羅尼經ヲ刻セシムルニ始マル

〔76〕 天台宗並ニ眞言宗ノ始ハ如何

桓武帝ノ朝近江ノ人最澄唐ニ往キテ佛法ヲ學ヒ歸朝シテ天台宗ヲ開ク嵯峨天皇ノ朝讃岐ノ人空海亦唐ニ往キ歸朝シテ眞言宗ヲ開ク之ヲ其始トス

〔77〕 帝都ヲ京都ニ定ムルノ前歷朝遷都ノヿ如何

上世ハ百事簡易ニシテ皇居ノ結構亦宏大ナラス隨テ宮ヲ移スモ民力ヲ勞セサルヲ以テ屢遷都ノヿアリ長キモ一百年短キハ三四年ニ過キス故ニ皇居ノ移轉四十餘ケ所ノ多キニ至ル延曆ノ遷都アルニ及テ都城ノ制始テ完シ

坂上田村麿ハ如何ナル人ナリシヤ併テ其効績ヲ記セヨ

狀貌魁偉ニシテ赤面黃鬚膂力亦人ニ絕ス其喜ヒ笑フトキハ老幼婦女ト雖狎レ親ミ怒ルトキハ猛獸モ亦慴伏

ス曾テ紀古佐美ノ蝦夷ヲ伐ツヤ夷民猖獗ヲ極メ遂ニ功ナクシテ歸ル是ニ於テ田村麻呂俞ヲ奉シテ之ヲ伐チ其巢窟ニ入リテ酋長ヲ誅シ殺獲殆ト盡ク之ヨリ先キ邊境屢事アリ是ニ至リテ永ク王化ニ歸ス蓋シ田村麿ノ功績ナリ

〔78〕

藤原氏專權ノ由來スル所如何

其祖鎌足孝德齊明天智三朝ニ歷事シテ中興ノ偉業ヲ立テ其子不比等亦元明元正ノ二帝ヲ補佐シテ功アリ不比等ノ長女聖武帝ヲ生ミ二女亦聖武帝ノ后トナル藤原氏世々外戚トナルハ之ヨリ始マル不比等ノ子百川光仁天皇及桓武天皇ヲ擁立シ清和帝ノ朝ニ至リテハ天皇尙幼ナルヲ以テ外祖良房政ヲ攝ス人臣ノ攝政此ニ始マル之ニ於テ藤原氏專權ノ基成リ世々幼主ヲ擁立シテ萬機皆其欲スル所ノマヽナリ其專權ノ由來スル所亦遠シト云フヘシ

〔79〕

關白職ノ始ハ如何

藤原基經政權ヲ執ル一十五年三朝ニ歷事シテ攝政タル一良房ノ故事ノ如シ宇多帝ノ世ニ至リ萬機皆基經ニ關白セシム關白ノ稱此ニ始ル

〔80〕

菅原道眞ノ人トナリヲ記シ併テ其貶謫ノ事實ヲ述ヨ

道眞碩儒ヲ以テ名アリ治体ニ明ニシテ裁決流ルヽカ如ク君ヲ格シ治ヲ致スヲ以テ自ラ任シ眼中皇室國家アリテ私利私福ナク只身ヲ以テ君恩ニ報スルヲ知ル未タ君恩ヲ忘レテ身ヲ完フスルヲ知ラス天下風采ヲ仰望ス是ヲ以テ道眞大ニ殊遇ヲ受ケ其身藤原氏ニアラスシテ累進甚タ速ナリ醍醐天皇藤原時平ヲ左大臣トシ道眞ヲ右大臣トス時平年少ク氣鋭ク私ニ道眞ヲ嘲ミ固ク執テ相下ラス既ニシテ天皇宇多法皇ト謀リ左右大臣兩立シテ統一スル所ナキヲ以テ道眞ヲシテ庶政ニ關白セシメントスルノ議アリ時平之ヲ聞キ遂ニ道眞ヲ讒シテ廢立ヲ謀ルト奏ス天皇震怒道眞ヲ貶シテ太宰權帥トス法皇大ニ驚キ道眞ヲ救ハントス及ハス天下之ヲ惜ム道眞配所ニ在リト雖モ未タ曾テ聖恩ヲ忘レス意詩歌ニ見ハル

〔81〕

宇多天皇菅原道眞ヲ登用セラレシ意如何

帝固ヨリ藤原氏ノ專横ヲ憤ル其道眞ヲ登用セラレシハ即チ藤原氏ノ威權ヲ抑ヘントスルノ意ニ出ルナリ蓋シ藤原氏ノ一族ニアラサルノ道眞ヲ拔擢シテ大ニ之ヲ用ヒ儲嗣ヲ立ルノ一位ヲ禪ルノ一皆道眞ニ謀リ玉フ其意知ルヘキナリ而シテ與ニ謀ルヘキモノ道眞ヲ除テ他ニ其人ナシトナセルモノヽ如シ

〔82〕

醍醐天皇ノ仁政

天皇慈仁ニシテ蒼生ヲ愛シ曾テ寒夜ニ方リ御衣ヲ脫シテ民間凍餒ノ苦ヲ察セラル又常ニ温顏ヲ以テ群臣ニ接シ以テ直言ヲ求ム曾テ曰ク威嚴外ニ見ハルレハ臣下言ヲ盡シ難シト其意ヲ政治ニ用ヒ下情ヲ知悉セントスル此ノ如シ世以テ仁德天皇ニ比シ後世治ヲ言フモノ亦必ス延喜ヲ稱スルハ之カ爲ナリ

〔83〕

延喜ノ朝文學ノ景況如何

延曆以後國家治平ニシテ曆朝文學ヲ重シ從テ俊才學士多ク輩出シ延喜ノ朝ニ至テ文運最モ隆盛ヲ極メ

學生ヲシテ專ラ經史文章ヲ講セシム又支那文學ノ隆盛ナルト共ニ邦文ヲ學ヒ和歌ヲ詠スルノ道モ亦大ニ進歩セシヲ見ル蓋シ假字發明以來大ニ本邦固有ノ文學ヲシテ發達セシメタルモノアル亦疑ヲ容レス

〔84〕

天皇ノ諡ヲ廢セシハ何レノ時代ナルヤ

朱雀天皇承平元年宇多法皇崩ス遺詔シテ諡號ヲ奉スルヿナカラシム天皇ニ諡號ヲ奉セサル此ニ始ル

〔85〕

天曆ノ治トハ如何

村上帝寛仁ニシテ恩ニ偏私ナシ心ヲ政治ニ留メ學ヲ好テ文藻ニ富ム嘗テ一老吏ニ問テ曰ク朕カ治延喜ノ朝ト得失如何吏對テ曰ク臣何ヲカ知ラン唯主殿寮多ク松明ヲ進メ率分堂ニ草生スルヲ見ルノミト帝大ニ愧チテ鋭意治ヲ謀ル世稱シテ天曆ノ治ト云フ蓋シ老吏ノ對フル處ハ其意劇務夜ニ入リ歳貢却テ少キヲ云フナリ

〔86〕

藤原道眞貶セラレシ後藤原氏ノ權勢如何

延喜天曆ノ朝天下大ニ治リ後世治ヲ云フモノ亦指ヲ此ニ屈スル程ナリト雖モ然レモ道眞既ニ貶セラレシヨリ紀綱振ハス政令復タ全ク藤原氏ノ手ヨリ出ツルニ至リ天智桓武ノ業遂ニ替ルヿヨリ藤原氏ノ權勢益張リ冷泉天皇心疾ヲ患フルニ及ンテハ其專横復制スヘカラサルニ至レリ外祖政ヲ攝スルノ弊是ニ至テ極マレリト云フヘシ

〔87〕

天慶亂ノ概畧ヲ記セヨ

平將門勇悍人ニ過ク攝政藤原忠平ニ仕ヘ撿非違使タランヿヲ求ム忠平省ミス乃チ去テ關東ニ趣キ伯父常陸大掾國香ヲ攻メテ之ヲ殺シ遂ニ叛シテ府ヲ猿嶋ニ建テ自ラ新皇ト稱ス武藏權守興世王謀主タリ時ニ藤原純友伊豫掾タリ任滿テ歸ラス所在ヲ抄掠シ遙ニ將門ニ應ス初メ將門京師ニ在リ嘗テ相共ニ叡山ニ登リ皇居ヲ指シテ曰ク大丈夫當サニ此ニ居ルヘシ更ニ純友ニ謂テ曰ク他日志ヲ得ハ我ハ王族當ニ天子トナルヘシ子ハ藤原氏宜ク關白タルヘシ蓋シ將門ハ桓武帝ノ皇子葛原親王ノ裔ナリ故ニ之ヲ負メリ此ニ至テ純友遂ニ叛シテ將門ニ應セルナリ朝廷即チ藤原忠文ヲ征東大將軍トシ小野好古ヲ山陽道追捕使トシ以テ東西ノ軍ヲ討ス忠文好古未タ至ラス平貞盛藤原秀郷ト將門ヲ討チテ之ヲ殺シ藤原國風純友ヲ討シテ之ヲ走ラス好古進ミ討テ之ヲ敗リ共ニ首ヲ京師ニ傳フ東西ノ賊此ニ於テ平ク之ヲ天慶亂ト云フ

〔88〕

源平二氏世々武臣トナルノ原因ヲ聞カン

天慶ノ亂平貞盛將門ヲ討チテ之ヲ平ケ源經基純友ヲ討シテ功アリ他日源平二氏政權ヲ爭フノ遠因タル即チ此時ニ在リ又後白河天皇即位ノ初メ保元ノ亂アリ事皇統ノ爭ヨリ起ル此時源平二氏大ニ勳功ヲ立テ殿上文弱ノ人々ハ眞ニ無用物視セラルヽニ至リ大ニ二黨ノ勢力ヲ得タリ之レ其近因ナリ後平氏ノ威一旦源氏ヲ壓シテ政權ヲ執ルト雖モ復源氏ノ爲ニ覆サルヽニ至ル其間幾多ノ歳月ヲ經ルト雖二氏天下ヲ爭フ遠ク以上ノ二因ニ原ツクト云ハサルヘカラス

〔89〕

藤原氏ハ如何ナル手段ヲ以テ政權ヲ掌握セシヤ

藤原氏初メハ祖先ノ功ニヨリテ政權ヲ執リシト雖モ後遂ニ外戚ノ威ヲ以テ攝政關白トナリ天下ノ大權ヲ擅ニスルニ至レリ即チ其女ヲ納レテ中宮若クハ皇后トナシ皇子生ルレハ乃チ天皇ナシテ位ヲ讓ラシメ已レ外祖ヲ以テ政ヲ攝ス如此シテ常ニ幼帝ヲ擁立シ復忌ミ憚ル所ナシ之レ藤原氏カ政權ヲ專ニスル唯一ノ手段トセシ所トス

〔90〕

藤原道長專横ノ事實如何

兼家道隆道兼等皆專横ニシテ獨リ朝政ヲ恣ニスルノミナラス已ノ意ヲ以テ天子ヲ廢立スルニ至ル然ルニ道長ニ至テハ專横更ニ甚シク身ハ三帝(後一條後朱雀後冷泉)ノ外祖ニシテ女ハ四帝(一條三條後一條後朱雀)ノ后妃トナル是ニ於テ榮華ヲ極メ驕奢ヲ恣ニシ復タ忌ミ憚ル所ナク畏レ多クモ萬乘ノ天子唯拱手シテ其制ヲ受ケ玉フ藤原氏ノ盛ナル此ニ至テ極ル嗚呼外戚威ヲ弄スルノ弊何ソ一ニ此ニ至ルヤ道德ノ腐敗倫常ノ壞亂亦甚シト云フベシ

〔91〕

藤原氏權ヲ執リシ時朝廷官吏ノ風俗如何

藤原氏一族ノモノ固ヨリ爲政ノ才ナキモノ多シト雖モ唯門閥ヲ以テ政權ヲ弄シ天下意ノ如クナラサルモノナキニ至リ亦恐ルヽモノナク大ニ奢侈ヲ極メ遊宴ニ耽リ詩歌ヲ鬪ハシ唯風流ニ日ヲ送リテ心ヲ政治ニ用ヒス意ヲ武事ニ注ガス從テ一般ノ風俗柔弱淫猥ニ流レ源平二黨大ニ興起スルノ時ニ及ンテ遂ニ全ク無用物視セラルヽニ至レリ

〔92〕

藤原氏專權ノ時ニ當リ諸國武士ノ感情如何

藤原氏唯風流柔弱ノ風ニ日ヲ送リテ意ヲ政治ニ用ヒス已レ爲政ノ才ナク唯門閥ノ勢ヲ以テ其職ヲ世襲シ朝廷ノ官職其族ニ非レハ與ヘス賢良人才ノ進路ヲ塞クヲ以テ諸國ノ武士就中關東人士等大ニ憤リ專ラ武術ヲ講シテ心膽ヲ錬リ若シ一朝天下ニ事アラハ已レ大ニ勳功ヲ立テ柔弱男子ノ膽ヲ奪ハント欲スルノ念少時モ止マス遂ニ源平ノ二大黨派ヲ生スルニ至ル之レ藤原氏私福ヲ恣ニスルノ反動ニシテ亦怪ムヘキニアラサルナリ

〔93〕

藤原氏ノ時地方ノ政大ニ弛ヒシハ何故ナルヤ

政權全ク藤原氏ニ歸シテヨリ意滿チ心驕リ漸ク奢侈ニ流レ私福ヲ恣ニシ百官亦其職ヲ世襲ス而シテ地方ノ吏員躬ラ任地ニ赴クヿナク日代ナシテ代リ往カシムルヨリ地方ノ政治遂ニ大ニ弛ヒ復タ收拾スヘカラサルニ至レリ

〔94〕

藤原氏ニシテ攝關トナリシハ誰々ナリヤ

清和天皇ノ朝良房攝政タリシ以來基經(良房ノ子)忠平(基經ノ子)實賴(忠平ノ子)伊尹兼通(以上二人師輔ノ子)賴忠(實賴ノ子)兼家(師輔ノ子)道隆道兼道長(以上三人兼家ノ子)賴通(道長ノ子)相繼テ攝關トナル其間凡ソ一百數十年政治ノ實權ヲ掌握セリ其後教通(道長ノ子)師實(賴通ノ子)師通(師實ノ

子)忠實(師通ノ子)忠通(忠實ノ子)基實(忠通ノ子)相繼テ攝關トナルト雖モ敎通ノ時ニ方テ後三條帝痛ク藤原氏ノ權ヲ制シ次クニ白河帝ノ英明ヲ以テシ加フルニ風俗漸ク柔弱ニシテ源平二黨ノ勢力次第ニ强大ニ赴キ藤原氏漸ク衰運ニ向ヘリ

〔95〕

後三條帝ノ中興トハ如何

帝幼ヨリ頴悟ナリ年甫テ七歲宮ニ入テ父帝後朱雀ニ謁スルニ方リ進退自ラ度ニ適フ觀ル者皆歎服ス後朱雀帝殊ニ之ヲ愛シ立テヽ後冷泉帝ノ儲貳トナス例ニ壺切ノ劍ヲ以テ東宮ニ傳フ然ルニ帝ハ藤原氏ノ出ニ非ルヲ以テ關白賴通之ヲ肯セスシテ曰ク藤原氏ノ出ニ非レハ此劍ヲ得ヘカラス帝怒テ曰ク我何ソ此一劍ヲ用ヒン遂ニ位ニ即ク帝剛健嚴明ニシテ萬機親裁ニ出テ賞罰公平請托行ハレス痛ク藤原氏ノ權ヲ抑ヘ紀綱大ニ張ル是ニ於テ藤原氏ノ一族皆畏縮シテ手ヲ歛メ賴通亦屏居シテ政ニ關ラス敎通關白タリト雖モ唯員ニ備フルノミ惜ヰ哉在位僅ニ四年位ヲ讓ルノ明年遂ニ崩ス朝野之ヲ惜ミ賴通亦以テ我國ハ一大不幸トナス之レヨリ藤原氏ノ勢次第ニ衰フ稱シテ後三條帝ノ中興ト云フ

〔96〕

一條天皇ノ時才媛輩出ノ事實ヲ問フ

天皇ノ朝宮媛ノ才識アルモノ最モ多シ紫式部天資聰明ニシテ和歌ヲ善クシ源氏物語ノ著アリ赤染衞門モ亦和歌ニ名アリ榮華物語ヲ著シテ當時奢侈ノ風ヲ寫セリ清小納言敏達ノ才アリ和泉式部亦才名アリ皆和歌ヲ善クス其他名アルモノ少カラス當時女流ノ才學アルモノ此クノ如ク多シト雖モ從テ百官柔弱ニ流レ上下風流ニ耽リ道長權ヲ專ニシテ政令大ニ亂ル

〔97〕

前九年ノ役ヲ畧記セヨ

東夷ノ酋長安部賴時勢强大ニシテ數郡ヲ併セ有シ人民ヲ刼掠シ各地ニ橫行シテ朝命ヲ奉セス朝廷乃チ源賴義ヲ陸奥守兼鎭守府將軍トナシ之ヲ討セシム會大赦ノ令アルニ及ヒ賴時喜ヒテ兵ヲ罷ム其子貞任藤原光貞ノ營ヲ襲テ人ヲ殺傷ス蓋シ婚ヲ求メテ得サルヲ怨ムナリ賴義之ヲ罪セントス是ニ於テ賴時復叛ス賴義討テ之ヲ破リ賴時流矢ノ爲ニ死ス然ルニ貞任ノ軍勢猶ホ張ル官軍各地ニ轉戰シテ屢利ヲ失フ賴義乃チ清原武則ヲ招キ降シ共ニ進テ貞任ヲ討チ連戰シテ厨川ノ柵ニ薄リ苦戰奮鬪遂ニ樓櫓ヲ燒キ逃ルヲ追フテ貞任ヲ獲タリ東征九年ニシテ初テ平ク之ヲ前九年ノ戰ト云フ此役賴義長子義家軍ニ從テ功アリ

〔98〕

政ヲ院中ニ聽クノ始ハ如何又其旨趣ハ如何

後三條帝位ヲ讓ルノ後院中ニ在テ政ヲ聽カント欲ス果サスシテ崩ス白河天皇剛決果斷ニシテ後三條帝ノ風アリ位ヲ堀川天皇ニ讓リ自ラ院中ニ在テ政ヲ聽キ刑賞黜陟皆其意ニ出ツ蓋シ之ヨリ先キ藤氏ノ權ヲ專ニセシハ外戚ノ權ヲ以テ幼帝ヲ擁立シタルニヨル故ニ院宣ヲ以テ天下ニ号令シ以テ藤氏ノ威ヲ壓セントスルナリ

〔99〕

後三年ノ役トハ如何

清原武則ノ孫眞衡父祖ノ餘業ニヨリテ勢頗ル盛ナリ異母弟家衡事ニ因テ眞衡ヲ怨ム乃チ清衡ト共ニ
(清衡ハ眞衡ノ弟)兵ヲ發シテ眞衡ヲ襲フ鎮守府將軍源義家眞衡ヲ助ケテ家衡等ヲ攻ム利アラス會義家
ノ弟義光官ヲ辭シ來テ義家ニ會シ力ヲ戮セテ之ヲ攻メ遂ニ持久ノ計ヲナス家衡等糧盡キ柵ヲ燒テ逃ル
追テ之ヲ獲タリ義家首ヲ京師ニ献スルニ及ヒ朝議之ヲ私鬪トナシ將士ヲ賞セス義家首ヲ途ニ棄テヽ歸
ル其間年ヲ閱スル二三歲之ヲ後三年ノ役ト云フ義家前九後三ノ兩役ニ大功ヲ立テ東北ノ將士皆心ヲ歸
ス

葬制ヲ定メシハ何レノ時代ゾ又火葬ノ始ハ如何

孝德帝佛法ノ蔓延スルニ從ヒ葬儀其分ニ踰ユル者多キヲ以テ葬制ヲ定メテ之ヲ制限ス又帝ノ時僧道照
死ニ臨ミ遺言シテ火葬セシム之レ火葬ノ始ナリ但シ天皇ノ火葬ハ持統天皇ヨリ始ル

天長節及ヒ四方拜ハ何レノ時代ニ定メラレシヤ

光仁帝ノ時天皇降誕ノ日ヲ以テ天長節トナス宇多帝天地四方山陵ヲ拜ス之ヲ四方拜ノ始ナリトス

藤原氏專權以來實用文學ノ衰微セシ所以如何

上來屢記述シタルカ如ク藤氏專權ノ時ハ風俗專ラ浮華ニ流レ風流之レ事トシタルヲ以テ詩歌ノ道大ニ
進ムモノアリト雖モ然レモ之レ唯花ニ詠シ月ニ吟スルノミ國家有用ノ學ヲ講スルモノナク遂ニ文敎大
ニ衰微ヲ來シ釋典ノ禮亦衰フ

保元亂ノ原因結果如何

鳥羽法皇美福門院藤原得子ヲ寵シ其生ム所ノ體仁ヲ立テヽ崇德天皇ノ太子トス此時生レテ僅ニ三月ナ
リ法皇太子ノ早ク位ニ即カンヿヲ欲シ天皇ニ迫テ位ヲ禪ラシム之ヲ近衞天皇トス之ヨリ二宮相協ハス
之レ亂ノ原ナリ而シテ近衞天皇早世シテ嗣ナシ上皇以爲ク自ラ位ニ復スルカ然ラスンハ長子重仁ヲ立
テント然ルニ美福門院法皇ニ勸メテ帝ノ異母兄雅仁(上皇ノ弟)ヲ立ツ之ヲ後白河天皇トス蓋シ得子帝
ノ早世ヲ以テ上皇ノ呪詛ニ出ルトナシ其亂ヲ立ツルヲ欲セサルナリ法皇崩スルニ及テ上皇遂ニ兵ヲ擧
ク源義朝(爲義ノ子)平清盛帝ニ屬シ源爲義及ヒ其子爲朝上皇ニ屬ス賴長爲朝ノ計ヲ用ヰス上皇ノ軍遂
ニ敗ルヽニ及テ爲義東ニ走ラントシ病テ行クヿ能ハス即チ出降ル然ルニ朝議其子義朝ヲシテ之ヲ殺サ
シム又爲朝ヲ大島ニ流シ上皇ヲ讃岐ニ徙ス嗚呼父子兄弟相屠リテ亦之ヲ怪マス倫理ノ紊亂其レ甚ヰ哉

平治亂ノ概畧ヲ述ヨ

藤原信賴後白河上皇ニ寵セラレ近衞大將タランヿヲ請フ藤原通憲ノ爲ニ拒マレテ志ヲ得ス常ニ之ヲ含
ム源義朝亦清盛ノ勢望已レノ右ニ出ルヲ嫉ム故ニ信賴義朝ト相結テ事ヲ擧ケントス會清盛熊野ニ往ク
信賴等遂ニ兵ヲ起シ二條帝及上皇ヲ宮中ニ幽シ自ラ大臣大將トナリ義朝等ニ官ヲ授ク初メ通憲此事ア
ルヲ計リ逃テ南都ニ走ル求メ得テ之ヲ殺ス清盛重盛變ヲ聞テ熊野ヨリ歸ル時ニ藤原惟方賊ニ與スルヲ
悔ヒ密ニ帝ヲシテ宮ヲ出テシメ上皇亦服ヲ變シテ逃レ出ツ清盛乃チ勅ヲ奉シ重盛等ヲ遣ハシテ賊ヲ討

シ遂ニ之ヲ破ル義朝ハ東ニ走リ途ニシテ長田忠致ニ殺サレ信頼ハ哀ヲ求メテ聽カレス遂ニ斬ラル之ヲ平治ノ亂ト云フ

〔105〕

源頼朝ヲ伊豆ニ流スノコト如何

平治ノ亂義朝東ニ走ル三子頼朝亦從フ雪ニ阻テラレテ義朝ト相失シ佛寺ニ匿ル遂ニ平氏ニ獲ラレ宗清ノ家ニ拘セラル將ニ斬ニ處セントス清盛ノ後母池ノ尼頻リニ清盛ニ請フテ其死ヲ宥サンヿヲ求ム蓋シ宗清其幼ヲ憐ミ池ノ尼ニ詣リテ頼朝ノ容止故ノ右馬助家盛ニ肖タルヲ言フ右馬助ハ尼ノ生ム所ニシテ早ク死セリ故ニ之ヲ憐ムノ情切ナルニヨルナリ清盛乃チ其死ヲ宥シテ伊豆ニ流ス頼朝伊豆ニ至リ北條時政ニ依ル年甫テ十四

〔106〕

平氏ノ顯榮ヲ極メシ景況如何

清盛ハ鳥羽上皇ノ寵臣忠盛ノ子ナリ功ヲ以テ位人臣ヲ極メ朝政ヲ專ラニス其子重盛宗盛又皆大臣大將トナリ又其女德子ハ高倉帝ノ中宮タリ采邑五百餘所三十余國ニ跨リ平氏ノ族公卿タルモノ十六人昇殿ヲ得ルモノ三十余人衛府國司タルモノ六十余人ニ及ヒ朝廷ノ賞罰皆清盛ノ喜怒ニ出テ生殺與奪亦其欲スル所ノマヽナリ遂ニ平族ニ非レハ人ニ非スト云フニ至ル其顯榮跋扈想フヘシ榮者必衰フ顯榮ノ極亦知ルベキノミ

〔107〕

始メ平氏ノ威風最モ盛ニナリシハ何ニ基クヤ

保元ノ亂清盛義朝等ト共ニ大功ヲ立テ源平二氏ノ威大ニ強盛ニ赴キシカ平氏ノ亂起ルニ及ヒ清盛重盛等勳功ヲ立テ勢力ヲ得源氏ノ黨ハ之ニ反シ其首領義朝ヲ失ヒテ勢次第ニ衰ヘ遂ニ平氏獨リ兵馬ノ全權ヲ握リ其威海内ヲ壓スルニ至ル

〔108〕

清盛狂暴ノ事例ヲ示セ

兵權ノ在ル所政權亦之ニ歸ス清盛政權ヲ執リシヨリ跋扈日ニ甚シク忌ミ憚ル所ナク生殺與奪皆其意ニ出ツ藤原成親近衛大將タランヿヲ欲シテ得ス後白河法皇ノ密旨ヲ以テ西行ト謀リ源行綱平康頼僧俊寛ト平氏ヲ滅サンヿヲ謀ル然ルニ行綱約ニ背キテ之ヲ清盛ニ告ク清盛大ニ怒リ成親及西行ヲ殺シ康頼俊寛ヲ流シ剩サヘ法皇ヲ幽セントス其子重盛泣涕極諫シテ之ヲ止ム之ニ依リテ清盛重盛タ憚リ兇暴少シク止ムト雖モ固ヨリ其意ニ非ス故ニ重盛薨スルニ及ヒ遂ニ法皇ヲ鳥羽ニ幽シ關白以下ノ官爵ヲ奪フ而シテ殿ノ防衛甚タ嚴ニシテ人呼テ牢御所ト云フ其驕傲暴逆此ノ如シ久シカラスシテ亡滅スルモ亦自ラ招ク所ノ禍ナリ

〔109〕

重盛ノ人トナリヲ問フ

性忠誠、沈毅ニシテ度量アリ仁厚衆ヲ愛シ中外望ヲ屬ス父清盛後白河法皇ヲ幽閉セントスルニ當リ泣涕極諫シテ、假令大人事ヲ舉クルモ重盛ハ君恩ヲ受クルノ厚キ入テ禁中ヲ護セサルヲ得ス嗚呼忠ナリト欲スレハ孝ナラス孝ナラント欲スレハ忠ナラス重盛進退維ニ窮ル希クハ重盛カ首ヲ斬テ後ニ之ヲ

行ハベシト云フニ至テハ其至情ノ切ナル知ルヘキナリ抑亦父清盛ノ暴横ヲ憂ヒ爲ニ病ヲナスニ至テハ忠誠ノ情厚キニヨラスンハアラス余思フ世人重盛カ兵ヲ以テ父ヲ威スヲ議スルモノアリト雖ヒ之レ未タ重盛ノ眞意ヲ知ラサルモノナリト

〔110〕

治承ノ亂ヲ畧記シ併テ其影響ヲ示セ

源頼政平治ノ亂ニ族ヲ扳テ官軍ニ屬シ而シテ位其望ニ充タス常ニ平氏ノ跋扈ヲ憤ル其子仲綱亦平宗盛ニ辱メラレ意甚タ不平ナリ頼政乃チ高倉帝ノ庶兄以仁王ニ說キ兵ヲ擧ケンヿヲ勸ム王之ヲ許ス乃チ王ノ令旨ヲ以テ諸國ノ源氏ヲ招ク既ニシテ清盛之ヲ知リ大ニ驚キ兵ヲ遣ハシテ高倉宮ヲ圍ム頼政戰フテ敗績シ仲綱ト共ニ戰死ス王モ亦南都ニ走ラントシ流矢ニ中リテ薨ス頼政ハ一擧事成ラスシテ其目的ヲ達スル能ハサリシト雖ヒ之ヨリ諸國ハ源氏王ノ令旨ヲ得テ相繼テ起リ源頼朝ハ伊豆ヨリ木曾義仲ハ北國ヨリ起ル蓋シ頼政ノ擧ニ基スルナリ

〔111〕

源頼朝兵ヲ起スノ事ヲ記セヨ

以仁王源氏ヲ招クノ令旨至ルニ及ヒ頼朝大ニ喜ヒ密ニ兵ヲ集ム東國ノ將士頼義以來源氏ニ屬セシモノ多ク來リ從フ頼朝乃チ伊豆ノ目代平兼隆ヲ殺シ進テ石橋山ニ陣ス大庭景親平氏ノ爲ニ來リ戰フ頼朝衆寡敵セス戰遂ニ敗レ逃テ安房ニ至ル關東ノ豪傑來リ屬スルモノ頗ル多ク兵勢大ニ振フ清盛乃チ孫維盛ヲ遣ハシテ之ヲ討タシム維盛五万騎ヲ以テ富士川ニ陣シ頼朝二十万騎ヲ以テ川ヲ夾テ陣ス平軍大ニ恐レ鬪死アルモノナシ夜會水禽ノ起ツヲ見テ源兵大ニ至ルトシ相蹈籍シテ逃レ走ル維盛ハ終ニ頼朝ニ敵スヘキモノニアラサルナリ是レヨリ先キ頼朝弟義經陸奥ニ在リ是ニ至テ來テ頼朝ニ從フ頼朝大ニ喜フ

〔112〕

後鳥羽帝神器ヲ得スシテ踐祚セラレシ所以如何

平氏ノ敗走スルヤ宗盛安德帝ヲ奉シ神器ヲ擁シテ西海ニ至ル後白河法皇車駕ヲ京師ニ還サシメントスレヒ宗盛詔ヲ奉セス是ニ於テ遂ニ議シテ後鳥羽帝ヲ立ツ然レヒ神器ヲキヲ以テ唯帝ヲシテ踐祚セシメ他日神器ヲ得テ即位ノ禮ヲ行ハントスルナリ蓋シ右大臣藤原兼實ノ上言ニヨル

〔113〕

源義仲反シタルキノ事情ヲ聞カン

平維盛等義仲ト越中礪波山ニ戰フテ大敗シ京ニ歸リ義仲長驅シテ京師ニ入ルヤ宗盛安德帝ヲ奉シテ西海ニ走ル義仲京ニアリ驕恣横暴ナリ法皇義仲ニ勅シテ西征ヲ促セトモ糧乏シキヲ以テ遷延發セス京畿ヲ抄掠ス法皇之ヲ厭フテ頼朝ヲ召サントス義仲聞テ懌バス既ニシテ義仲京師ヲ發シ平氏ト水島ニ戰フテ敗績ス更ニ進テ屋島ヲ攻メントス頼朝ノ兵至ルト聞キ乃チ兵ヲ還ス法皇之ヲ止ムレヒ聞カス暴掠益甚シク遂ニ反シテ宮ヲ燒キ後鳥羽帝及ヒ法皇ヲ幽シ迫テ頼朝ヲ討スルノ院宣ヲ請フ法皇已ムヲ得スシテ之ヲ許ス然レヒ法皇固ヨリ義仲ヲ厭フ故ニ外之ヲ優待シテ内窃ニ義經等ニヨリテ之ヲ除カントス而シテ義仲悟ラス

〔114〕

平氏亡滅ノ狀ヲ記セヨ

宗盛安德帝ヲ奉シ屋島ヨリ遷リテ一ノ谷ニ據ル兵士十余万勢大ニ振フ後白河法皇範頼義經ヲシテ之ヲ討タシム範頼東門ヲ攻メ義經兵ヲ分チテ西門ニ向ハシム自ラ鵜越ノ間道ヲ踰ヘテ直ニ城後ニ達シ火ヲ縱テ三面合擊ス平軍敗レテ復屋島ニ逃ル義經大風ヲ冒シ進ミ擊テ又之ヲ敗ル宗盛帝ヲ奉シテ九州ニ至ラントシ範頼大兵ヲ以テ豊後ニ在ルヲ聞キ還テ壇浦ニ泊ス義經追擊シテ大ニ之ヲ敗ル清盛ノ妻二位尼帝ヲ抱テ海ニ投ス帝時ニ八歳ナリ知盛等皆死シ宗盛清宗擒ニセラル平氏政權ヲ專ニスル凡二世二十七年ニシテ亡フ

〔115〕

宇治川ノ戰狀ヲ畧記スベシ

賴朝二弟範賴義經ヲ遣ハシ義仲ヲ京ニ攻メシム義經ハ宇治ヨリ範賴ハ勢多ヨリ道ヲ分テ京師ニ向フ義仲亦兵ヲ分テ之ヲ拒ク義經進テ宇治川ノ東岸ニ至ル佐々木高綱梶原景季先ヲ爭ヒ流ヲ亂シテ進ミ義經全軍之ニ繼ク義仲舊戰スト雖遂ニ支フル能ハス時ニ範賴亦多勢ヲ破テ進ム義仲走テ粟津ニ至リ追騎ノ爲ニ殺サル

〔116〕

源賴朝ノ人トナリ如何

面大ニシテ身短ク沈毅ニシテ度量アリ算前定セサレハ事ヲ擧ケス義經範賴等ノ力ニヨリテ平氏ヲ滅シ家臣亦勇武ノ者多ク遂ニ覇業ヲ開クヲ得タリト雖性猜忌ニシテ義經大功ヲ立テ朝廷ノ信任厚キヲ忌ミテ之ニ酬ヒス加之遂ニ之ヲ殺シ次テ又範賴ヲ殺ス嗚呼何ソ悖亂ナルヤ嗚呼何ソ殘酷ナルヤ賴朝ノ二弟ヲ殺ス之レ自ラ其羽翼ヲ斷ツモノト云ハサルベカラス

〔117〕

平氏遂ニ源氏ノ爲ニ滅サルヽニ至リタルニハ如何ナル原因アルヤ

初メ平治ノ亂ニ大功ヲ立テ平氏獨リ兵馬ノ權ヲ執リ政權ヲ掌握スルニ及ヒテハ復顧慮スル所ナク驕奢放逸遂ニ復藤原氏榮華ノ轍ヲ慕ヒ次第ニ文弱ニ流レ詩歌管絃ノ遊ニ耽リ衣冠ノ華美モ此時ニ極マレリト云フ遂ニ源氏ノ黨再ヒ起リテ之ヲ討滅スルニ至レルハ復免ルベカラサルノ數ト云ハサルベカラス

〔118〕

中古僧徒跋扈ノ事如何

白河帝ノ朝ヨリ僧徒大ニ勢力ヲ得テ恰モ武士ノ如ク兵仗ヲ蓄ヘ軍馬ヲ備ヘ或ハ互ニ相爭鬪シ或ハ武門ニ抗シ甚シキニ至テハ朝命ヲ奉セス朝廷亦之ヲ如何トモスル能ハス白河帝歎シテ曰ク天下朕カ命ヲ用ヒサルモノナシ唯意ノ如クナラザルモノハ双陸ノ采鴨河ノ水及ヒ山僧ノミト以テ其勢力ノ强大ナリシヲ知ルヘシ賴朝ノ時ニ至テ命シテ兵仗ヲ收メ僧徒ヲシテ專ラ其宗旨ノ學ニ就カシム

〔119〕

白河帝ノ頃ハ如何ナル風俗ナリシヤ

天皇ノ豪邁ヲ以テスルモ尙積習ヲ改ムル能ハシト見ヘ上下華麗ヲ極メ卑賤ノ女子亦文繡ヲ被ル帝亦詩歌ヲ好ミ和歌ヲ鬪ハス等ノ能アリ文雅風流ノ遊宴尙ホ已マス加フルニ屢營造ヲ興シテ結構壯大ヲ極メ爲ニ國用窘窮シテ財ヲ納ルヽモノハ國司ニ任スルニ至ル侈靡ノ風極マレリト云フベシ

〔120〕

中古王朝時代ノ刑法ヲ問フ

養老令ニテ唐制ヲ參酌シ刑名ヲ五種ニ分ツ即チ

笞罪　十ヨリ五十ニ至ル　五等
杖罪　六十ヨリ百ニ至ル　五等
徒罪　一年ヨリ遞次半年ヲ加ヘテ三年ニ至ル　三等
流罪　遠、中、近ニ分ツ　二等
死罪　絞、斬

此時代ハ未タ磔刑火刑ヲ用ヒス又金ヲ出シテ科料トスルノ法アリ別ニ八虐ノ刑名ヲ設ケテ父子君臣ハ分ヲ明ニシ決シテ情狀ヲ酌量シ之ヲ赦ス等ノ一ナシ即チ

一、謀反　二、謀大逆　三、謀叛　四、惡逆　五、不道
六、大不敬　七、不孝　八、不義

而シテ刑事民事ノ管轄權限ヲ定メ職ヲ分テ之ヲ行フ秩序稍整ヒシト雖モ藤原氏專權以來朝威衰フルニ及ヒ遂ニ行ハレス

莊園ノ起原如何

中古班田收授ノ法定リシト雖ヒ農政漸ク弛ミテ賜田功田ノ私有ニ歸シテヨリ權門勢家土地ヲ兼併シ次第ニ莊園ナルモノヲ生シ國郡ノ支配ヲ受ケス賦稅調庸ヲ出サス朝廷收ムル所ノ稅額大ニ減スルニ至レリ

政權ノ武門ニ歸セシ顚末ヲ聞カン

源頼朝府ヲ鎌倉ニ立テ東國ニ号令ス公文所ヲ置キテ政令ヲ出サシメ問注所ヲ置キテ訟獄ヲ決セシム頼朝義經ヲ討チ義經逃走スルニ及ヒテ大江廣元ノ議ニ從ヒ諸國ニ守護ヲ置キ莊園ニ地頭ヲ置キ自ラ六十余州ノ總追捕使トナリテ義經ヲ搜索センヿヲ請フ之ヲ許ス乃チ家人ノ功勞アルモノヲ以テ悉ク之ニ任シ自ラ鎌倉ニ居リテ之ヲ統轄ス義經陸奥ニ逃ルヽニ及ヒ藤原泰衡ヲ誘テ之ヲ殺サシメ又自ラ名ヲ罪人容匿ニ籍リテ泰衡ヲ討シ之ヲ亡ス是ニ於テ天下復抗スルモノナシ諸國ノ守護地頭皆其職ヲ世襲シ次第ニ封建ノ勢ヲナシ兵食ノ權全ク鎌倉ニ歸シ朝廷孤立シテ遂ニ六百八十余年間全ク武門ノ世トナレリ之レ我國勢第二ノ大變遷ナリ

頼朝義經ヲ討ツノ始末ヲ述ヘヨ

義經勇武絶倫平氏ヲ討シテ大功ヲ立テ頼朝ノ節度ニ從ハサルヿアリ頼朝亦之ヲ猜忌シテ官ニ補セス朝廷厚ク之ヲ遇スルニ及ヒ益之ヲ忌ム梶原景時義經ト隙アリ百方之ヲ頼朝ニ讒ス義經宗盛父子ヲ鎌倉ニ送ルヤ頼朝其鎌倉ニ入ルヲ許サス又宗盛等ヲ京師ニ遣ラシム義經快々タリ時ニ叔父行家亦頼朝ト善カラス窃ニ謀ル所アリ頼朝之ヲ知リ僧昌俊ヲ遣ハシテ之ヲ襲ハシム義經却テ之ヲ斬リ後白河法皇ニ迫テ頼朝ヲ討スルノ院宣ヲ請フ之ヲ許ス頼朝之ヲ聞キ兵ヲ率テ西上ス法皇復義經ヲ逮捕スルノ命ヲ頼朝ニ下ス義經既ニ逃レ陸奥ニ至リ藤原秀衡ニ依ル

〔124〕

保元平治以後文藝ノ變遷如何

此間兵乱相繼キ上下武事ヲ專ニスルヲ以テ此時代ニ在リテ文藝ノ發達固ヨリ得テ望ムヘカラス啻ニ其發達ヲ望ムヘカラサルノミナラス殆ト之ヲ放棄シテ顧ミサルヲ以テ其衰頽ハ勿論免カレサル所唯僅ニ其跡ヲ絶タサルノミ而ルニ平氏ノ榮華ヲ極ムルヤ風流ノ遊ニ耽リシヲ以テ詩歌ノ道稍或ル一部ニ行ハレシモノアリシカ如シ

〔125〕

頼朝範頼ヲ殺シタル所以如何

頼朝富士野ニ獵ス時ニ伊東祐親ノ二孤曾我祐成弟時致工藤祐經ヲ殺シテ父ノ讎ヲ報ス會鎌倉訛言ス頼朝害ニ逢フト夫人政子驚キ泣ク範頼慰テ曰ク範頼此ニ在リ亦憂フル勿レト頼朝性猜忌之ヲ聞テ範頼ヲ忌ミ遂ニ兵ヲ遣ハシテ之ヲ殺ス

〔126〕

源頼家ハ如何ナル人ゾ

頼朝薨シテ頼家繼ク性狂愚ニシテ荒淫度ナク群小ヲ親ミ宿將ヲ疎ンシ復政事ヲ省ミス政子屢之ヲ戒ムレ𪜈改メス政子乃チ時政ト謀リ政ヲ專決ス

〔127〕

時政ハ如何ナル故ヲ以テ頼家ヲ殺セシヤ

初メ頼家疾病ナリ政子其起ツヘカラサルヲ度リ關東二十八國ノ地頭及ヒ總守護職ヲ以テ子一幡ニ傳ヘ關西三十八國ノ地頭ヲ弟千幡(實朝)ニ傳ヘシメントス然ルニ一幡ノ外祖比企能員千幡及頼政ヲ殺シテ已レ政權ヲ專ニセントス乃チ之ヲ頼家ニ謀ル政子之ヲ知リ時政ニ告ク時政乃チ能員及ヒ一幡ヲ殺シ千幡ヲ立テ、頼家ヲ伊豆ニ幽シ迫テ髮ヲ削ラシメ後遂ニ人ヲシテ頼家ヲ殺サシム北條氏ノ威權益盛ナリ

〔128〕

源氏ノ正統絶ヘシハ如何ナル〇ノアリシニヨルヤ

頼家難ニ逢ヒシ時其幼子公曉避ケテ京師ニ在リ長スルニ及ヒ政子迎ヘテ鶴岡ノ別當トス常ニ實朝及ヒ義時ヲ殺シテ父ノ仇ヲ復セント欲ス會實朝石大臣ニ任シ拜禮ヲ鶴ケ岡ニ行フ故事ニ拜賀ノ禮ハ必ス夜ヲ以テ之ヲ行フ公曉即チ暗ニ乘シテ之ヲ斬リ走テ三浦氏ニ依ル義時乃チ命シテ公曉ヲ殺サシム是ニ於テ源氏ノ正統全ク絶ツ頼朝府ヲ開キシヨリ三世四十年蓋シ公曉ハ義時ノ奸計ニ誑カレシモノナリ

〔129〕

鎌倉三代將軍トハ誰々ナルヤ

世ニ頼朝頼家實朝ヲ稱シテ三代將軍ト云フ

〔130〕

北條氏ノ執權職トナルノ始ハ如何

北條時政勢甚タ盛ナリ後妻牧氏ヲ愛シテ其言聞カサルヿナシ乃チ其勸メニヨリテ實朝ヲ廢シ其女婿源朝雅ヲ立ントス政子即チ時政ヲ伊豆ニ幽シ兄義時ヲシテ執權タラシム之ヲ其始トス而シテ此ヨリ後常ニ幼主ヲ擁立シ專ラ政權ヲ掌握ス之ヨリ大權全ク北條氏ニ歸シ頼朝ノ覇業遂ニ衰フ

〔131〕

承久亂ノ原因及ヒ其結末如何

後鳥羽上皇常ニ源氏ノ專權ヲ憤ラレシカ實朝害セラルヽニ及ヒ以爲ク威權復スヘシト然ルニ北條氏之

ニ代リテ政ヲ執ルヿ故ノ如ク加フルニ義時屢勅ヲ奉セサルニ及ヒ遂ニ意ヲ決シテ北條氏ヲ滅サンヿヲ謀ル義時諸豪ヲ招クノ詔書ヲ奪テ之ヲ燒キ子泰時朝時弟時房ヲシテ三道ヨリ京師ヲ犯サシム上皇ノ軍遂ニ敗レ歸ル上皇乃チ征討ノ院宣ヲ停メ罪ヲ藤原忠信以下六人ノ廷臣ニ歸ス泰時皆之ヲ斷ニ處ス後遂ニ仲恭天皇ヲ廢シ後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ土御門上皇ヲ土佐ニ順德上皇ヲ佐渡ニ遷ス之ヨリ暴逆益甚シク天子ノ廢立亦其意ニ依テ之ヲ行フニ至ル亦太甚シト云フベシ

〔132〕

南北六波羅府ノ始ハ如何

承久ノ乱後義時府ヲ六波羅ニ置キ常ニ其族ヲ遣ハシテ京師ノ政ヲ決セシム蓋シ承久ノ乱ニ懲リテ名ヲ大内警衛ニ籍リ以テ時變ニ備ヘントスルナリ

〔133〕

泰時ノ政ハ如何

北條泰時人トナリ謹厚ニシテ民ヲ愛ス識量人ニ過キ治体ニ明ナリ貞永式目五十條ヲ立テ以テ聽斷ノ資トス又清廉自ラ率ヒ衣服器皿敝ルト雖ヒ改メス故ニ國中能ク治リ其卒スルヤ民ノ之ヲ悲ムヿ父母ニ喪スルカ如シ蓋シ北條氏執權中政事家ト稱スヘキモノヲ求メハ先ツ指ヲ泰時ニ屈セサルベカラス

〔134〕

時頼ハ如何

北條時頼亦意ヲ政事ニ用ヒ自ラ奉スルヿ極メテ儉素ナリ時頼能ク人ヲ用ヰ青砥藤綱ヲ擧ケテ引付衆トナス藤綱清廉ヲ以テ名アリ權貴ヲ憚ラス聽斷私ナシ風化大ニ行ハル時頼職ヲ解クノ後自ラ僧衣ヲ着ケテ諸國ヲ巡リ民ノ疾苦ヲ問フ卒スル時親疎皆之ヲ惜ム蓋シ泰時及時頼ノ世ヲ以テ最モ能ク治マレリトス

〔135〕

時宗及貞時ハ如何

時宗果斷ニシテ沈毅ナリ蒙古ヲ西海ニ殲滅セシハ蓋シ其力ナリトス貞時ハ祖父時頼ノ風ヲ慕ヒ四方ヲ遊歷シテ民ノ疾苦ヲ問ヒ地方ノ風俗ヲ察セリ

〔136〕

北條氏ノ政衰ヘシ所以如何

初メ泰時時頼貞時等深ク意ヲ政治ニ用ヒ百餘年間國家能ク治マリシト雖モ高時ニ至リ昏狂ニシテ政治ヲ省ミス日夜酣飲ヲ事トシ奢侈ニ流レ私曲ヲ行フ此ニ於テ政大ニ亂レ遂ニ諸國ノ將士北條氏ニ畔クニ至ル北條氏ノ滅ル高時自ラ之ヲ滅ホスナリ

〔137〕

蒙古來寇ノ始末ヲ述ヘヨ

當時蒙古ノ國勢甚盛ニシテ其主忽必烈ニ至リ最モ強大ナリ遂ニ宋ヲ滅シテ國ヲ元ト号シ勢ニ乘シテ四隣ヲ併呑セントス好ヲ通スルヲ名トシテ使ヲ我國ニ遣ハス執權時宗其書辭ノ禮ヲ欠クヲ以テ之ヲ卻ク時宗謂ヘラク彼レ我國ヲ奪ハント欲ス彼ノ來リ寇スルハ和ト不和トニ關セス故ニ寧ロ斷シテ和ヲ拒ミ以テ我威ヲ示サンノミト後又其使ヲ卻クルヿ數次ニ及ヒ元遂ニ兵三万ヲ擧ケテ來リ壹岐對馬ヲ寇シ進テ太宰府ニ至ル擊テ之ヲ卻ク彼レ乃チ使ヲ遣ハシテ和ヲ求ム時宗其使者ヲ斬ルヿ前後二次是ニ於テ元

兵十万來テ壹岐對馬ヲ寇シ進テ太宰府ヲ侵ス探題北條實政討テ之ヲ破ル賊鷹島ニ退ク會大雷風暴カニ起リ賊艦皆覆ル我兵掩擊シテ之ヲ殲ス生キテ還ルモノ僅カニ三人時ニ弘安四年七月晦日ナリ之ヨリ元復タ我邊境ヲ窺ハス兵威ヲ海外ニ輝カシ日本與ミシ易カラスト云ハシメシモノ蓋シ時宗ノ力ナリ

〔138〕

九州探題ハ何レノ時ニ始リシヤ

北條時宗元使ヲ斬リテ和ヲ拒ムヤ必ス彼ノ來リ寇センヿヲ慮リ精兵ヲ鎮西諸國ニ遣ハシ北條實政ヲ以テ九州探題トシ預メ元寇ニ備フ之レ九州探題ノ始ナリ

〔139〕

鎌倉時代佛教ノ景況如何

此時佛教大ニ行ハレ新ニ派ヲ開クモノ亦多シ賴朝ノ時僧榮西宋ヨリ歸リテ臨濟宗ヲ開ク之ヲ禪宗ノ始トス實朝ノ時ニ源空アリ天台宗ヨリ淨土宗ノ一派ヲ開ク時賴ノ時僧道元宋ニ往キ歸テ曹洞宗ヲ開ク後親鸞ナルモノアリ淨土宗ヨリ更ニ一向宗ヲ創メ僧モ亦妻ヲ蓄ヘ肉ヲ食フヿヲ許ス之レ他宗ニナキ所ナリ同時ニ日蓮アリ天台宗ヨリ出テ專ラ法華經ヲ奉シ日蓮宗ノ一派ヲ立ツ時賴時宗貞時ノ如キハ皆禪ヲ學ヒ殊ニ時賴ハ僧ヲ支那ヨリ聘スルニ至ル故ニ此時代ハ禪宗最行ハレタリ海内ノ寺數一万一千三十七箇寺

〔140〕

後深草龜山兩統更立ノ起リハ如何

土御門帝ノ承久ノ事ニ與カラサルヲ以テ北條氏ノ爲ニ利ナリトシテ其子後嵯峨帝ヲ立テ後深草龜山相繼キテ位ニ即ク二帝皆後嵯峨帝ノ皇子ナリ然ルニ後嵯峨帝ハ殊ニ龜山帝ノ英資アルヲ愛シ遺詔シテ永ク其胤ヲシテ大統ヲ繼カシム後宇多帝立ツニ及ヒ後深草上皇援ヲ時宗ニ求ム時宗即チ其皇子伏見帝ヲ立ツ伏見帝後位ヲ讓ルニ及ヒ貞時ト謀リ龜山帝ノ後ヲ立ツルハ北條氏ノ利ニアラストシ子後伏見帝ニ傳フ蓋シ伏見帝ハ時宗ノ立ル所ニシテ龜山帝ハ常ニ承久ノヿヲ憤ルヲ以テナリ是ニ於テ後宇多上皇先帝ノ遺詔ニ違フヲ責ム貞時乃チ兩統十年毎ニ更立スルノ議ヲ定メ後宇多上皇ノ皇子後二條帝ヲ立テ事遂ニ定ル

〔141〕

源氏ノ治法ヲ問フ

賴朝政權ヲ執ルヤ朝廷ノ制度ハ繁雜ニ失シテ却テ實務ニ益ナキヲ以テ別ニ一種ノ治法ヲ立テ極メテ簡易ヲ主トセリ即チ政所ノ別當問注所ノ執事等要路ノ有司ハ僅ニ十余人ニ過キス以テ全國ノ政令ヲ管シ諸國ノ守護地頭等皆其命ヲ受ク而シテ地方ノ治法ハ土俗習慣ニ從フヲ主トシテ多ク舊來ノ治法ヲ變更スルヿナカリシ之レ地方ノ人心ヲ失ハサランヿヲ欲スルナリ

〔142〕

北條氏ノ治法ハ如何

概シテ之ヲ言ヘハ一ニ源氏ノ舊制ヲ守レリ而シテ司法行政ノ準則ヲ立テ以テ其基ヲ固ム其鎌倉ノ主ヲ立ツルヤ始メハ源氏ノ姻ヲ迎ヘ後ニ皇子ヲ奉シテ將軍トナス蓋シ已レ陪臣ナルヲ以テ人心ノ服セサランヿヲ慮ルニ依ルナリ斯クノ如クシテ泰時時賴等鋭意治ヲ圖リシカハ陪臣ニシテ政權ヲ專ラニスト雖

ニ能ク百余年間海内治平ナルヲ得タリ

〔143〕

源氏時代ノ風俗如何

頼朝痛ク前代ヨリノ奢侈ノ風ヲ改良スルニ力ヲ用ヒ倹素ヲ以テ下ヲ率ヒ常ニ臣下ヲ戒メテ苟モ財ヲ糜スルヿヲセス一種質朴ノ風ヲ養成セリ然ルニ朝廷ニ於テハ奢侈ノ風尚存セシヲ見ル頼家實朝ニ至リテ復柔弱ノ風ヲ生セントセシカトモ未タ一般ヲ化スルニハ至ラサリシ

〔144〕

北條氏ノ風俗如何

頼朝ノ時既ニ質朴ノ風ヲ養成セシカ北條氏ニ至リテハ更ニ倹素ヲ勉メ遂ニ一種ノ家風トナレリ時頼ノ母松下禪尼ハ手カラ片紙ヲ裁シテ紙障ノ破レヲ補ヒ時頼亦族父宣時ヲ招キ厨下ヲ探リテ殘餘ノ豆鼓ヲ得之ヲ以テ終夜酣飲シタルカ如キ以テ其風ヲ見ルヘシ蓋シ北條氏ノ能ク人心ヲ維ギタルモノ固ヨリ政治ニ鋭意ナルノ致ス所ナリト雖モ勤倹質朴ノ風ヲ養成セシモノ其一大要素タラサルヘカラス

〔145〕

佛法習俗ノ一部トナリシ例ヲ擧ヨ

北條氏ノ時佛法盛ニ行ハレシヲ以テ家屋ノ構造日用ノ器物等多ク寺院ノ制ニ類スルニ至ル即チ玄關及ヒ床ヲ作リ花瓶香爐等ヲ床ニ列スルカ如キ其一ナリ且ツ官吏多ク剃髪シテ圓顱ノ有司多キヿ前代未タアラサル所トス

〔146〕

元弘ノ變トハ如何其始末ヲ述ヨ

後醍醐天皇久シク北條氏ヲ圖ルノ志アリ高時政ヲ失フニ及ヒ藤原資朝源俊基等ト謀リ土岐頼兼多治見國長等ノ勇士ヲ引キ衣冠ヲ脱シ酒ヲ縱ニシテ歡心ヲ結ヒ以テ北條氏ヲ滅サンヿヲ謀ル之ヲ無禮講ト云フ既ニシテ事泄ル高時乃チ頼兼國長ヲ殺シ資朝俊基ヲ拘ヘ將ニ廢立ヲ行ハントス天皇高時ヲ慰諭シ誓書ヲ賜フ事乃チ解ク然レトモ帝ノ志益堅ク東伐ヲ議スルヿ愈急ナリ高時之ヲ知リ兵ヲ遣ハシテ京師ヲ犯ス天皇窃ニ南都ニ赴キ遂ニ笠置山ニ幸シ近畿ノ兵ヲ召ス藤原師賢詐テ帝ト稱シ御輿ニ乘シテ比叡山ニ赴ク六波羅府兵ヲ發シテ之ヲ攻ム時ニ護良親王延暦寺ノ座主タリ乃チ僧徒ヲ督シテ拒キ破ル既ニシテ僧徒等其眞ノ天子ニアラサルヲ知ルニ及テ皆叛キ去ル師賢行在ニ赴ク六波羅ノ兵轉シテ笠置ヲ陷レ帝出テ走リ藤原藤房獨リ從フ帝途ニシテ遂ニ追兵ノ爲ニ捕ヘラル是ヨリ先キ高時皇太子量仁ヲ奉シテ帝ヲ稱セシム之ヲ光嚴帝トス是ニ至テ追リテ神器ヲ新帝ニ傳ヘンヿヲ請フ乃チ僞器ヲ以テ之ニ授ク

〔147〕

後醍醐天皇楠正成ヲ召サレシ始末如何

帝笠置ニ在リ詔ヲ四方ニ下シテ兵ヲ徵ス然レトモ勤王ノ帥未タ至ラス一夕夢ム紫震殿ノ南ニ大樹アリ樹下ニ御坐ヲ設ケ二童子涙ヲ垂テ曰ク天下廣シト雖モ陛下ヲ納ルヽ所ナシ唯此坐アルノミ帝覺テ自ラ思フ木ヽ南ニ從フハ楠ナリ思フニ楠氏ナルモノアリテ朕ヲ輔ケ以テ恢復ヲ謀ラントスルカト山僧ヲ召シテ之ヲ問フ對テ曰ク金剛山ノ西ニ楠正成ナルモノアリ橘諸兄ノ裔ニシテ其父志貴山ニ祈リテ之ヲ生ミ正成ト名ク材武ヲ以テ聞ユ兵ヲ用フル神ノ如シト帝曰ク之ナリ藤原藤房ヲシテ之ヲ召サシム正成行在

ニ至ル帝大ニ喜ヒ委スルニ討賊ノコトヲ以テシ且ツ興復ノ計ヲ問フ正成感激對テ曰ク天誅加フ所賊斃レサルナシ且東夷勇アリテ兵衆キヲ以テ力ヲ以テ爭フヘカラスト雖ヒ智ヲ以テセハ之ヲ斃ス易々タルノミ然レ𪜈勝敗ハ兵家ノ常ナリ一敗ヲ以テ志ヲ屈スヘカラス臣驚下ナリト雖ヒ身ヲ以テ興復ヲ計ルヘシ臣ニシテ未タ死セスンハ幸ニ聖慮ヲ勞スル勿レト拜辭シテ歸リ赤坂ニ城ク實ニ元弘元年八月ナリ議者或ハ正成ヲ以テ諸葛亮ニ比シ其三顧ヲ待タサルヲ論スルモノアリ之レ我國体君臣ノ大義ヲ知ラサルノ俗論ノミ以テ我歷史ヲ語ルニ足ラサルナリ

後醍醐帝笠置山ヲ逃レ玉ヒシ時ノ景況如何

笠置終ニ賊ノ爲ニ陷レラレ天皇ヲ始メ公卿皆徒跣ニテ逃レ出ツ藤原藤房獨リ帝ニ從フ晝ハ伏シ夜ハ行キ艱歩三日將ニ赤坂城ニ至ラントス飢甚シク心身疲レ岩ニ倚テ假寢ス偶松露御衣ヲ沾ホシケレハ天皇歌ヲ詠シテ

さしく行く笠置の山を出しより天の下おの隱れ家もなし

藤房涙ヲ揮テ

ふるさとのむ蔭とく立よれもあはは袖ぬらす松の下露

遂ニ賊ノ追兵ニ獲ラレ後隱岐ニ遷サル噫萬乘ノ尊ヲ以テ此難ニ逢フ之ヲ思フテ血涙千行襟ニハ承久ノ事アリ今亦此ノ如シ筆ヲ投シテ慨然言フ所ヲ知ラサルナリ

楠正成勤王ノ結果如何

滔々タル天下一人ノ義兵ヲ擧クルモノナク天日黯クシテ黑雲海内ヲ覆フノ時ニ方リ蹶然衆ニ先チテ勤王ヲ唱ヘ心ヲ天地ニ誓ヒ身ヲ以テ王事ニ盡シ以テ武人ノ眼ヲ驚醒ス是ニ於テ四方勤王ノ帥爭ヒ起リテ官軍ニ應シ遂ニ元兇ヲ殲シテ一旦中興ノ偉業ヲ奏スルニ至ル縱令天下再ヒ亂レテ中興ノ業遂ニ衰フトモ云フ雖モ其一旦中興ノ業ヲナスヲ得シハ正成先ツ挺身義ヲ孤城ニ擧クシニヨルト云ハサルヘカラス正成ノ忠誠義膽日月ト其明ヲ爭フ宜ナリ後世忠臣ノ儀範トスルヤ

楠正成赤坂城守ノ概畧ヲ聞カン

正成詔ヲ奉シテ赤坂ニ城クヤ方二町計リ兵僅ニ五百人守備未タ完カラス笠置既ニ陷リ賊兵勢ニ乘シテ掩ヒ至ル兵總テ三十萬城ノ小ナルヲ侮リ肉薄シテ之ヲ攻ム正成屢奇計ヲ以テ賊軍ヲ破ル而シテ城中僅ニ五日ノ食ヲ餘スノミ正成乃チ計ヲ設ケ佯リ死シテ火ヲ城ニ放チ夜ニ乘シテ窃ニ城ヲ出テ金剛山ニ入ル賊其計タルヲ知ラス正成實ニ死セリトナシ以爲ク天下復タ虞ルニ足ルモノナシト

兒島高德忠誠ノコトヲ問フ

笠置陷リ帝逃ルヽニ及テ高時帝ヲ執ヘテ平等院ニ奉シ遂ニ隱岐ニ移ス兒島高德奮激衆ヲ勵マシテ曰ク志士仁人ハ身ヲ殺シテ以テ仁ヲナス義ヲ見テ爲サヽルハ勇ナキナリ何ソ要シテ車駕ヲ奪ヒ以テ義ヲ擧ケサル衆奮テ之ニ從フ惜ヒ哉計遂ニ成ラス衆皆散シ去ル高德悵恨シテ去ル能ハス夜帝ノ館ニ入リ櫻樹

ヲ白シテ書シテ曰ク天莫レ空ニ勾踐一時非レ無ニ范蠡一ト明旦護兵集リ見レトモ讀ムヿ能ハス之ヲ天皇ニ奏ス天皇之ヲ見テ心窃ニ勤王ノ士アルヲ知ル後帝隱岐ヲ逃ルヽニ及テ兵ヲ率ヒテ赴キ從フ

楠正成金剛山ヲ守ルヿヲ記セヨ

初メ正成赤坂城ヲ出テヽ金剛山ニ入リ千窟城ヲ築キテ之ニ據ル賊之ヲ知ラス兵ヲ引テ東ニ歸ル正成再ヒ城ヲ出テ赤坂ヲ攻テ直ニ之ヲ復シ進テ天王寺ニ陣シ勢頗ル振フ六波羅ノ賊將北條仲時等來リ攻ルト雖ドモ皆敗レテ走ル此時ニ當リ護良親王ハ吉野ニ起リ赤松則村モ亦親王ノ命ヲ奉シテ播磨ニ起リ山陰山陽ノ兩道ヲ絶ツ而シテ正成ハ別將ヲ赤坂ニ留メ自ラ千窟ニ移リテ之ヲ守ル高時之ヲ聞テ大ニ驚キ復大軍ヲ發シテ之ヲ攻ム賊赤坂及吉野ヲ陷レ悉ク金剛山一城ニ集ル總軍八十万ト号シ衆ヲ恃ミテ四面ヨリ仰キ攻ム正成千餘人ヲ以テ之ヲ拒タ賊軍重沓箭ニ虛發ナシ軍監高資十二人ヲシテ死傷ヲ記セシム三晝夜筆ヲ閣カス正成奇計妙策意ノ如クナラサルナク或ハ大石ヲ投シテ賊ヲ壓殺シ或ハ藁人ヲ作テ賊ヲ誘殺シ或ハ大炬ヲ以テ雲梯ヲ燒ク東兵死スルモノ一万餘人敢テ近ク能ハス諸道ノ豪傑正成ノ風ヲ聞テ爭テ官軍ニ應シ兵勢大ニ振ヒ正成ノ名隱然天下ヲ動カス

新田義貞歸順ノヿヲ問フ

義貞ハ義家ノ裔ナリ初メ賊軍ニ從テ千窟ヲ攻ム常ニ以爲ク吾源氏ノ裔ニシテ北條氏ノ役スル所トナル豈我本意ナランヤト窃ニ歸順ノ志ヲ懷ク乃チ護良親王ノ令旨ヲ得テ北條氏ヲ討タントス親王固ヨリ其

家聲ヲ知リ大ニ喜ヒ直ニ令旨ヲ與ヘ假ニ詔辭ヲ用フ義貞雀躍病ト稱シテ東ニ歸リ日ニ北條氏ヲ討滅セシヿヲ謀ル而テ高時未タ之ヲ悟ラス

新田義貞義兵ヲ擧ケシ時ノ狀況如何

高時金剛山久シク拔ケサルヲ以テ益兵食ヲ徵ス義貞ノ邑ニ課スルニ六十萬錢ヲ以テシ且ツ五日ヲ限リ之ヲ催迫ス義貞其吏ヲ捕ヘテ之ヲ斬リ首ヲ里門ニ梟ス高時大ニ怒リ兵ヲ發シテ義貞ヲ討ツ義貞乃チ衆ヲ集メテ詔書ヲ捧讀シ進テ笠懸野ニ陣ス近國ノ將士來リ屬スル者頗ル多ク兵勢大ニ振フ

後醍醐天皇ハ如何ニシテ隱岐ヲ逃レラレシヤ

高時勤王ノ兵益盛ナルヲ以テ帝ノ逃レ出テンヿヲ慮リ佐々木清高ヲシテ嚴ニ之ヲ守ラシム清高ノ族ニ義綱ナルモノアリ中門ヲ守ル常ニ歸順ノ志ヲ懷キ機ヲ見テ帝ヲ脫センヿヲ謀ル窃ニ奏シテ曰ク方今楠正成孤城ニ據リ北條氏ニ抗ス北條氏百万ノ大兵ヲ以テ之ヲ攻ムルヿ三月ニシテ未タ拔クコト能ハス正成ノ名天下ヲ動カシ諸道ノ豪傑爭ヒ起テ正成ニ應ス之レ皇運興復ノ時ナリ上宜シク潛ニ出雲伯耆ノ間ニ幸スヘシト天皇義綱ノ志極メテ固キヲ見テ大ニ喜ヒ義綱ヲシテ先ツ發シテ族人ヲ率ヒ更ニ來リ迎ヘシム義綱其族塩谷高貞ノ爲ニ囚セラル帝乃チ意ヲ決シテ源忠顯ト謀リ夜窃ニ千波港ヲ發ス清高追ヒ至ル舟人天皇ヲ船底ニ匿シ清高ヲ紿キテ他ニ去ラシメ遂ニ伯耆ノ名和港ニ達シ名和長年ニ依ル長年大ニ喜ヒ帝ヲ奉シテ船上山ニ據ル清高來リ攻ム擊テ之ヲ走ラス既ニシテ山陰山陽ノ豪傑多ク來リ屬シ兒島

高德ハ備前ヨリ來リ義綱高貞等ト兵ヲ率テ出雲ヨリ至ル官軍頗ル振フ

官軍六波羅ヲ復スルヿヲ記セヨ

足利尊氏ハ源氏ノ裔ニシテ却テ其顯屬タリシ北條氏ノ爲ニ驅役セラルヽヲ慍リ密ニ使ヲ天皇ニ遣ハシ降ヲ乞フ帝之ヲ許ス源忠顯兒島高德赤松則村ト六波羅ヲ攻ムルニ方リ尊氏亦兵ヲ合テ六波羅ヲ圍ム仲時、時益支フル能ハス新帝及ヒ後伏見花園二上皇ヲ奉シテ東ニ走リ皆誅ニ伏ス是ニ於テ金剛山ノ圍始テ解ケ官軍京師ヲ復ス

北條氏滅亡ノ景況ヲ問フ

高時義貞ノ既ニ歸順スルヲ知リ兵ヲ遣ハシテ之ヲ攻ム義貞子義顯弟義助等ト義兵ヲ擧ケ擊テ高時ノ兵ヲ破ル關東ノ豪傑來リ屬スルモノ凡十二万人勢ニ乘シテ三道ヨリ鎌倉ニ入リ火ヲ放テ縱横奮戰ス殺獲算ナシ高時支フル能ハス擧族自殺ス義貞使ヲ走テ捷ヲ行在ニ報ス義貞兵ヲ擧シヨリ十有五日ナリ賴朝府ヲ開キシヨリ百五十餘年北條氏執權タルヿ八世百十余年ニシテ鎌倉遂ニ亡フ

建武ノ中興トハ如何

尊氏忠顯等ト共ニ六波羅ヲ破リ京師ヲ復スルニ及ヒ帝乃チ伯耆ヲ發シ還幸ノ禮ヲ以テ京師ニ歸ル兵庫ニ至リ鎌倉ノ捷報ヲ得上下驩呼セサルナシ正成兵ヲ率テ迎ヘ謁ス天皇之ヲ勞シテ曰ク國家ノ再造ハ實ニ汝ノ力ナリ正成拜謝シテ曰ク陛下ノ威靈ニ賴ラスンハ臣安ソ生キテ再ヒ天日ヲ拜スルヲ得ンヤト天皇止成ヲシテ先驅セシメ闕ニ還リテ新帝ヲ廢シ萬機ヲ親裁ス是ニ於テ中興ハ業成リ政權皇室ニ歸シテ妖雲初テ晴レ天日ノ光ヲ仰ク實ニ元弘三年六月ナリ

中興ノ業ノ衰フル所以如何

天皇京師ノ復スルヲ以テ尊氏ノ功トシ諸將ヲ賞スルニ及ンテ尊氏ヲ以テ武藏常陸下總ノ守護トス義貞ノ如キハ實功尊氏ノ上ニ在リト雖モ上野播磨ヲ賜フニ過キス正成亦攝津河内ヲ受クルノミ又決斷所ヲ置キテ軍士ノ賞ヲ議スルニ及ヒ先ヲ爭テ集ルモノ數万人議定延滯旬月ニシテ僅ニ十余人ヲ定ム而テ有功ノ武人賞ヲ受クルヿ少ク阿諛ノ徒却テ重賞ヲ受クルヿアリ或ハ初メ賜フテ後之ヲ收ムルヿアリ或ハ朝議内旨ト相牴牾スルアリ赤松則村ノ如キハ初メ播磨ノ守護ニ任シ後之ヲ奪フテ僅ニ佐用ノ一莊ヲ賜ヒ甚シキハ歌童舞妓ノ如キモノニマテ地ヲ賜フテ殆ト遺地ナキニ至レリ斯クノ如ク賞罰當ヲ失シ内謁行ハレテ政令一定セス加フルニ足利尊氏外朝廷ニ媚ルト雖モ内窃ニ時變ヲ覘フアリ衆情憤怨天下復武門ノ治ヲ思フ嗚呼歎スヘキ哉

初テ楮幣ヲ行ヒシハ何レノ時ナルヤ又其理由如何

建武中興ノ後大ニ土木ヲ興シ大内ヲ營ム租稅ヲ課スルモ猶足ラス遂ニ初テ楮幣ヲ發行セリ

藤原ノ藤房ハ何故ニ官ヲ棄テヽ去リシヤ

中興ノ業成リテ帝漸ク政ニ倦ミ濫賞頗ル多ク土木亦盛ナリ時ニ出雲ノ守揖谷高貞千里ノ馬ヲ献ス帝大

ニ喜ヒ以テ祥瑞トス群臣亦賀ス藤房獨リ之ヲ不祥トシ當時ノ失政ヲ擧ケテ之ヲ切諫シ文臣内ニ詔ヒ武臣外ニ怨ムノ時ニ當リ天馬ノ出ルヲ之レ國亂ノ兆ナリトス言極テ凱切帝懌ハス藤房乃チ官ヲ棄テヽ去ル帝驚キ人ヲシテ追ハシム及ハス其終ル所ヲ知ラス議者之ヲ以テ其當ヲ得ストナス焉ンゾ知ラン藤房ノ意別ニ爲ニスル所アルヲ

直義護良親王ヲ殺セシ顚末如何

初メ護良親王尊氏ノ奸惡ヲ知リ禍ノ未タ發セサルニ方リ之ヲ誅セント欲ス尊氏亦常ニ親王ノ威名ヲ忌ミ之ヲ除カンコトヲ欲ス親王ノ已レヲ誅セントスルヲ知リ寵妃藤原氏ニ結ヒ誣奏シテ曰ク大將軍廢立ヲ謀ルト妃傍ヨリ之ヲ証ス帝大ニ怒リテ宮中ニ囚フ親王冤ヲ訴フレ𪜈有司皆尊氏ヲ憚リ敢テ奏達スルモノナシ後遂ニ親王ヲ鎌倉ニ送リ土窟ニ幽ス直義之ヲ監ス嗚呼尊氏外忠欵ヲ裝フテ内大謀ヲ企ツ親王ヲ陷ルヽニ至テ奸計益甚シ後北條時行鎌倉ヲ攻ムルヤ直義敗レテ走ルニ方リ親王ノ後患ヲナサンコトヲ慮リ人ヲシテ之ヲ殺サシム余曾テ鎌倉ニ遊ヒ其土窟ヲ見テ憤慨ニ堪ヘサルモノアリ咄大逆不道天人共ニ許サス

尊氏ノ叛ヲ問フ

諸國ノ武士各志ヲ得サルヲ憤フルノ際ニ方リテ尊氏窃ニ朝ノ覇業ヲ繼カント欲シ常ニ機ヲ窺フ北條時行亂ヲ起スニ及ヒ行テ之ヲ討タント乞フ之ヲ許ス又征夷大將軍ニ任セントコトヲ請フ許サス尊氏怒リ辭

セスシテ發ス時行ヲ擊テ之ヲ破リ進テ鎌倉ニ入ル帝之ヲ召シ還セ𪜈詔ヲ奉セス自ラ征夷大將軍關東管領ト稱シ義貞ノ領地ヲ奪ヒ上書シテ其罪狀ヲ奏ス是ニ於テ叛跡明ナリ帝震怒其官爵ヲ奪ヒ詔ヲ下シテ之ヲ討ス義貞征討ノ命ヲ受ケ進テ矢矧川ニ戰フテ賊ヲ破ル然ルニ義貞伊豆府ニ至リテ軍ヲ頓ムル數日賊ノ軍勢復タ盛ナリ此時ニ當リ脇屋義助モ亦賊ノ爲ニ敗ラレ塩谷高貞等賊ニ降ル官軍敗績シテ京師ニ歸リ尊氏義貞ヲ追フテ京師ニ入ル楠正成名和長年新田義貞等軍ヲ分テ諸道ヲ拒ク戰遂ニ利アラスシテ帝一旦叡山ニ幸スト雖𪜈源顯家陸奥ヨリ至ルニ及ヒ復兵ヲ合テ賊軍ヲ擊チ遂ニ之ヲ敗ル尊氏自殺セントスルヿ數次逃レテ西海ニ走ル

楠正成戰死ノ次第ヲ述ヨ

尊氏ノ西ニ奔ルヤ正成之ヲ窮追セントヿ欲ス義貞遷延決セス尊氏遂ニ九州ニ至ル此時赤松則村賊ノ爲ニ白旗城ヲ守ル義貞之ヲ攻メテ未タ拔クヿ能ハス既ニシテ九國悉ク尊氏ニ從ヒ尊氏ハ舟師七千艘ヲ率ヒ直義ハ陸軍二十万ヲ率テ東上ス義貞兵庫ニ退キ急ヲ朝廷ニ告ク乃チ正成ニ詔シテ義貞ヲ援ケシム正成奏シテ曰ク賊ノ兵鋒甚タ銳シ我疲兵ヲ以テ戰フ敗ルヽヿ必セリ如カス陛下叡山ニ幸シ義貞ヲ召シ還シテ賊ヲシテ縱ニ京師ニ入ラシメ臣ハ河内ニ歸リ賊ノ糧道ヲ絶チテ之ヲ夾擊センニハ但戰ハスシテ退クハ物議ヲ免レサルヘシト雖𪜈戰ハ勝ニ歸スルヲ貴フ幸ニ再思セヨト公卿皆之ヲ然リトス獨リ參議藤原清忠固ク拒ミテ可カス戰ヲ都外ニ決スヘシトナス帝清忠ノ議ニ從フ正成乃チ弟正季ト辭シテ西ス櫻井

驛ニ至リ子正行ニ訣別シ戒ムルニ他日父ノ志ヲ繼キ興復ヲ謀ルヘキヲ以テス正行年十一涙ヲ揮テ國ニ歸ル父子ノ眞情果テ如何正成湊川ニ陣シテ直義ノ陸軍ニ當リ義貞尊氏ノ水軍ニ當ル正成兵凡テ七百騎直義ノ軍ヲ衝キ縱横奮戰殆ト直義ヲ獲ントス尊氏直義ノ急ヲ聞キ兵ヲ分テ正成ノ後ヲ包ム正成復背大敵ヲ受ケ血戰十六合餘ス所七十三騎猶ホ以テ圍ヲ潰スヘシ然レ𪜈正成生ヲ欲セス乃チ走リテ民舍ニ入リ正季ト耦刺シテ死ス年四十三宗族從士皆座ヲ列テ之ニ死ス義貞利アラス身ヲ以テ京師ニ歸ル上下愕然帝復タ叡山ニ幸シ尊氏京師ニ入ル是ニ於テ正成ノ策ヲ用ヒサルヲ悔フ嗚呼正成ノ誠忠日月ト其明ヲ競フ誰カ其忠ヲ稱セサルモノヲ後水戸義公碑ヲ湊川ニ立テ「嗚呼忠臣楠氏ノ墓」ト云フ余曾テ京攝ノ間ニ遊ヒ湊川ノ社ニ詣シ又櫻井ノ驛趾ヲ訪フ當時ノ情狀胸裡ニ往來シテ轉タ慷慨ニ堪ヘズ獨語シテ曰ク清忠彼レ何者ヲ遂ニ大計ヲ誤ル

名和長年ノ戰死セシハ何レノ戰ナルヤ

正成戰死シ義貞敗レテ歸リ帝復叡山ニ幸スルニ及ヒ尊氏進ミテ京師ニ入リ遂ニ行在ヲ犯ス義貞忠顯等之ヲ拒ク忠顯敗レテ死シ義貞モ亦戰利アラス長年二百騎ヲ以テ力戰シテ之ニ死ス

菊池氏勤王ノ一ヲ記セヨ

初メ官軍ノ未タ京師ヲ復サヽルニ方リ肥後ノ菊池武時少貳大友等ト官軍ニ應セン一ヲ謀ル既ニシテ謀泄ル武時先ツ發セントス少貳大友應セス武時怒テ發シ百餘騎ヲ以テ九州探題北條英時ヲ破ル時ニ少貳

大友却テ英時ニ降リ來リ救フ武時戰死ス後尊氏叛シテ九州ニ奔ルヤ菊池武敏復兵ヲ出シテ尊氏ト戰ヒ遂ニ敗走ス此ヨリ後累世皆義ヲ西海ニ唱ヘ屢々賊ト戰フ嗚呼菊池氏西海ニ在リ獨リ超然トシテ義ヲ唱ヘ嘗テ節ヲ替ヘス常ニ王業ヲ恢復スルヲ以テ志トス然レ𪜈土地僻遠ニシテ竟ニ之ヲ遂クル能ハス惜ムヘシ〻〻〻

南北朝ノ分ルヽ所以ヲ聞カン

初メ北條高時後伏見天皇ノ皇子量仁親王ヲ立テヽ帝ト稱ス之ヲ光嚴帝トス南北朝ノ分ルヽ此時ニ始ル蓋シ其因ハ遠ク兩統更立ノ議ニアルナリ後尊氏叛スルニ及ヒ賊名ヲ負フヲ忌ミテ後伏見ノ皇子ヲ推戴セン一ヲ欲シ其西海ニ走ルヤ請テ光嚴上皇ノ院宣錦旗ヲ得タリ再ヒ京師ニ入ルニ及ヒ遂ニ光嚴上皇ノ弟豐仁親王ヲ立ツ之ヲ光明天皇トス既ニシテ尊氏伴リ降リテ車駕闕ニ歸ラン一ヲ請フ帝信シテ之ヲ許ス尊氏乃チ帝ヲ華山院ニ幽シ迫テ神器ヲ新帝ニ授ケン一ヲ請フ帝僞器ヲ以テ之ニ授ク後筑ニ宮ヲ出テヽ吉野ニ幸シ行宮ヲ立ツ楠正行等來リ守ル之ヨリ吉野ヲ南朝ト云ヒ京師ヲ北朝ト云フ

義貞金崎城ヲ守ル一ヲ記セヨ

義貞弟義助ト金崎ノ城ヲ守リ賊將足利高經ト相持ス瓜生保義鑑等兵ヲ率ヒテ之ヲ援フ克タズシテ死ス之レヨリ外援絶ヘ糧食竭ク而シテ敵兵日ニ集リ城中大ニ苦ム義貞乃チ義助等ト潛ニ杣山ニ赴キ兵ヲ召集シテ夾ミ擊タンコトヲ計ル而シテ兵少ク未タ赴キ援フコト能ハス賊遂ニ金崎ヲ陷ル尊良親王及ヒ新

驛ニ至リ子正行ニ訣別シ戒ムルニ他日父ノ志ヲ繼キ興復ヲ謀ルヘキヲ以テス正行年十一涙ヲ揮テ國ニ歸ル父子ノ眞情果テ如何正成湊川ニ陣シテ直義ノ陸軍ニ當リ義貞尊氏ノ水軍ニ當ル正成兵凡テ七百騎直義ノ軍ヲ衝キ縱横奮戰殆ト直義ヲ獲ントス尊氏直義ノ急ヲ聞キ兵ヲ分テ正成ノ後ヲ包ム正成復背大敵ヲ受ケ血戰十六合餘ス所七十三騎猶ホ以テ圍ヲ潰スヘシ然レモ正成生ヲ欲セス乃チ走リテ民舍ニ入リ正季ト耦刺シテ死ス年四十三宗族從士皆座ヲ列テ之ニ死ス義貞利アラス身ヲ以テ京師ニ歸ル上下愕然帝復タ叡山ニ幸シ尊氏京師ニ入ル是ニ於テ正成ノ策ヲ用ヒサルヲ悔フ嗚呼正成ノ誠忠日月ト其明ヲ競フ誰カ其忠ヲ稱セサルモノゾ後水戸義公碑ヲ湊川ニ立テ「嗚呼忠臣楠氏ノ墓」ト云フ余曾テ京攝ノ間ニ遊ヒ湊川ノ社ニ詣シ又櫻井ノ驛趾ヲ訪フ當時ノ情狀胸裡ニ往來シテ轉タ慷慨ニ堪ヘズ獨語シテ曰ク清忠彼レ何者ゾ遂ニ大計ヲ誤ル

名和長年ノ戰死セシハ何レノ戰ナルヤ

正成戰死シ義貞敗レテ歸リ帝復叡山ニ幸スルニ及ヒ尊氏進ミテ京師ニ入リ遂ニ行在ヲ犯ス義貞忠顯等之ヲ拒ク忠顯敗レテ死シ義貞モ亦戰利アラス長年二百騎ヲ以テ力戰シテ之ニ死ス

菊池氏勤王ノ一ヲ記セヨ

初メ官軍ノ未タ京師ヲ復サヽルニ方リ肥後ノ菊池武時少貳大友等ト官軍ニ應セン一ヲ謀ル既ニシテ謀泄ル武時先ツ發セントス少貳大友應セス武時怒テ發シ百餘騎ヲ以テ九州探題北條英時ヲ破ル時ニ少貳

大友却テ英時ニ降リ來リ救フ武時戰死ス後尊氏叛シテ九州ニ奔ルヤ菊池武敏復兵ヲ出シテ尊氏ト戰ヒ遂ニ敗走ス此ヨリ後累世皆義ヲ西海ニ唱ヘ屢々賊ト戰フ嗚呼菊池氏西海ニ在リ獨リ超然トシテ義ヲ唱ヘ嘗テ節ヲ替ヘス常ニ王業ヲ恢復スルヲ以テ志トス然レモ土地僻遠ニシテ竟ニ之ヲ遂クル能ハス惜ムヘシ〻〻〻〻

南北朝ノ分ルヽ所以ヲ聞カン

初メ北條高時後伏見天皇ノ皇子量仁親王ヲ立テヽ帝ト稱ス之ヲ光嚴帝トス南北朝ノ分ルヽ此時ニ始ル蓋シ其因ハ遠ク兩統更立ノ議ニアルナリ後尊氏叛スルニ及ヒ賊名ヲ負フヲ忌ミテ後伏見ノ皇子ヲ推戴セン一ヲ欲シ其西海ニ走ルヤ請テ光嚴上皇ノ院宣錦旗ヲ得タリ再ヒ京師ニ入ルニ及ヒ遂ニ光嚴上皇ノ弟豐仁親王ヲ立ツ之ヲ光明天皇トス既ニシテ尊氏佯リ降リテ車駕闕ニ歸ラン一ヲ請フ帝信シテ之ヲ許ス尊氏乃チ帝ヲ華山院ニ幽シ迫テ神器ヲ新帝ニ授ケン一ヲ請フ帝僞器ヲ以テ之ニ授ク後鈴ニ宮ヲ出テヽ吉野ニ幸シ行宮ヲ立ツ楠正行等來リ守ル之ヨリ吉野ヲ南朝ト云ヒ京師ヲ北朝ト云フ

義貞金崎城ヲ守ル一ヲ記セヨ

義貞弟義助ト金崎ノ城ヲ守リ賊將足利高經ト相持ス瓜生保義鑑等兵ヲ率ヒテ之ヲ援フ克タズシテ死ス之レヨリ外援絶ヘ糧食竭ク而シテ敵兵日ニ集リ城中大ニ苦ム義貞乃チ義助等ト潛ニ杣山ニ赴キ兵ヲ召集シテ夾ミ擊タンコトヲ計ル而シテ兵少ク未タ赴キ援フコト能ハス賊遂ニ金崎ヲ陷ル尊良親王及ヒ新

〔169〕

田義顯等之ニ死ス

義貞戰死ノ狀況ヲ問フ

官軍ノ兵勢大ニ振ヒ義貞義助連リニ數城ヲ拔ク賊將足利高經藤島等ノ塞ヲ修メテ之ヲ守ル官軍未タ之ヲ拔クヿ能ハス義貞自ラ五十騎ヲ率ヒ間道ヨリ藤島ニ赴ク高經ノ兵三百ト田中ニ相遇フ賊四面ヨリ亂射ス義貞ノ兵楯ヲ持セス義貞急ニ馬ヲ跳フシテ敢テ進ム矢眉間ニ中ル遂ニ自ラ刎チテ死ス年三十八從士皆死ス時ニ霧雨昏迷、衆赴キ救ハス賊未タ義貞ナルヲ知ラス死屍ヲ檢シテ錦囊書ヲ得タリ其辭ニ曰ク討賊ノヿ朕一ニ卿ヲ煩ハスト始テ其義貞ナルヲ知ル義助敗兵ヲ收メテ國府ニ歸ル

〔170〕

後醍醐天皇ハ如何ニシテ崩セラレシヤ

帝常ニ恢復ノ志ヲ懷キ銳意治ヲ圖リシト雖モ元弘ノ兵起ルニ及ヒ蒙塵數年後遂ニ一旦中興ノ業ヲ遂ケシカ幾ハクモナクシテ再ヒ吉野ニ狩シ終リニ臨ミテ元兇未タ滅ヒサルヲ恨ミテ慷慨憂憤劍ヲ按シテ崩ス

〔171〕

楠正行戰死ノ次第ヲ說ケ

高師直師泰大兵ヲ擧ケテ入寇スルニ及ヒ楠正行宗族ヲ率ヒテ行宮ニ詣リ奏シテ曰ク先臣正成微力ヲ以テ强賊ヲ平ケ一旦聖慮ヲ安スト雖モ逆賊再ヒ入寇スルニ及テ遂ニ命ヲ湊川ニ致セリ臣時ニ年十一命シテ河內ニ歸ラシム臣國ニ歸リ日夜國讐ヲ報スルヲ以テ念トナズ然ルニ臣多病ニシテ常ニ遺命ニ背カンヿヲ恐ル今賊大舉シテ來ル之レ臣カ報効ノ秋ナリ若シ彼カ首ヲ得スンハ臣カ首ヲ彼ニ授ケンノミ願クハ一タヒ天顏ヲ拜シテ行ントス天皇簾ヲ揭ケテ慰諭シテ曰ク朕太タ汝世々ノ忠ヲ嘉ス近日ノ捷大ニ賊ノ勢ヲ挫ケリ朕汝ヲ以テ股肱トス萬一利アラサルモ死ヲ決スル勿レ正行涕泣シテ辭シ去リ四條畷ニ至リ大ニ賊軍ト戰フ縱橫奮擊直ニ中軍ヲ衝キ師直ニ逼ル相距ル一數步疲レテ起ツヿ能ハス賊四面ヨリ之ヲ射ル矢雨ノ如シ正行全身箭ヲ蒙リ意ヲ決シテ正時ト相刺シ北ニ向ヒ再拜頓首シテ斃ル師直行宮ヲ犯ス帝穴生ニ幸シ師直行在ヲ燒ク正行父ノ名ヲ辱シメスト云フベシ

〔172〕

足利氏內鬨ノヿヲ記セヨ

直義尊氏ニ從テ功アリ尊氏ノ大將軍トナルニ及ヒ副將軍トナリ威權甚タ强シ師直亦尊氏ノ執事トシテ威福ヲ張レリ遂ニ直義ト相輒リ直義師直ヲ殺サンヿヲ圖ル師直之ヲ知リ直義ヲ討タンヿヲ請フ尊氏之ヲ許ス直義遂ニ上書シテ歸順ヲ乞フ帝(後村上)之ヲ許シ詔シテ尊氏ヲ討セシム後尊氏直義相和シ師直殺サレテ事平クト雖モ尊氏兄弟外和シテ內諧ハス遂ニ再ヒ相鬩キ直義尊氏ノ爲ニ毒殺セラル

〔173〕

男山ノ戰ヲ記セヨ

尊氏ノ直義ヲ鎌倉ニ攻ムルヤ官軍ノ其後ヲ窺ハンヿヲ恐テ佯テ降ヲ乞フ帝(後村上)亦佯テ之ヲ許シ車駕遂ニ男山ニ幸ス楠正儀和田正忠等來リ會ス足利義詮來リ犯ス正儀等討テ之ヲ破リ京師ニ入リテ北朝ノ三上皇(光嚴光明崇光)ヲ捕ヘ之ヲ賀名生ニ移サシム既ニシテ義詮復タ來リ犯シ官軍利アラス退テ男

山ヲ保ツ攻擊甚タ急ナリ時ニ正儀河内ニ歸リテ兵ヲ募リ未タ行在ニ至ラス帝自ラ甲ヲ環シ馬ニ御シ園ヲ衝テ行宮ニ歸ル

〔174〕

尊氏ノ人ト爲リヲ聞カン

度量宏大ニシテ權畧アリ殊ニ姦詐ニ富ミ人其際ヲ窺フ能ハス政令偏私ニシテ賄賂公行シ驕傲奢侈復タ忌ミ憚ル所ナシ然レ𪜈能ク士ヲ愛シ土地金帛ヲ惜マスシテ之ヲ與フ之レ朝廷失政ノ機ニ投シテ能ク人心ヲ得タル所以ナリ

〔175〕

鎌倉管領ノ始ヲ問フ

尊氏自ラ居ヲ京師ニ定メ子基氏ヲ鎌倉ニ置キテ管領トス蓋シ南朝ヲ虞ルカ爲ニ自ラ京師ヲ離ル、能ハサルニヨル之レ北條氏六波羅ノ制ニ倣フテ而シテ其控制ノ術ヲ反セルモノナリ

〔176〕

南北朝合一ノ事ヲ問フ

楠正儀既ニ卒シ官軍大ニ衰ヘ保ツ所金剛山一城ノミ足利義滿兵ヲ遣ハシ金剛山ヲ攻メテ之ヲ陷ル正成城ヲ築キシヨリ此ニ至ル凡ソ六十年ニシテ始テ陷ル義滿即チ人ヲシテ和ヲ南朝ニ請ハシメテ曰ク車駕京ニ歸リ神器ヲ北帝ニ傳ヘハ兩統ノ更立故事ノ如クセント帝(後龜山)之ヲ許ス義滿來降ノ禮ヲ用ヒント欲ス帝許サスシテ曰ク父子ノ禮ヲ以テ相讓ルヘシ然ラスンハ神器ト共ニ斃レンノミト遂ニ父子ノ禮ヲ以テ神器ヲ後小松帝ニ授ク後醍醐天皇南遷ヨリ此ニ至ルマテ三世五十七年ニシテ兩統一ニ歸ス

〔177〕

足利義滿ノ政畧如何

義滿聰明ニシテ偉度アリ和ヲ南朝ニ請ヒテ海内ヲ統一シ職ヲ子義持ニ讓リテ自ラ太政大臣ニ任シ猶兵權ヲ掌握ス是ヨリ先キ尊氏義詮姑息ヲ以テ下ヲ御セシカ故ニ功臣驕恣往々コシテ叛亂スルモノアリ加フルニ南朝臣子ノ忠烈ナルモノアリテ常ニ北朝ニ抗シ戰爭止マサリシカ南北統一ノ後義滿軍政ヲ修メ嚴肅ヲ以テ下ヲ制セシカ故ニ諸ノ豪族皆屏息セリ又大ニ制度ヲ改メテ諸ノ政務ヲ整ヘ上下其威ニ服ス蓋シ足利氏ノ覇業ハ義滿ニ至テ定ルト云フヘシ之レ其威ノ最モ盛ナル時ナリトス義滿室町ニ居リシヲ以テ之ヲヨリ世々足利氏ヲ室町將軍ト稱ス

〔178〕

義滿豪奢ノ事ヲ記セヨ

義滿屢叛亂ヲ平ケ武威ヲ張リ驕傲尊氏ニ過ク常ニ奢侈ヲ極メ第ヲ室町ニ築キテ之ニ居リ又別業ヲ北山ニ起シ塗ルニ金ヲ以テス金閣寺ト稱スルモノ之ナリ嘗テ廷曆寺ニ遊フトキ上皇行幸ノ儀ヲ用フト云フ以テ其驕奢ノ度ヲ見ルヘシ明主義滿ヲ封シテ日本國王トス義滿之ヲ受ケテ顧ミス薨スルニ及テ明主復恭献王ノ號ヲ贈ル

〔179〕

管領ヲ鎌倉ニ置キタル結果如何

初メ尊氏管領ヲ鎌倉ニ置クヤ蓋シ南朝ヲ虞ルカ爲ニ自ラ京師ニ居ランヿヲ欲スレハナリ而ルニ關東ハ足利氏根據ノ地ニシテ且管領基氏賢ニシテ大ニ東國人士ノ心ヲ得タリ是ヲ以テ管領ノ勢力漸次強大ニ

〔180〕

赴キ相傳テ滿兼ニ至リ兵勢京師ニ倍シ百事室町ニ擬シテ驕奢日ニ甚シク自ラ將軍ト稱シ遂ニ大内義弘ト東西相援ケテ以テ將軍義滿ヲ謀ルニ至ル(但シ其事成ラス)義滿モ亦陰ニ鎌倉ヲ謀リ爭亂已ムトキナク遂ニ管領持氏上杉憲實ヲ討シテ死スルニ及ヒ室町ノ威亦衰フ蓋シ南北講和ノ成ルニ及ヒテハ復タ京師ニ居ルノ必要ナシ宜シク府ヲ鎌倉ニ移シ根據ヲ關東ニ定ムヘシ然ルニ義滿ノ計茲ニ出テス之ヲ以テ幕臣次第ニ柔弱ノ風ニ染ミ勇武ノ氣漸ク減スルニ當リ關東先ツ亂レテ遂ニ根本ノ地ヲ失フニ至レリ

赤松滿祐義教ヲ弑スル所以如何

赤松滿祐播磨美作備前ヲ領シ勢甚タ盛ナリ然ルニ將軍義教滿祐ノ族貞村ノ美貌ヲ愛シ滿祐ノ領地ヲ奪フテ貞村ニ與ヘントシ且滿祐ノ容貌矮陋ナルヲ以テ戲レ呼ヲ三尺入道ト云フ滿祐怒リ義教ヲ私邸ニ饗シテ之ヲ殺ス滿祐持豐等ノ爲ニ誅セラル

足利氏ノ衰亡セシ所以如何

將軍義政八歲ニシテ軍職ヲ繼ク細川勝元畠山持國迭ニ管領タリ義政長スルニ及ヒ暗愚ニシテ宴樂ニ耽リ諸將ノ驕傲ニシテ往々國ヲ奪フモノアルモ之ヲ制スル能ハス加之賦稅ヲ重クシ奢侈ヲ極メテ徒ニ風流ヲ事トシ上下凋弊氏大ニ困ムト雖モ之ヲ顧ミス之ヨリ海内ノ武人復タ足利氏ノ令ヲ奉セス(因ニ記ス百姓ニ夫役ヲ命スルヿ毎月五六回甚シキハ八九回ニ及ヘルヿアリシト云フ)

〔182〕

應仁亂ノ原因及結果ヲ問フ

〔183〕

畠山持國子ナキヲ以テ姪政長ヲ義子トス既ニシテ子義就ヲ生ムニ及テ政長ヲ退フ細川勝元山名持豐ト持國ノ威權ヲ嫉ミテ政長ヲ救フ持國乃チ政長ヲシテ家ヲ繼カシム義就河内ニ奔ル將軍義政モ亦初メ子ナキヲ以テ弟義視ヲ養フテ子トス義視時ニ僧トナレルヲ以テ之ヲ固辭ス義政決シテ偷ラサルヲ誓ヒ遂ニ之ヲ養フ後子義尙ヲ生ムニ及テ遂ニ義視ヲ廢セントス然ルニ細川勝元義視ヲ援クルヲ以テ諸將ノ能ク勝元ニ抗スヘキモノヲ求ムルニ山名持豐ニ如クハナシ乃チ意ヲ持豐ニ囑ス義豐勝元ト相忌ム乃チ之ヲ諾シ請テ義就ヲ赦シ召還シテ已カ援トナス勝元怒リ政長ヲ援ケテ兵ヲ集ム是ヨリ兩軍相爭フヿ十一年ノ長キニ亘リ持豐勝元各相次キ病テ卒ス京師ノ市街宮殿皆兵火ニ罹リ古來此クノ如キ兵亂ノ慘ナルモノナシト云フ之ヨリ諸國ノ武士各土地ヲ爭ヒ相掠奪シテ怪ムヿナク國中未曾有ノ戰亂トナリテ遂ニ弱肉强食ノ世ノ中ト變セリ

足利時代文學ノ景況如何

〔184〕

戰亂ノ世ニ在リテハ固ヨリ文學ノ盛ナルヘキ筈ナシ足利氏幕府ヲ開クニ及テ僧玄慧是圓等ヲ召シテ政治ヲ諮詢シテヨリ足利氏ノ史筆皆僧徒ニ歸ス戰國騷擾ノ際ニ至テ殊ニ衰頹ヲ極メ唯上杉憲實ノ意ヲ文學ニ用ヒラ再ヒ金澤文庫ノ衰ヘルヲ興シ足利學校ノ廢レタルヲ修メテ學徒ヲ養フノ道ヲ立テシト僧徒ノ學ヲ講スルモノアルニヨリテ纔ニ之ヲ維持セルノミ文學ノ衰頹極レリト云フヘシ

戰國ノ世英雄割據ノ狀ヲ說ケ

應仁以後豪傑各方ニ割據シテ戰爭止ムヒナク元龜天正ノ頃ニ至リテ尤モ甚タシク海內四分五裂鼎沸啻ナラサルノ形狀ヲ呈シ皁賤ヨリ起リテ遂ニ一國一城ノ主トナルモノアルニ至ル今其主ナルモノヲ擧クレハ武田氏ハ甲斐ニ據リ長尾氏ハ北越ニ據リ今川氏ハ駿河ニ兩上杉氏及北條氏ハ關東ニ據リ織田氏ハ尾張ニ據ル又肥前ニ龍造寺氏アリ薩摩ニ島津氏アリ安藝ニ毛利氏周防ニ大內氏アリ美濃ニ齋藤氏越前ニ朝倉氏アリ其他豐後ノ大友氏土佐ノ長曾我部氏出雲ノ尼子氏伊勢ノ北畠氏近江ノ淺井氏等皆各旗幟ヲ一方ニ飜ヘシテ近隣ヲ蠶食セリ其他群雄ノ各地ニ峰起セルモノ殆ト數フルニ遑アラス其內境土ノ最大ナルモノヲ北條武田上杉毛利ノ四氏トス所謂弱肉强食トハ是レ此ノ時代ヲ云フカ

足利時代ノ風俗如何

日ニ茶會飲宴ヲ競ヒ奢侈相誇リ錢帛器玩皆優妓ニ散ス義政ニ至テハ比年凶荒飢民道ニ充ツルモ顧ミス大ニ奢侈ヲ極メリ能狂言ノ如キ抹茶ノ宴ノ如キモ亦鎌倉時代ヨリ始マリシト雖モ亦此時代ニ至テ大ニ其式ヲ備ヘタルモノナリ又武人ノ涅齒大ニ行ハル今衣食住ノ著シキモノヲ擧クレバ

衣服　肩衣並ニ半袴ナルモノアリ之レ後世麻上下ノ起リナリ下賤ノ者モ皆烏帽子ヲ着ク蓋シ頭ヲ現ハスヲ以テ無禮トスルナリ將軍ノ服ハ各種ノ織物白綾等ニテ作リ紫色ノ紋ヲ附ケタリ

家屋　建築美麗ヲ競ヒ茶室ノ制ノ如キ亦義政ノ時ヨリ其美ヲ極ムルニ至レリ貴人ノ宅ハ檜皮ヲ以テ之ヲ葺キ構造極テ嚴重ナリ下民ノ宅ハ藁ヲ以テ之ヲ葺ク又二階三階ノ如キハ義滿ノ金閣寺義政ノ

銀閣寺ニ起ルト云フ

食物　鎌倉時代及足利氏ノ時代マデハ尙朝夕二度ノ常食トス然レ𪜈餅溫飩等ヲ間食スルヿアリ客ヲ饗スルノ禮甚タ鄭重ナリ

伊勢長氏ハ如何ニシテ人心ヲ得シヤ

長氏人トナリ豪毅ニシテ英略アリ伊勢ノ人ナリ將軍義政、政ヲ怠リ將士離叛スルニ當リ財ヲ散シテ豪傑ニ結ヒ其徒荒木兵庫等ト謀リ駿河ニ至リ今川氏ニ依ル蓋シ八州ノ地ヲ以テ根據トセント欲スルナリ足利政知ノ子茶々事ニ依テ其父ヲ弑スルニ及ヒ兵ヲ擧テ之ヲ誅シ遂ニ伊豆ヲ取ル韮山ニ北條氏アリ嗣絕ヘルヲ以テ長氏ヲ養ヒ女ヲ以テ之ニ妻ス長氏是ヨリ北條氏ヲ稱ス伊勢北條並ニ平姓ナルヲ以テナリ又小田原ノ城主大森藤賴ノ幼ナルヲ侮リ之ヲ欺キテ其城ヲ奪ヒ之ニ據ル而シテ其下ヲ御スル寬容ニシテ賦稅ヲ輕クシ諸雜課ヲ除キ恩威ヲ國內ニ布ク之レ其衆望ヲ得タル所以ナリ

鐵砲及ヒ火藥製造法ノ傳ハリシハ何レノ時ナルヤ

天文十二年葡萄牙人西班牙人大隅種子島ニ來リ始テ鳥銃ヲ嶋主ニ贈リ又火藥ノ製造法ヲ傳フ翌年葡人復至ル島主其臣ニ命シテ其製法ヲ學ハシメテ新ニ之ヲ製シ島津氏ニ献ス島津氏之ヲ將軍ニ献ス之ヨリ遂ニ相傳テ海內ニ遍ス

足利時代外交ノ景況如何

上古ヨリ中古ニ至リ外國ト交通スルヿ盛ナリシト雖ドモ遣唐使ヲ廢シテヨリ稍交通疎遠ノ狀ヲ呈シタリシガ足利氏ニ至リ復タ盛ニシテ殊ニ西南ノ諸豪ハ恣ニ外國ト通商ヲ開キタルモノアリ然レドモ主トシテ支那朝鮮ト交通スルモノ、如シ而シテ義滿ノ如キハ明ト好ヲ通シ公然日本國王ノ号ヲ受ケ義政亦屢使ヲ明ニ遣ハシ銅錢及ヒ典籍ヲ求メタリ夫レ外國ト交通ヲナスハ則チ好シ日本國王ノ号ヲ受クルニ至テハ國体ヲ辱シムルノ大ナルモノト云ハサルベカラス

義滿義政ノ所以ニ就キテ最モ國体ニ關係アルモノハ何ソヤ

義滿ノ如キハ大義名分ヲ顧ミス明主ト修好ヲ通シ明主義滿ニ日本國王ノ号ヲ贈ルニ及ヒ公然之ヲ受ク之レ果シテ何等ノ意ゾヤ彼ノ封冊ヲ受クルハ即チ彼ニ臣事スルモノト云ハザルベカラス之レ豈大和民族ノ甘シテ爲スヘキ所ナランヤ義政亦屢使ヲ明ニ遣ハシテ其銅錢ヲ求ム假令彼ノ錢貨ヲ得テ國用ヲ賑ハスト云フト雖モ然レドモ是皆我國体ヲ汚辱スルモノニアラスシテ何ソヤ

弓槍ノ始メ如何且ツ古代戰鬪ノ狀ハ如何ナルモノナリシヤ

弓ハ上世ヨリアリト雖モ近代ノ制ト異ニシテ皆丸木弓ヲ用フ其近世ノ弓ハ源平ノ頃ヨリ始ル槍モ上古ヨリアリト雖モ後世軍陣ニ用フルモノハ南北朝ノ頃ヨリ起レリト云フ而シテ古代戰鬪ノ狀ハ固ヨリ現今ノ如ク規律ノ嚴肅ナルモノニアラス唯強者ハ進ミ弱者ハ後レテ相搏チ相杆キ以テ勝敗ヲ決スルノミ後武田上杉兩氏ノ頃ニ至リテ兵法漸ク備ハル

毛利元就陶晴賢ヲ討チシハ何故ナルヤ

大内義隆歌詠ニ耽リ武事ヲ顧ミス其臣陶晴賢悍厲ニシテ士心ヲ得タリ叛キテ義隆ヲ弑シ大友義長ヲ立テヽ自ラ權ヲ專ラニス義隆死スルニ臨ミ元就ニ遺命シテ陶氏ヲ討セシム元就乃チ其遺命ニヨリ朝廷ニ請フテ陶氏ヲ討ツノ詔ヲ得兵ヲ擧ク自ラ嚴島ニ城キ晴賢ヲ誘ヒ致シ遂ニ之ヲ誅ス是ニ於テ元就悉ク大内氏ノ地ヲ併セ毛利氏ノ威大ニ振フ

兩上杉氏ノ滅亡セシ所以ヲ問フ

北條早雲(長氏)既ニ卒シ其子氏綱雄畧アリ父ノ遺業ヲ受ケ上杉氏不臣ノ罪ヲ鳴ラシテ大ニ上杉氏ノ河越城ヲ攻ム氏綱遂ニ河越ヲ取ルニ及テ武藏下總ノ諸城相率テ來リ從フ氏綱ノ子氏康能ク兵ヲ率ヰ智勇衆ニ超ユ氏綱卒スルニ及テ氏康繼キ復屢兩上杉氏ト戰フ此時ニ當リ北條氏ノ勢漸ク強ク上杉朝定勢漸ク衰フ然ルニ朝定上杉憲政ト兵ヲ合テ氏康ヲ攻メ足利晴氏兩上杉ヲ援ケテ河越ヲ攻ム攻戰年ヲ超ユトモ北條綱成堅ク守テ屈セス氏康亦自ラ兵ヲ率テ綱成ヲ援ヒ謀テ敵ノ備ヘヲ怠ラシメ討テ大ニ之ヲ破ル憲政走リ朝定捕ヘラル後氏康兵ヲ率テ憲政ヲ攻ム憲政走テ越後ノ長尾景虎ニ依リ其姓氏ヲ以テ景虎ニ授ク是ニ於テ兩上杉氏遂ニ亡ヒ北條氏ノ威關東ニ振フ

織田信長ノ威名ノ顯ハルヽハ何事ヨリセシヅ

今川義元駿遠參ノ三州ヲ併セ勢ニ乘シテ京ニ入ラントシ兵ヲ進メテ尾張ニ入リ數城ヲ取ル織田信長雄

武絶倫智畧人ニ過グ義元ノ勝ニ誇テ備ヘサルヲ知リ其虛ヲ衝カント欲シ僅ニ二千ノ兵ヲ以テ風雨ノ夜ニ乘シ桶狹間ニ邀ヘ擊テ大ニ之ヲ破リ義元ヲ斬ル信長ノ威名天下ニ振フ

〔194〕

足利氏ノ頃佛敎ノ盛衰如何

鎌倉以來ノ風習ヲ承ケテ足利氏モ亦世々佛敎就中禪宗ヲ信シ義滿ニ至テハ益盛ナリ鹿苑院寶鐘寺相國寺等ヲ創シタルハ此時ニ在リ然シテ諸國兵亂止ムコトナキニ方リテハ往々僧徒ノ武器ヲ擁シテ自ラ守レルモノアリ然レドモ寺院ハ多ク兵火ヲ免レタルヲ以テ典籍ヲ藏スルヿ多ク爲ニ文學上ニ利益ヲ與ヘシヿ尠少ニアラサルナリ

〔195〕

北條氏時代ノ刑名如何

泰時貞永式目ヲ立テシヨリ後ハ守護地頭ヲシテ恣ニ罪人ヲ處分スルヲ得サラシメ西國ノ司法ハ六波羅ニ於テ東國ノ司法ハ鎌倉ニ於テ之ヲ掌ル其刑名左ノ如シ

禁獄、追放、流刑、死刑(磔梟首)、以上四、之ヲ正刑トス

召籠、除籍、改易所職、勅勘、召禁、永不可召仕、解官、過怠、召放所領、以上九之ヲ武家ニ行フノ閏刑トス

過料、捺火印、闕所、剃半髮、以上四之ヲ庶人ニ行フノ閏刑トス

〔196〕

足利政府ノ財政ノ景況如何

〔197〕

財政頗ル困難ニシテ屢明朝ヨリ錢ヲ乞フテ僅ニ國用ヲ充タセルヿアリ義政ノ時ハ殊ニ奢侈ヲ極メシヲ以テ錢ヲ人民ニ借リテ返ヘサス又明主ニ哀求シテ幸ニ錢十万貫ヲ得ハ我國用足ルト云フニ至ル諸國ノ領主ニ命シテ出金セシムルヿ屢ナルヲ以テ領主等次第ニ稅率ヲ高クシ民其聚斂ニ苦ム而シテ豪商ノ金ヲ借ルヿ義滿ハ歲ニ四次義敎ハ年ニ十二次義政ニ至テハ月ニ八九次ナリ

長尾景虎剃髮ノ事情如何

景虎ハ爲景ノ四子ナリ爲景之ヲ愛セス以テ僧トナサント欲ス景虎聽カス爲景ノ死スルヤ諸將多ク意ヲ景虎ニ屬ス元臣等爲景ノ長子晴景ノ暗劣ナルニ乘シ之ヲ利トシテ晴景ヲ立テ景虎ヲ殺サントス景虎走リテ椽尾城ニ據ル晴景來リ攻ム景虎防キ戰ヒ晴景自殺ス諸將士乃チ景虎ヲ立テントス景虎曰ク吾レ勢己ムヲ得スシテ兄ト兵ヲ搆フ豈兄ノ死ヲ料ランヤ而ルニ吾今國ニ主タラハ人吾ヲ何トカ云ハント遂ニ髮ヲ削テ謙信ト号シ以テ其意ヲ明ニス諸將强テ之ヲ立ツ謙信曰ク今ヨリ吾令スル所敢テ違背セスンハ乃チ諸君ノ請ヲ容レント明日權ヲ專ニスル大臣十六人ヲ殺ス諸將股栗ス

〔198〕

甲越ノ戰ハ何事ヨリ起リシヤ

長尾景虎(後剃髮シテ謙信ト号ス)越後ノ人ナリ英邁ニシテ膽畧アリ能ク兵ヲ用フ上杉憲政ノ景虎ニ依ルヤ其姓氏官号ヲ受ケ之ヨリ上杉氏ヲ稱ス此時ニ當リ武田晴信(後剃髮シテ信玄ト号ス)甲斐ニ起リ勇武ニシテ兵法ニ通ス村上義清小笠原長時ヲ破リテ信濃ヲ取ル是ニ於テ義清等走テ謙信ニ依リ救援ヲ求

ム謙信乃チ兵ヲ出シテ信玄ト信濃ヲ爭フ兩將各兵ヲ用フル神ノ如ク雌雄決セヌ十三年ノ久シキニ及ベリ兩雄ノ相爭フヤ偶マ以テ織田氏ノ幸トナレリ蓋シ謙信信玄固ヨリ一地方ニ齷齪タルベキモノニアラス會甲越ノ事アリ遂ニ力ヲ中原ニ伸ブルヿ能ハサリシノミ若シ夫レ彼レニシテ力ヲ中原ニ伸サンカ天下ノ事未タ知ルベカラサル者アリ

戰國ノ時ニ當リ撥亂反正ノ勅ヲ受ケシハ誰ゾ

足利氏ノ末豪傑各地ニ割據シテ天下鼎沸ス正親町天皇織田信長ノ威名ヲ聞テ窃ニ勅使ヲ下シテ託スルニ天下ノ亂ヲ平クルヲ以テス信長謹テ勅旨ヲ拜シ之ヨリ常ニ西上ノ策ヲ議ス

織田氏足利氏ニ代ル顚末如何

信長齋藤氏ヲ滅シ美濃ヲ取リテ岐阜ニ居ル將軍義輝松永久秀等ニ弑セラルヽニ及ヒ其弟義昭諸國ニ流寓スルヿ三年來テ信長ニヨリ恢復ヲ謀ル信長乃チ義昭ヲ美濃ニ迎フ夫レヨリ六角氏ヲ破リテ悉ク近江ヲ併セ義昭ヲ奉シテ京師ニ入リ立テヽ將軍トス然ルニ義昭性暗愚ニシテ信長ノ言ヲ用ヒス却テ其威名ヲ忌ミ之ヲ除カントヿヲ謀ル信長之ヲ知リ二條城ヲ攻メテ義昭ヲ追フ尊氏將軍トナリシヨリ十五代二百三十八年ニシテ滅フ信長乃チ足利氏ニ代リテ政令ヲ出シ自ラ近江ノ安土ニ城キテ之ニ居ル

武田晴信ハ如何ニシテ自立セシヤ

晴信ノ父信虎少子信繁ヲ愛シテ晴信ヲ疎ンシ之ヲ廢セント欲シ駿河ニ至リ今川義元ニ謀ル義元常ニ信

虎ノ悍コシテ制シ難キヲ患ヘ之ヲ廢セント欲スルノ意アリ信虎ノ駿河ニ至ルニ及ヒ晴信窃ニ意ヲ義元ニ通ス義元乃チ信虎ヲ抑留シテ歸サス晴信遂ニ甲斐ニ自立ス

長篠ノ戰ヲ記セヨ

武田信玄既ニ死シ子勝頼暗愚ニシテ驕傲ナリ大擧シテ三河ニ入リ長篠ヲ圍ム城將奥平信昌堅ク守テ降ラス德川家康援ヲ信長ニ請フ信長兵五萬ヲ以テ來リ援ヒ討テ大ニ勝頼ヲ敗リ勝ニ乘シテ北グルヲ追ヒ斬首壹萬三千級其將二十余人ヲ斬ル武田氏ノ精鋭概ヲ此ニ盡ク勝頼宿將ノ諫ヲ用ヒス遂ニ此ニ及ブ武田氏ノ滅ブル既ニ此時ニ兆セリ

信長尊王ノ大義ヲ重セシ例ヲ示セ

其京師ニ入ルニ及ヒ大ニ皇居ヲ造營シ流落セル公卿ヲ復シ又供御ノ料ヲ奉リ大神宮ノ戰亂以來破壞セルモノヲ修理スル等皆尊王ノ大義ヲ重スルヨリ發セサルモノナシ

義昭信長ト隙ヲ生セシ所以如何

信長義昭ノ失行ヲ患ヘテ之ヲ諫ム義昭聽カス却テ其短ヲ擧ケテ之ヲ誹ルトナシ遂ニ隙ヲ生ス信長人ヲ遣ヲ其貳ナキヲ陳スレ𪜈義昭聽カス

耶蘇教ノ始ハ如何

我國ニ耶蘇教ノ傳來セルヿ甚タ遠ク大内義隆大友義鎮ノ如キモ之ヲ信セリ此時既ニ羅馬ノ教師宣教ノ

爲ニ我國ニ來レリ將軍義輝ノ時ニ至リテハ洋教師ノ我國ニ來レルモノ將軍ニ謁シテ宣教ヲ請ヒ將軍之ヲ許セリ信長ニ至リ一旦寺ヲ建テ其教ヲ布カシメタリト雖モ後耶蘇教ヲ以テ人心ヲ收攬シ國土ヲ窺フモノトナシ之ヲ禁セシト雖モ遂ニ其功ヲ奏セス蓋シ西教ノ初テ我國ニ入ルハ天文年間葡人ノ來航セシ時ニアルカ如シ

武田氏ノ滅ヒタル顚末ヲ畧記セヨ

信玄既ニ卒シ勝頼嗣グ勝頼暗愚ニシテ驕傲ナリ三河ノ長篠ヲ攻メテ信長家康ノ爲ニ大ニ敗ラルヽニ及ヒ宿將精兵多ク戰死シ甲斐ノ軍鋒頓ニ衰フ信長遂ニ大軍ヲ發シテ武田氏ヲ討チ家康亦信長ニ會ス勝頼連戰皆敗レ天目山ニ走リテ死ス勝頼群小ヲ親近シ宿將ノ諫ヲ用ヒス遂ニ此ニ及ヘリ是ニ於テ武田氏ノ領地悉ク信長ニ歸ス

秀吉ハ如何ニシテ信長ニ仕ヘシヤ

秀吉幼字ヲ日吉ト云フ尾張愛知郡中村ノ民彌助ナルモノヽ妻曾テ日輪懷ニ入ルト夢ミ既ニシテ姙メルコアリ日吉ヲ生ム邑人之ヲ同里ノ筑阿彌ナルモノニ納ル筑阿彌日吉ヲシテ僧トナラシム日吉天資機敏敢テ僧事ヲ學バス曰ク僧ハ乞丐ノ徒ノミ大丈夫亂世ニ生レ何ソヅ乞丐ヲ學バント以爲ク方今ノ世織田信長ニアラズンハ共ニ功名ヲナスニ足ルモノナシト自ラ姓名ヲ作リテ木下藤吉ト云フ去テ尾張ニ至リ信長ノ出ルヲ伺ヒ道側ニ跪キテ曰ク臣ガ父筑阿彌曾テ先君ノ奴タリ願クハ君亦臣ヲ以テ家奴ニ充テヨ

ト信長熟視シテ曰ク汝ガ面ハ猿ニ似タリ心必ス敏捷ナラント遂ニ收テ以テ奴トナス常ニ鞋ヲ提テ以テ從ヒ勤仕少シクモ怠ラス

信長僧徒ノ跋扈ヲ制セシヿヲトフ

僧徒ノ暴横ナル兵ヲ擁シテ屢亂賊ニ與ス織田信長大ニ之ヲ惡ミ遂ニ命シテ叡山ヲ燒カシム佐久間信盛等王城ノ鎭タルノ故ヲ以テ之ヲ止ム信長聞カスシテ曰ク彼レ僧徒等兇徒ヲ助ケテ王師ニ抗ス之レ即チ國賊ナリ我レ國家ノ爲ニ賊ヲ除クノミト遂ニ之ヲ燒キ僧徒婦女童幼ニ至ルマテ悉ク之ヲ斬ル

明智光秀ノ叛ヲ記セヨ

信長羽柴秀吉ヲシテ山陰山陽ヲ平定セシム秀吉備中ニ入リ高松城ヲ圍ミ未タ拔クヿ能ハス毛利氏大擧シテ來リ援フニ及ヒ使ヲ馳セテ信長ノ親ヲ出テンヿヲ請フ信長乃チ池田信輝明智光秀等ヲシテ先鋒タラシメ自ラ京師ニ入リテ本能寺ニ館ス初メ信長光秀ヲ罵辱スルヿ屢ナリ光秀常ニ之ヲ含ム信長森蘭丸ニ對シテ三年ノ後志賀郡ヲ汝ニ與ヘント謂フニ至テ光秀以爲ク三年ノ後我ヲ誅セントスルナリト蓋シ志賀郡ハ當時光秀ノ領ナレバナリ西征ノ命アルニ及ヒ遂ニ反シテ本能寺ヲ圍ム信長近臣ト力戰シ火ヲ縱テ自殺ス光秀又信忠ヲ二條城ニ攻テ之ヲ害ス信長人ヲ知テ善ク任スト雖モ下ヲ馭スル過刻ナリ故ニ遂ニ此ニ及ベリ

秀吉光秀ヲ誅スルヿ如何

光秀ノ信長ヲ弑スルヤ秀吉高松城ヲ攻ム毛利氏屢使ヲ遣ハシテ和ヲ求ム秀吉未タ之ヲ許サス本能寺ノ變報至ルニ及ヒ秀吉自ラ之ヲ發シ急ニ毛利氏ト和シ還テ光秀ヲ山崎ニ伐ツ光秀敗レテ走リ遂ニ士兵ノ爲ニ殺サル光秀ノ首ヲ本能寺ニ梟ス是ヨリ先キ織田氏ノ一族諸將觀望シテ敢テ討賊ノ師ヲ發セス秀吉ノ至ルニ及ヒ織田信孝丹羽長秀池田信輝等ト來リ會シ共ニ光秀ヲ討ス光秀事ヲ起セシヨリ十有三日ニシテ亡フ秀吉ノ自ラ變ヲ發スルモノ其大膽驚クヘキカ如シト雖モ之レ即チ秀吉ノ秀吉タル所以ナルナランヤ亦怪ムニ足ラサルナリ

秀吉輝元講和ノ次第如何

時ニ秀吉高松城ヲ圍ム其陷ル旦夕ニ在リ輝元信長ノ至ルヲ聞キ使ヲ遣ハシテ和ヲ議ス秀吉未タ之ヲ許サス本能寺ノ變報至ルニ及ヒ輝元ノ使者ニ謂テ曰ク明智光秀逆ヲナシテ信長父害ニ逢フ事既ニ此ニ至ル公等尚和セント欲スルカ吾ヲ擊タント欲セハ今日ニ如クハナシト使者還リ報ス諸將皆戰ハント欲ス隆景獨リ之ヲ非トシテ曰ク應仁以來海内紛亂麻ノ如シ此時ニ當リ天必ス一ノ英雄ヲ生シテ之ヲ掃蕩セントス今秀吉ヲ見ルニ或ハ其人ナリ然ルニ之ト戰フ彼レ死地ニ在リ其捷未タ必ストスヘカラス難ヲ見テ盟ヲ變スルヿナクハ秀吉亦必ス吾ヲ德トセン輝元之ヲ然リトシ和ヲ約シ且喪ヲ弔ス

賤岳ノ戰ヲ記セヨ

柴田勝家秀吉ヲ除カントスル欲シ雪ニ阻テラレテ未タ兵ヲ出スコト能ハス秀吉ノ瀧川一益ヲ攻ムルヤ勝家

其將佐久間盛政ニ命シ兵二万ヲ以テ木本ニ軍セシム秀吉乃チ蒲生氏郷等ヲ留メテ一益ニ當ラシメ馳テ柳瀨ニ至リ湖山ノ形勢ヲ相シテ十三砦ヲ築キ諸將ヲシテ之ヲ守ラシム勝家大擧シテ柳瀨ニ至ル諸砦秀吉ノ命ヲ奉シ固ク守テ出テス時ニ信孝復タ兵ヲ擧ケテ勝家ニ應ス秀吉兵ヲ引テ信孝ヲ攻メ大垣ニ至ル盛政赴キ援ハント欲シテ秀吉ノ諸砦相連續シテ道路通セス盛政乃チ先ツ中川清秀ノ營ヲ襲フ營賤ケ岳ノ麓ニ在リ曉天岳麓ニ至リ火ヲ縱テ之ヲ攻ム清秀戰太タ苦ミ遂ニ之ニ死ス勝家盛政ヲ召還ヲトモ盛政從ハス勝家曰ク豎子吾事ヲ敗ルト時ニ秀吉岐阜ヲ攻メントス會賤岳ノ報至ル秀吉使者ニ問フテ曰ク盛政退クヤ否ヤ曰ク未タシ秀吉刀ヲ扳キ起舞シテ曰ク吾大勝ヲ得タリト輕騎一万五千ヲ撰ヒ鞭ヲ揚テ發ス初更賤ケ岳ニ至ル北軍諸山ノ炬火ヲ望ミ驚テ曰ク秀吉來ルト營ヲ扳ヲ退カントス秀吉ノ兵既ニ進テ其後ヲ圍ム諸砦之ヲ視テ弓銃爭ヒ蹙ム盛政走テ岳北ニ上レハ秀吉ノ兵已ニ岳南ヨリ之ニ逼ル銃丸雨ノ如シ秀吉令シテ曰ク可ナリト乃チ兵ヲ縱ツ加藤清正福島正則加藤嘉明平野長泰脇坂安治片桐且元糟屋武則等槍ヲ揮テ奮擊ス向フ所前ナシ諸軍勢ニ乘シテ之ニ迫リ斬首五千餘級勝家報ヲ得テ曰ク盛政果シテ事ヲ敗ルト走テ北莊ニ至ル追テ盛政ヲ獲タリ勝家火ヲ縱テ自殺ス之ヲ賤岳ノ七本槍ト稱ス

秀吉海内ヲ一統シタル次第ヲ述ヨ

秀吉山崎ノ一戰ニ光秀ヲ破リ相議シテ秀信ヲ立テ、信長ノ嗣トス之ヨリ秀吉ノ勢大ニ盛ナリ秀吉柴田勝家ヲ越前ニ破リ又德川家康ト和シ長曾我部氏ヲ四國ニ攻テ之ヲ降シ遂ニ南海ヲ畧シ又北國ニ入リ上

杉景勝ト誓フ秀吉兵力最モ強ク官職亦累リニ進ミテ内大臣關白トナリ終ニ太政大臣ニ昇リ姓ヲ豐臣ト賜フ時ニ九州地方島津氏ニ屬シテ其勢強大ナリ秀吉又征シテ九州ヲ平ケ遂ニ關東ノ北條氏奥羽ノ伊達氏ヲ征服スルニ及テ東北亦皆定マル應仁以來豪傑各方ニ割據シテ天下亂麻ノ如キモノ是ニ至テ秀吉之ヲ統一シ國中全ク豐臣氏ニ歸シテ海内始テ安シ

秀吉朝鮮征伐ノ起リハ如何

初メ秀吉山陰山陽ヲ征スルノ命ヲ受クルヤ信長ニ謂テ曰ク中國ヲ定ムルハ臣ガ方寸ノ中ニ在リ幸ニ効成ラハ之ヲ以テ功臣ノ未タ報ヒサルモノニ與ヘヨ臣ハ直チニ九州ニ入ラン願クハ其一歳ノ入ヲ賜ヘ權仗ヲ蓄ヘ舟艦ヲ作リテ朝鮮ニ入ラン君願クハ朝鮮ヲ以テ臣ニ賜ヘ臣其兵ヲ以テ明國ニ入リ三國ヲ合シテ一トセン之レ臣ガ素志ナリト秀吉ノ意常ニ明國ヲ併呑スルニ在リ海内統一スルニ及ヒ宗義智僧玄蘇等ヲ使トシテ明ヲ攻ムルノ意ヲ朝鮮王李昭ニ論シ路ヲ假ラント欲スルノ意ヲ告グ朝鮮聽カズ秀吉乃チ先ツ朝鮮ヲ討ツノ志ヲ決シ諸將ヲシテ肥前名古耶ニ會セシム

秀吉ノ再ヒ朝鮮ヲ討チシハ何故ナルヤ

碧蹄館大戰ノ後明軍敢テ進マス沈惟敬ヲシテ和ヲ圖ラシム惟敬厚ク行長等ニ賂フテ曰ク太閤朝鮮ノ二王子ヲ還サハ乃チ朝鮮ノ三道ヲ割キテ王トセント行長等不學封王ノ故事ヲ知ラス以テ明ニ王タルノ謂トナシ之ヲ秀吉ニ告グ秀吉乃チ和ヲ許ス明ノ使者揚方享沈惟敬等朝鮮ノ使者ト共ニ至ル秀吉之ヲ伏見

ニ見ル僧承兌冊文ヲ讀ム文中汝ヲ封シテ日本國王トストノ語アリ且ツ朝鮮ノ三道ヲ納ルヽヿヲ言ハス秀吉大ニ怒リテ曰ク曩ギニ行長等言フ我ヲシテ明ニ王タラシムト吾日本ヲ掌握ス王タルニ於テ何ゾ彼ガ干渉ヲ俟タン且ツ我レ王タラハ天朝ヲ如何セント冊書ヲ裂キ即夜明韓ノ使者ヲ追ヒ遂ニ再ヒ征討ハ令ヲ下ス

關ヶ原戰爭ノ起リハ如何

秀吉既ニ薨シ前田利家秀頼ヲ奉シテ大坂ニアリ德川家康伏見ニ居リ秀吉ノ遺命ヲ以テ代テ事ヲ視ル家康國最モ富强ニシテ智量人ニ過キ威名獨リ盛ナリ石田三成等家康ヲ除カント謀ル加藤清正黑田長政福嶋正則等皆三成ヲ惡ミテ家康ニ屬シ兩黨爭端ヲ起ス或人家康ニ勸メテ三成ヲ除クヿナカラシム家康大ニ悟ル所アリ三成ニ諭シテ國ニ就カシム三成乃チ其邑ニ歸リ窃ニ謀ヲ上杉景勝ニ通ス家康屢景勝ノ上京ヲ促セトモ景勝從ハス家康乃チ大軍ヲ發シテ景勝ヲ討ツ三成其虛ニ乘シ秀頼ノ命ヲ矯メ檄シテ曰ク德川内府罪アリ嗣君命シテ之ヲ討セシムト京畿以西三成ニ應ス家康變ヲ聞キ結城秀康ヲ留メテ自ラ西上シ兩軍關ヶ原ニ逢フ

關ヶ原戰爭ノ結果如何

家康一戰シテ三成ヲ關ヶ原ニ破リテヨリ家康ノ威隱然天下ヲ壓シ全國ノ大權全ク德川氏ニ歸シテ秀頼ハ僅ニ攝河泉ヲ領スルノミ初メ家康ノ三成ヲ誅セサル蓋シ大ニ自ラ爲ニスル所アルニヨルナリ三成ノ

〔218〕

兵ヲ擧クル會マ以テ家康ヲシテ天下ヲ掌握スルノ機ヲ與ヘシモノト云フヘシ

洋算及洋船製造術ノ我國ニ入ル初ハ如何

和蘭船ノ豐後ニ漂着セシヲ聞キ家康其船長ヲ江戸ニ召ス船長爲ニ數學ノ理ヲ講シ西洋形ノ船二隻ヲ作ル是其始ナリ

〔219〕

西教徒ニ對スル豐臣秀吉ノ處置如何

秀吉西教徒ノ外國ヨリ來レルモノニ歸國ヲ命シ南蠻寺〔織田信長ノ時教師伴天連ノ爲ニ京師ニ立テシモノ〕ヲ燒キ教師ヲ捕ヘテ長崎ニ送致シ國中ニ令シテ西教ヲ奉スルヲ嚴禁ス既ニ之ヲ奉スルモノハ改宗セシメ命ヲ奉セサルモノハ死刑ニ處ス斯ク嚴酷ニ之ヲ處分スト雖モ尙往々窃ニ之ヲ奉スルモノアリ

〔220〕

天主閣ノ始ハ如何

松永久秀天主教ヲ奉シ天主ヲ祭ル爲ニ城樓ヲ大和ノ志貴ニ起ス之ヲ天主閣ノ始トス

〔221〕

德川氏ノ始メ外交ノ景況如何

家康使ヲ朝鮮ニ遣ハシテ修交ヲ許シ每歲一万八千兩ヲ限リテ朝鮮トノ交易ヲ許ス又和蘭船堺浦ニ來リテ互市ヲ請フニ及ヒ家康船主ヲ招キテ海外ノ事情ヲ問ヒ大ニ通商ヲ開カント欲シ其請ヒヲ許ス後商船ヲ亞米利加及伊斯巴爾亞ニ遣ハシ外交ノ道ヲ擴ム家康各國ニ通商ヲ開クノ意アリ故ニ外人ノ來ルモノハ優待シ互市ヲ請フモノハ之ヲ許ス之ヨリ西洋各國ノ船舶來航スルモノ甚タ多ク我船舶ノ彼ニ往クモノ亦多ク遂ニ互市ヲ許スモノ英吉利西班牙和蘭以下二十余國ニ至ル亦盛ナリト云フヘシ

〔222〕

日本人歐羅巴ニ至ルノ始ヲ問フ

西曆千五百八十二年(我二千二百四十二年天正十年)有馬大村侯ノ姻戚二人從僕ヲ具シテ西教ヲ報スル爲ニ羅馬ニ至リ法王ニ謁ス夫レヨリ途次西班牙及葡萄牙ヲ經テ日本ニ歸ル時ニ西曆千五百九十年(我二千二百五十年天正十八年)ナリ之ヲ日本貴人ノ歐羅巴ニ至ル始トス

〔223〕

蘭人ト交通ノ始ハ如何

之レ慶長五年西曆一千六百年我二千二百六十年ニ在リ此年阿蘭英吉利ノ商人通商ヲ請フ爲ニ和泉堺浦ニ來航セルモノアリ幕府命シテ江戸ニ廻航セシム遠州洋ヲ過クル時颶風ニ遭ヒ浦賀ニ至リテ破船シ江戸ニ達スルヲ得ス二商乃チ陸路ヲ經テ江戸ニ來ル官吏討撿シテ異狀ナキヲ知リ其請求ニ應シタリ

〔224〕

大坂冬ノ役ノ起リハ如何

豐臣秀賴方廣寺ヲ營ミ又巨鐘ヲ鑄ル公卿以下相會シテ之ヲ慶セントス鐘銘ニ國家安康ノ句アリ家康之ヲ以テ已ガ名ヲ切テ呪詛スルモノトシ大ニ怒ル秀賴凡庸ナルヲ以テ淀君專ラ事ヲ視大野治長淀君ニ寵セラレ其言皆聽カル治長德川氏ヲ滅シテ豐臣氏ノ舊業ヲ復セント欲ス鐘銘ノ事起ルニ及ヒ片桐且元陳謝甚タ勉ムト雖モ家康聽カス且元謂ヘラク淀君ヲ質トシテ關東ニ送ルヲ以テ上策トシ右府ヲ江戸ニ居ラシムルヲ中策トシ大坂城ヲ避ケテ他ニ移ルヲ下策トス三策必ス其一ニ居ルヲ可トス然ラサレハ此事

遂ニ平和ニ終ルヘカラスト淀君却テ且元ノ形迹疑フヘシトシテ之ヲ追フ治長等乃チ檄ヲ四方ニ飛ハシテ兵ヲ募ル旬日ニシテ五万余人ヲ得タリ然レトモ有土ノ將士一人モ應スルモノナシ家康乃チ大兵ヲ發シテ大坂ヲ討ツ

大坂冬ノ役ノ結局如何

家康人ヲシテ城中ニ入リ和ヲ議セシム城中衆議決セサリシガ後藤基次大野治長等和センヿヲ欲ス淀君乃チ秀頼ニ勸メテ和ヲ決セシム家康乃チ三事ヲ要求ス一ニ曰ク羅城ヲ毀チ周池ヲ塡メン二ニ曰ク封ヲ大和ニ移サン三ニ曰ク淀君ヲ以テ質トセン三事必ス其一ニ居ルヘシト治長秀頼ノ旨ヲ以テ答テ曰ク周池ヲ塡メン然レトモ諸客兵ノ爲ニ食邑ヲ加ヘヨ家康怒リ和議遂ニ止ム後復タ和成ルニ及ヒ約シテ周池ヲ塡メ客兵ヲ退フ家康令シテ卒十万人ヲ發シテ外城ヲ毀チ空濠ヲ塡メシム唯牙城ノ一隅ヲ存スルノミ

大坂夏ノ役ノ起リ及結果如何

秀頼母子客兵ノ勸メニヨリ再ヒ兵ヲ擧ケテ恢復ヲ謀ラントス乃チ遠近ニ募リテ十五万人ヲ得タリ家康父子大擧シテ大坂ヲ圍ミ攻戰二日ニシテ城遂ニ陷リ秀頼母子自殺シ治長以下二十余人之ニ殉フ此ニ至リ亂全ク平キ豊臣氏滅フ

徳川氏控御ノ法如何

家康ハ封土ヲ制スルヤ親疎新舊相錯綜セシム是レ大ニ意ノ在ル所ナリ乃チ親藩ヲ七道ノ要地ニ置キテ

外藩ノ項背ヲ扼シ譜代大名ト外様大名トノ封土ヲ錯雜セシメ以テ各孤立シ且互ニ相制セシム又公領ヲ各藩ノ間ニ散在セシメ郡代、代官アリテ人民ヲ支配シ京大坂甲府駿府等ニハ大名ヲ封セス城代ヲ置キテ在番セシメ京師ニハ所司代ヲ置キテ近畿ノ政ヲ司トラシム而シテ根據ヲ關東ニ定メ幕府ヲ江戸ニ開キ又諸大名ノ邸宅ヲ江戸ニ置カシメ其妻子ヲ此ニ留メテ封地ニ至ラシメス蓋シ之ヲ以テ質トスルナリ是ニ於テ徳川氏ノ基礎全ク定リテ諸侯屏息シ全國太平ニ歸ス

徳川氏鎖國ノ主義ヲ執リシ所以如何

蓋シ耶蘇教徒ノ其教ヲ廣ムルヤ漸ク人心ヲ服シテ我國ヲ傾ケント欲スルモノトナシ嚴ニ之ヲ禁セシハ豊臣氏既ニ然リ然レトモ徳川氏ニ至リテ其禁ヲ犯スモノ止マサルヲ以テ不測ノ變アランヿヲ恐ルヽノ際島原ノ亂アリ是ニ於テ西教ノ害益大ナルヲ察シ啻ニ之ヲ奉スルモノヲ嚴刑ニ處セシノミナラス西人ノ來航ヲ禁シ又堵度ヲ平ニセシメ以テ邦人ノ外國ニ至ルノ路ヲ塞キ僅ニ和蘭支那ノ二國ノミ長崎ニ來リテ貿易スルヲ許ス蓋シ此二國ハ只貿易ノ一途ノミヲ以テ來リタルガ故ナリ之ヨリ長ク鎖國ノ主義ヲ執ルヿトナレリ蓋シ之ヲ一言スレハ初メ家康ノ大ニ通商ヲ開カントス欲セシニ拘ラス遂ニ鎖國ノ主義ヲ執ルニ至リシモノハ耶蘇教ヲ恐ルヽガ故ニ外ナラザルナリ

家康ノ人トナリヲ問フ

沈毅ニシテ英略アリ兵ヲ用ル神ノ如ク又能ク學ヲ好ミ將士ヲ愛ス而テ百事周密ニシテ至ラサルナク自

ラ節儉ヲ守リ最モ稼穡ヲ重ンズ且又言路ヲ開キ士氣ヲ鼓舞スルノ道ヲ開ケリ而レドモ陽ニ朝廷ヲ尊トビ陰ニ之ヲ抑制シ其權謀術數ノ巧ナル人得テ之ヲ窺フ能ハス天下ノ人心皆其籠絡ノ中ニ陷レリ之ヲ以テ能ク三百年太平ノ基ヲ開クヲ得タリ又德川氏ノ世文學ノ隆興セルハ家康ノ力多ニ居ルト雖モ蓋シ大ニ爲メニスル所アリテ文學ヲ興セルヤ亦疑ヲ容レス

八十

島津氏琉球ヲ征セシハ如何ナル次第ナルヤ

初メ文武元明ノ朝ニ琉球歸服シ足利氏ノ時ニ至リテ屢入貢ス義敎琉球ヲ嶋津忠國ニ賜ヒ其附庸トス秀吉朝鮮ヲ征スルニ及ヒ琉球王尙寧ヲシテ兵ヲ出サシム尙寧來ラス復タ入貢ヲ欠ク家康嶋津家久ヲシテ之ヲ招カシムレドモ至ラス家久乃チ幕府ニ請ヒ兵ヲ遣ハシテ王城ヲ陷レ尙寧父子ヲ擒ニシテ歸ル幕府琉球ヲ家久ニ賜フ

德川氏ノ威權ハ何ニヨリテ定リシヤ

家光豪爽ニシテ英斷ナリ恩威並ヒ行ハレテ諸將畏服ス朝ニ事フル恭順尤モ祖先ヲ尊ヒ談之ニ及ヘハ必ス容ヲ改ム初メ家康秀忠皆諸藩會同ノ時自ラ之ヲ郊迎ス秀忠職ヲ辭シ家光將軍トナリ諸侯伯ヲ論シテ之ヲ待ツ一譜第ニ同クシ謂フテ曰ク若シ心ニ厭カサレハ三年ノ暇ヲ給セン熟思シテ去就ヲ決セヨト列侯名攝伏ノ命ヲ奉ス家光又特ニ寢室ニ坐シ諸侯ヲ引見シ一人毎ニ佩刀ヲ賜ヒ且其刀ヲ檢セシム衆其大度ニ服ス秀忠薨スルニ及テ諸侯伯ニ謂テ曰ク前將軍薨ス諸君或ハ天下ヲ望マハ唯其欲スル所ノマヽナリ然レドモ家光既ニ軍職ニアリ須ク弓箭ヲ以テ之ヲ授受スベシ伊達政宗進テ曰ク今日誰カ德川氏ノ澤ヲ被ラサラン敢テ異心ヲ挾ムモノアラハ政宗請フ先ツ往テ之ヲ誅セン衆皆之ヲ贊ス之ヨリ德川氏ノ威權益定ル

島原ノ役ヲ問フ

初メ大友小西ノ亡ブルヤ其遺臣猶天主敎ヲ奉スルモノ諸方ニ散在セリ家光益西敎ヲ禁スルニ及テ遂ニ士民ヲ煽動シテ亂ヲ作シ島原城ニ據ル天草時貞其主タリ幕府乃チ前後相繼テ板倉重昌松平信綱等ヲ遣ハシ軍事ヲ督セシム細川黑田鍋島有馬小笠原立花ノ諸侯兵ヲ發シテ之ヲ攻ム年ヲ踰ヘテ漸ク平グ之ヨリ天主敎ノ禁益嚴ナリ

德川氏時代文學ノ景況如何

家康曾テ言フ應仁以來父子君臣相爭フハ書ヲ讀ミ道ヲ知ラサルニヨルト關ケ原ノ戰終ルニ及ヒテ意ヲ銳クシテ治ヲ求メ務テ文學ヲ興ス時ニ藤原肅文學ヲ以テ名アリ家康之ヲ延キ又其門人林信勝ヲ聘シテ顧問トス肅等名敎ヲ以テ自ラ任シ絕ヘタルヲ繼キ廢レタルヲ起シ海內再ヒ文運ノ化ニ浴スルヿヲ得ルニ至レリ之ヨリ林氏ノ子孫相繼テ幕府ノ儒員トナル綱吉上野ノ孔子ノ廟ヲ神田ニ移シ昌平校ヲ建ツルニ及ヒ諸藩相繼キテ學校ヲ建ツルモノ多ク米澤ノ興讓館水戸ノ弘道館熊本ノ時習館長州ノ明倫館會津ノ日新館等尤モ著ハル此時又儒者ノ諸國ニ輩出スルモノ尤モ多ク中江藤樹熊澤蕃山山崎闇齋貝原益軒

木下順庵伊藤仁齋伊藤東涯物徂徠中村惕齋等各其奉スル所ノ學派ヲ異ニスト雖モ皆一時ノ傑出ニシテ其著書亦多ク教育ノ功博ク且ツ大ナリ家宣ム時新井白石アリ獨リ博學多識ナルノミナラス器宇宏大ニシテ經綸ノ才アリ家宣ヲ輔ケテ頗ル制度ヲ變更シ政治ヲ補稗スルヿ甚タ多ク林氏ト相並テ文學ノ權ヲ取レリ著書三百餘藩翰譜其一ナリ其他博學ヲ以テ名アルモノ一ニシテ足ラス或ハ朝ニ在リ或ハ野ニアリテ皆文教ヲ司ドレリ家齊柴野栗山古賀精里尾藤二州等ヲ擧ケテ學政ヲ司ラシムルニ及ヒテ德川氏ノ文學愈盛大ヲ極ムルニ至レリ

天皇ノ火葬ヲ止メシハ何レノ時ナルヤ

持統天皇ノ崩セラレシヨリ始テ火葬ヲ行ヒ之ヨリ一ノ成規トナリテ列朝皆之ヲ行フ後光明天皇大ニ火葬ヲ厭ヒ舊典ヲ復セント欲ス帝崩スルニ及ヒテ京都ノ魚賈八兵衛ナルモノ、建議ヲ用ヒ舊典ヲ復スヿリ朝廷復タ火葬ヲ用ヒス

家光家綱ノ人材ヲ擧ケヨ

井伊直孝松平信綱阿部忠秋板倉重宗酒井忠勝板倉重矩等皆才幹アリ就中最モ警敏ニシテ政務ニ明ナルハ信綱ニシテ其治績ノ稱スヘキモノ甚タ多シ又剛武ニシテ能ク機ヲ制スルノ德川賴宣「紀伊」アリ學ヲ好ミ治体ニ明ナルノ松平正之「會津」アリ英才ヲ以テ稱セラル、池田光政「備前」アリ此時最モ人材ニ富ム

德川氏初世武家ノ制度如何

家康自ラ法制百個條ヲ書シテ後世之ニ準據セシム又貞永建武ノ式目ニ倣ヒ新ニ之ヲ頒チ以テ武家ノ法則トス左ノ個條ノ如キハ皆其禁スル所ナリ

他國ノ民ノ雜居スルヿ
私ニ婚姻ヲ結フヿ
不輒ヲ懷クコト
變亂アルモ令ヲ待タスシテ動クコト
私ニ城廓ヲ築クコト
衣服ノ等差ヲ亂ルコト
國法ニ背クコト

其他文武ヲ勸メ佚遊ヲ制シテ節儉ヲ勸ムルノ條アリ家光ニ至リ更ニ國主領主等私ノ爭論ヲナスヲ禁シ耶蘇教ヲ禁スルノ條ヲ加フ綱吉又殉死ノ禁ヲ以テ之ニ加ヘタリ之ヲ其大略トス

綱吉ノ政ハ如何

初メ綱吉子ナキヲ憂フ僧隆光勸メテ殺生ヲ禁セシメ府下ニ場ヲ設ケテ無數ノ犬ヲ畜フ殊ニ犬ヲ殺スモノハ死刑ニ處スルニ至ル蓋シ綱吉戌ノ年ヲ以テ生レシニヨルナリ時人之ヲ譏リテ犬公方ト云フ綱吉政ヲナスヿ嚴ニシテ上下之ニ苦ム

德川光國ハ如何ナル人ゾ

家康ノ四子賴房ノ子ナリ天資英明ニシテ仁恕ナリ銳意治ヲ圖リ賦稅ヲ輕クス文學ヲ好ミテ奢侈ヲ戒メ

又最モ義ヲ重シテ一藩其風ニ化ス今其一二ヲ擧ケン

楠正成ノ墓荒廢年久シキヲ慨キ碑ヲ湊川ニ立テ、嗚呼忠臣楠子之墓ト云フ世皆其義ヲ稱ス

天使ノ江戸ニ至ルヤ德川氏ノ親藩多ク使ヲ旅館ニ遣テ之ヲ禮ス光國之ヲ以テ朝廷ヲ敬スルノ道ニ背クトシ自ラ往テ禮ヲ行フ一般尊王ノ風之ヨリ起ル

兵亂ノ後國史ノ廢レタルヲ歎シ彰考館ヲ開キテ諸學士ヲ招キ古今群籍記錄ノ散逸セルモノヲ搜索シテ遂ニ一大部ノ書ヲ編ス朝廷名ヲ賜テ大日本史ト云フ

足利氏以來文學衰滅シ武人皆字ヲ知ラス文墨ノ事ハ唯僧侶ノ之ヲ講スルモノアルノミ是ニ於テ儒者亦僧徒ノ風ニ倣フテ皆髮ヲ削ルノ風行ハレシガ光國命シテ髮ヲ蓄ヘシム

德川氏中興ノ主トハ誰ゾ又其治績如何

將軍家繼薨シテ德川吉宗紀伊ヨリ入テ之ヲ繼ク吉宗聰明ニシテ果決ナリ大ニ前代ノ弊政ヲ釐革シ賢良ヲ擧ケ言路ヲ開キ文武ヲ勵シ殖産ノ道ヲ講ス吉宗刑律ニ明ニシテ務テ輕減ニ從ヒ確証アリテ伏罪セサルモノヲ除クノ外拷問ヲ禁ス又タ敎書ヲ除クノ外西洋ノ書籍ヲ購讀スルヲ許セシヲ以テ之ヨリ洋書ヲ讀ムモノハ頗ル多シ其他治績ノ稱スヘキモノ甚タ多ク家光薨セシヨリ德川氏ノ業一旦替レテ弊政多カリシガ是ニ至テ復タ盛ナリ世稱シテ中興ノ主トス

洋學ノ來歷如何

德川家宣ノ時新井白石ヲシテ羅馬人並ニ和蘭人ニ就キテ其土俗人情ヲ探究セシメシヿアリ洋學端ヲ此時ニ開キ吉宗ニ至リ江戸人青木文藏ヲ長崎ニ遣リ西川如見等ト共ニ蘭人ニ就キテ其學ヲ講習セシム洋文ヲ講スルヿ之ヲ始トス之ヨリ邊疆漸々多事ナルニ及ヒ洋學ヲ修ムルノ必要ヲ悟リテ之ヲ講スルモノ次第ニ多ク就中諸藩ノ醫師ノ蘭人ニ就キテ之ヲ講スルモノ頗ル多シ此時既ニ翻譯ノ業ニ從事セルモノアリ我國ニ於ケル西洋ノ學藝中醫學最モ早ク開ケタルハ之ニヨリテナリ之ヨリ後理學ヲ究ムルモノアリ化學ヲ講スルモノアリ地理歷史ヲ主トスルモノアリテ蘭學愈盛ナリ高野長英慷慨ニシテ氣節アリ渡邊華山等ハ存志ト相往來シテ時事ヲ評論シ且大ニ蘭學ヲ研究シテ之ヲ主張スルニ及ヒ大ニ世ノ氣運ヲ振起セリ後幕吏洋學者ヲ以テ異說ヲ立テ上ヲ惑ハスモノトシ長英華山等ヲ禁獄ニ處スルニ及ヒ（二人共後自殺ス）一時洋學ヲ嫌忌スルノ風ヲ生シタリト雖モ自然ノ大勢ハ人爲ノ得テ制スヘキニアラサレハ洋學ハ勢益騖々乎トシテ進ミ佐久間象山路木春山等相繼テ出テ遂ニ今日アルヲ致セリ

松平定信ノ政治ヲ問フ

德川家齊松平定信ヲ擧テ老中ノ首坐トス定信賢ニシテ才幹アリ節儉自ラ率ヰ銳意治ヲ圖ル痛ク前代若侈ノ弊ヲ改良シ制度大ニ備ハレリ

吉宗以後德川氏ノ盛衰如何

吉宗薨ルヤ其子家重昏愚ナリ寵臣田沼意次等權ヲ專ニシテ賄賂公行シ政令甚タ紊亂セリ家治ニ至リテ、

更ニ甚タシ家齊ノ時松平定信ヲ擧ケテ大ニ弊政ヲ除キシト雖モ晩年政治ニ怠リ上下奢侈ニ流ル德川氏衰微ノ本實ニ此ニアリ是ヨリ後幕政益衰ヘ

〔243〕

德川時代ノ風俗ヲ聞カン

戰亂ノ後諸事質素ヲ主トシタリト雖モ太平ノ久シキニ慣レ儉素ハ變シテ奢侈トナリ勇武ハ化シテ惰弱ニ流レ平素ノ交際概ネ虛禮ニ陷リ又時俗漸ク巧詐ニ傾ケリ大小三百藩其風各異ナリト雖モ要スルニ士族以上ノ特權甚タ强ク其平民トノ段階非常ニ甚シカリシハ一ナリ殊ニ卒以下ノモノニシテ士以上ニ對シ些細ナリトモ無禮ヲナスアレハ其過失ナルト否トニ拘ラス之ヲ斬殺スルノ權ヲ與ヘシ所アリ亦甚シト言フベシ今衣食住ノ主ナルモノ一二ヲ左ニ揭ケン

武家ノ禮服ニハ直垂上下等アリ皆通常服(之ハ現時ノモノト大差ナシ)ノ上ニ着ルモノトス又官位アルモノ大禮ノ時ハ相當ノ衣冠ヲ着スルノ制タリ中以上ノ婦女ハ袿ト稱スルモノヲ用フ又婦女ハ初メ編笠菅笠等ヲ被リシカ後ニ日傘ヲ用ヒテ之等ノモノヲ廢スルニ至レリ勝山髷嶋田髷等ノ風ハ皆此時代ヨリ起リ鬢附髮油插櫛白粉等ヲ用フルノ風亦綱吉以後奢華ノ風俗生スルニ及ヒテ流行ヲ始メタリト云フ家屋ノ建築モ其沿革一ナラスト雖家齊以後ニ至リテハ尤モ華麗ヲ極メ從テ士以上ノ家屋ハ門玄關等ノ構造頗ル嚴ニシテ庶人ノ家ニ瓦ヲ用フルモノ亦漸ク多シ

食事ハ此代ヨリ三食トナレリト云フ又清酒釀造ノ始ハ此時代ニアリ

〔244〕

全時代美術ノ景況如何

名ヲ繪畫ニ轟カシテ自ラ一家ノ生面ヲ開ケルモノ多ク彫刻ノ術亦大ニ進歩ス殊ニ日光廟ノ裝飾ノ如キ實ニ海内無双ノ名ニ背カズ之ヲ觀ルモノ驚愕セサルモノナシ其他陶器漆器織物ノ術ノ如キ皆大ニ進歩シ品質ノ精緻ヲ盡スモノ頗ル多シ

〔245〕

德川幕府ノ刑法ハ如何

正刑ニハ死刑、流刑、追放、杖アリ死刑ニハ斬罪、焚殺、磔、梟首、鋸挽等アリ父母ヲ殺スモノハ磔シ主ヲ殺スモノハ鋸シテ而シテ之ヲ磔ス追放ニモ江戸拂門前拂所拂ノ數等アリ其他晒縣、引廻等ノ附加刑ヲ設ケ別ニ閏刑ノ法アリ蟄居、改易、閉門、切腹等トス僧侶及ヒ庶人ニ於ケルノ閏刑ハ別ニ之ヲ定ム令條總テ八十一則科目凡百八十一刑律畧備ハル

〔246〕

至尊諡号ノ制ヲ復セシハ何レノ時ソ

宇多帝ノ時院号ヲ稱セシヨリ諡号ヲ廢セシカ光格天皇崩スルニ及ヒ水戸ノ德川齊昭ノ建議ヲ用ヒテ其法ヲ復ス

〔247〕

米艦渡來ノ始末ハ如何

昇平二百餘年士氣怠惰武備弛廢セルノ時ニ當リ恰モ弘化二年二月亞米利加ノ軍艦浦賀ニ來リテ互市ヲ請フ幕府諭スニ互市ハ我國ノ大禁タルヲ以テシテ之ヲ去ラシム嘉永六年六月ニ至リ米國ノ使節ペルリ

兵艦ヲ率ヰテ來ル幕府長崎ニ至テシメントスレヒ聽カス國書ヲ奉シテ通商ヲ請フ幕府事ノ重大ナルヲ以テ衆議ヲ盡シ明年ヲ以テ復書セントヲ約スペルリ乃チ再航ヲ約シテ去ル人心悔々タリ安政元年正月ペルリ再ヒ來リテ前請ヲ申ス幕府假館ヲ横濱ニ立テ、之ヲ饗シ遂ニ食料薪炭ヲ求ムルヲ許シ又假リニ下田箱館松前ニ來泊スルヲ許ス之ヨリ先キ魯艦亦來リテ互市ヲ請ヒシカ是ニ至テ米國ニ許ス所ヲ以テ之ニ許シ尋テ英國ニモ亦長崎箱館ニ泊スルヲ許ス此時ニ至リ和戰ノ議論大ニ沸騰シ全國騷然タリ

〔248〕

本邦國旗ノ制ハ何レノ時ニ定リシヤ

將軍家定ノ時白質ニ日章ヲ以テ本邦國旗ノ制ト定ム

〔249〕

佐久間象山吉田松陰等ノ禁錮セラレシ所以如何

極代ノ藩士佐久間象山大ニ洋學ヲ研究シ海外ニ航シテ詳ニ各國ノ事情ヲ視察スルヲ以テ當時ノ急務トス長州藩士吉田松陰學ヲ象山ニ受ケ大ニ其說ヲ喜ヒ海外ニ遊ハントスル米艦ノ來ルヤ松陰象山ニ謀リテ米艦ニ就キ側ニ航セントヲ求ムペルリ許サス之ヲ送還ス幕府乃チ之ヲ禁錮ス外國ニ航スルヿハ當時ハ國禁タルヲ以テナリ

〔250〕

櫻田ノ變トハ如何

歐米各國類ヲ以テ條約ノ締結ヲ迫ルニ及ヒ之ヲ朝廷ニ奏スルト雖ヒ許サレス幕府大ニ其處分ニ苦ム井伊直弼大老トナルニ及ヒ以爲ク各國ノ來リ迫ル此クノ如シ若シ一々之ヲ拒絶セハ其變測ルヘカラス如カ

〔251〕

ス假リニ之ヲ許サンニハト遂ニ假條約ヲ結ヒ後之ヲ朝廷ニ奏ス此時ニ當リ尊王攘夷ハ說大ニ起リテ其勢力甚タ强ク慷慨淋漓大ニ幕府ノ處置ヲ憤ル萬延元年三月三日水戸ノ浪士佐野竹之助大關和七郎等十余人遂ニ相結テ大雪ニ乘シ直弼ヲ櫻田門外ニ要擊シテ之ヲ刺シ其首級ヲ得テ去ル之ヨリ幕府ノ威益衰ヘ殆ト瓦解ノ勢ヲ呈セリ

〔252〕

虎列拉病流行ノ始ハ如何

安政五年暴瀉病大ニ天下ニ流行シ江戸大坂最モ甚シク之カ爲ニ死スルモノ江戸ニ於テ十萬人大坂ニ於テ三萬人ニ及ヘリ暴瀉病ハ今ノ所謂虎列拉病ナリ蓋シ虎列拉ノ流行ハ此時ヲ以テ始トス

〔253〕

種痘ノ始ハ如何

嘉永二年牛痘ヲ傳フルニ始ル

尊攘論者ノ主ナルモノヲ聞カン

水戸ノ德川齊昭實ニ攘夷家ノ泰斗ト稱セラレ長州ノ毛利慶親佐賀ノ鍋嶋齊正土州ノ山内豊信薩州ノ島津久光及ヒ尾張候德川慶勝越前候松永慶永亦皆其說ヲ唱フ而シテ民間ニハ吉田松陰〔長州〕西郷吉之助〔薩州〕梅田源次郎〔若狹〕橋本左内〔越前〕アリ主トシテ攘夷ノ說ヲ唱ヘ又長州ニハ高杉晉作桂小五郎等アリ水戸ニハ藤田小四郎アリ三河ニ松本謙三郎アリ筑前ニ平野次郎アリ意氣頗ル凱切ニシテ議論烈火ノ如ク攘夷ノ論ハ遂ニ一變シテ討幕ノ論トナリ大和五條ノ亂トナリ但馬生野ノ亂トナル此時ニ當リテ

尊王ノ論天下ヲ動カシ幕府ノ勢日ニ衰ヘ滅亡ノ機既ニ熟ス攘夷ノ論今日ヨリシテ之ヲ思ヘハ或ハ其痴ニ類スルカ如キモノアリト雖モ當時ノ勢必ス然ラサルヲ得ザリシモノアルナリ

安政ノ獄トハ如何

〔254〕

安政五年井伊大老間部老中ヲ京師ニ遣ハシ鷹司近衛三條三家ヲ幽シ小林良典橋本左内頼三樹梅田源次郎等數十人ヲ捕ヘテ江戸ニ檻致ス皆攘夷ヲ唱フルヲ以テナリ明年德川齊昭意見ヲ書シテ京師ニ奏ス大老之ヲ以テ幕政ヲ譏ストシ齊昭ヲ水戸ニ禁錮シ德川慶恕松平慶永山内豐信等ヲ屏居セシメ一橋慶喜ヲ幽シ終ニ小林以下ヲ或ハ禁錮シ或ハ流ニ處シ橋本左内頼三樹梅田源次郎ヲ斬ル吉田松陰亦刑ニ死ス惜ヒ哉此人材ヲ失フ時人皆其濫刑ヲ謗ル之ヲ安政ノ獄ト云フ

東禪寺ノ變ヲ記セヨ

〔255〕

尊攘論ヲ唱フルノ徒將ニ大ニ外國人ヲ襲擊セントス幕府諸藩ニ命シテ之ヲ鎮定セシム既ニシテ水戸脫藩ノ士十余人高輪東禪寺ノ英館ニ入リ英人二人ヲ斬ル警衛ノ士衆ヲ督シテ之ヲ禦ギ頗ル死傷アリ英國公使大ニ怒リ將ニ兵ヲ以テ逼ラントス幕府百方諭解シテ事纔ニ釋ク

生麥村ノ變ヲ問フ及其結局如何

〔256〕

天使大原重德東下シテ勅ヲ宣ス嶋津久光護衛シテ之ニ從フ歸途武藏ノ生麥村ヲ過クルヤ會英人數輩馬ヲ馳テ嶋津氏ノ前驅ヲ衝ク衛士怒テ之ヲ斬ル明年英艦數艘横濱ニ至リ書ヲ幕府ニ出シテ償ヲ求ム幕議遂ニ洋銀四十五萬元ヲ與フ英艦又タ鹿兒嶋ニ至リ死傷者ノ撫恤金ヲ求ム薩人幕府ニ詢リテ決セントス英人俄ニ内海ニ入リテ薩ノ漁船ヲ奪フ薩人乃チ風雨ニ乘シ英艦ヲ砲擊ス英艦亦之ニ應シ砲戰二日英艦遂ニ志ヲ得スシテ去リ再擧ヲ圖ル薩人乃チ金貳萬元ヲ幕府ニ借テ之ヲ與フ事初テ平グ

〔257〕

攘夷ノ期日ヲ定メラレシ時ハ如何ナル景況ナリシヤ

將軍家茂德川慶喜等闕ニ至ル勅シテ攘夷ノ期ヲ定ム帝男山ニ幸シ祠前ニ於テ攘夷ノ節刀ヲ將軍ニ賜ハントス將軍疾ト稱シテ出テス因テ慶喜ヲシテ代ハラシム慶喜亦病俄ニ起ルト稱シテ辭シ去ル浪士等之ヲ聞テ憤激シ親征ヲ請ヒ自ラ先鋒タラント請フ朝廷諭シテ之ヲ止ム既ニシテ家茂慶喜ト奏シテ攘夷ノ期ヲ定メ之ヲ列藩ニ令ス生麥ノ事平グニ及ヒ幕府乃チ三港ヲ鎖シ交リヲ絶タンヿヲ各國公使ニ告グ公使等聽カス

〔258〕

長藩ノ京師宿衛ヲ罷メシハ如何ナル事情ニヨルヤ

攘夷ノ詔下ルヤ長藩率先シテ其端ヲ開キ米艦ヲ赤馬關ニ砲擊ス尋テ米佛蘭ノ諸艦ト前後相戰フ五次幕府使ヲ長藩ニ遣ハシ擅ニ外船ヲ擊ツヲ責ム長藩服セス却テ幕使ヲ拘留ス車駕大和ニ幸シ神武天皇ノ廟ニ謁シ親征ヲ議セントスルヤ會飛語アリ長人廷臣ト結ヒ行幸ヲ待テ天子ヲ挾ミ幕府ヲ謀ラント欲ス ト是ニ於テ朝議毛利氏ヲ疑ヒ俄ニ京師ノ宿衛ヲ罷メ薩摩會津桑名ノ諸藩ヲシテ九門ヲ護ラシメ三條實美以下廷臣十三人ノ入朝ヲ禁ス長藩哀訴スレトモ聽レス遂ニ實美等七卿ト長門ニ走ル朝廷乃チ七卿ノ官

爵ヲ削ル

〔259〕

長州征討ノ初ハ如何ナル次第ナルヤ

毛利ノ家臣福原越後兵ヲ率テ伏見ニ入リ七卿ノ官爵ヲ復シ藩主父子ノ入朝ヲ許サンヿヲ請フ既ニシテ國司信濃益田右衛門亦兵ヲ率テ嵯峨山崎ニ至ル京師戒嚴ス朝廷遂ニ討伐ノ議ヲ決ス長人之ヲ聞キ憤激シテ以爲ク之レ會藩等ノ纔ニヨル・モノナリト君側ヲ清ムルヲ名トシ兵ヲ分テ進ミ京師ニ逼ル薩會桑諸藩ノ兵力戰シテ長人ヲ却ク長人殘兵ヲ收テ國ニ歸ル朝廷毛利父子ノ官爵ヲ削リ長州退討ノ令ヲ諸藩ニ下シ德川慶勝ヲ以テ總督トシ薩藩以下ノ兵ヲ分テ向フ所ヲ定ム

〔260〕

長州謝罪ノ實証如何

征討總督德川慶勝進テ廣嶋ニ至ル時ニ毛利ノ臣族京師ノ亂ニ與ラサルモノ慶親父子ヲ寺院ニ幽シ國司福原益田等ヲ斬リ罪ヲ謝ス乃チ令シテ曰ク山口城ヲ毀テ曰ク五卿ヲ出セ曰ク慶親父子自ラ來テ罪ヲ謝セヨ曰ク激論ヲ鎮セヨト長藩命ヲ奉シ三條實美等五卿ヲ太宰府ニ移ス

〔261〕

再ヒ征長ノ兵ヲ出セシハ何故ゾヤ

毛利ノ臣族國司等ヲ斬リテ罪ヲ謝スルノ時ニ方リ長藩分レテ兩黨トナリ恭順ヲ主トスルモノヲ以テ俗論黨トナス高杉晉作山縣狂介(有朋)等謝罪ノ論ニ服セス奇兵隊ヲ率テ俗論黨ト戰テ大ニ之ヲ破リ首謀數人ヲ刑ス是ニ於テ藩論遂ニ一定セリ高杉等乃チ藩主父子ヲ山口ニ奉シ相謀テ曰ク幕府必ス再ヒ兵ヲ

〔262〕

致サン請フ諸君ト共ニ力戰シテ死者ノ魂ヲ慰セン諸君夫レ努力セヨ衆奮然之ニ從フ慶應元年藩府再ヒ征長ノ令ヲ布ク德川慶勝幕府ニ上書シテ之ヲ諫ム島津忠義亦其名ナキヲ陳ス皆聽カス

薩長ノ好ヲ通シタル始末ヲ聞カン

京師ノ變薩軍痛ク長兵ヲ擊チ捕獲頗ル多シ既ニシテ藩士西鄕吉之助(隆盛)等相謂テ曰ク方今ノ務ハ海内一致以テ皇國ヲ護スルニ在リ兵ヲ國内ニ結ブハ策ノ得タルモノニアラス且ツ共ニ事ヲ謀ルヘキモノ獨リ長藩アルノミ宜ク怨ヲ捨テ、力ヲ併スヘシト長ノ捕囚ヲ還シ黑田了介〔清隆〕等ヲ密使トシテ長州ニ遣ハシ好ヲ通ス兩藩是ニ於テ怨ヲ解ケリ幕府再ヒ長州ヲ討ツヤ薩藩師ノ名ナキヲ唱ヘ敢テ兵ヲ出サス

〔263〕

政權返上ノ始末ヲ問フ

土州侯山内豐信病ヲ以テ國ニ歸リ竊ニ國内ノ紛擾ヲ憂ヘ其臣後藤象二郎等ヲシテ書ヲ幕府ニ上ラシメテ曰ク中古以還政權武門ニ歸スルト雖モ外舶來テ互市ヲ請フニ及ヒ物議紛々底止スル所ヲ知ラス内訌亦止ム時ナシ之レ他ナシ政令二途ニ出ルヲ以テ天下向フ所ヲ知ラサレハナリ今日ノ勢敢テ舊樣ヲ墨守スヘキニアラス宜シク大權ヲ朝廷ニ奉還シ協心戮力以テ皇國ヲ護シ萬國並立ノ基ヲ立ツヘシ是レ今日ノ最モ急務ニシテ幕下ノ賢盖シ之ヲ知ラン將軍慶喜列藩群臣ヲ會シ意見ヲ陳セシム諸第ノ臣多ク之ヲ非トス然ルニ後藤象二郎及薩藩ノ小松帶刀堅ク政權奉還ノ說ヲ執テ之ヲ勸ム將軍遂ニ意ヲ決シ上表シ

テ軍職ヲ辭ス其意國家多難ノ際政令一途ニ出テサルヘカラズ今ヨリシテ後天下ノ事一ニ震斷ヲ仰ギ皇國ヲ無究ニ保護セント云フニアリ朝廷優詔之ヲ許ス源頼朝府ヲ鎌倉ニ開キシヨリ六百八十三年家康ヨリ二百六十五年ニシテ王政復古ス實ニ紀元二千五百二十七年ナリ是レ我國勢第三ノ大變遷ナリ

〔264〕 德川時代稅法ノ概畧ヲ擧ヨ

此際各藩其制ヲ異ニスト雖モ大抵水田並ニ陸田ヲ各四等ニ分チ其良否ニ從ヒテ租額ニ差違ヲ立テリ而シテ概スルニ關東ハ田租ハ米ヲ課シ畑ニハ金ヲ課ス之レ畑多クシテ田少キニヨル然ルニ西南地方ハ之ニ反シ稅額ヲ三分ノ其二ハ米ヲ以テ之ヲ納メシメ其一ハ金ヲ以テ之ヲ納メシム之レ田多クシテ畑少ケレハナリ而シテ其租ヲ定ムルノ法種々アリト雖モ今茲ニ之ヲ略ス

〔265〕 慶應三年十二月ノ新制如何

德川慶喜既ニ政權ヲ奉還シ軍職ヲ辭ス詔シテ幕府及ヒ攝關其他ノ職ヲ廢シテ權リニ總裁議定參與ノ三職ヲ置キ諸政ヲ總理セシム有栖川熾仁親王ヲ以テ總裁トシ三條實美岩倉具視等ヲ議定ニ任シ小松帶刀木戸準一郎後藤象二郎等ヲ參與トス令シテ曰ク今ヨリ大小ノ政令悉ク朝廷ヨリ出ヅ四方其レ之ヲ体セヨ

〔266〕 一世一元ノ制ヲ立テシハ何レノ時ナルヤ

慶應四年九月明治ト改元シ詔シテ一世一元ノ制トナス

〔267〕 五事ノ誓約トハ如何

二條城ヲ以テ太政官代トシ庶政ヲ裁決ス天皇親臨シテ公卿諸侯ヲ會シ誓テ曰ク廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スベシ曰ク上下心ヲ一ニシ盛ニ經綸ヲ行フベシ曰ク官武一途庶民ニ至ルマデ各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス曰ク舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ曰ク知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシト

〔268〕 江戸遷都ノコトハ何ニ基クヤ

參與大久保利通遷都ノ建議ヲナス上表ノ畧ニ曰ク王師大ニ捷テ賊首東ニ走ルト雖モ列藩ノ向背未タ定ラス外國ノ交誼未タ盡サス此際ニ方リテハ宜ク非常ノ英斷ヲ以テ非常ノ事ヲ行フベシ然ルニ平安ノ地ハ一方ニ僻在シ規摸狹小ニシテ大ニ聖謨ヲ開クニ足ラス今日ノ急務ハ都ヲ大坂ニ移シテ宿弊ヲ一洗スルニアリ希クハ聖明之ヲ裁斷セヨト朝廷之ガ議ヲ下ス岩倉具視都ヲ江戸ニ遷スノ議アリ遂ニ之ニ決ス然レトモ利通ノ議之ヲ動カスナリ乃チ車駕江戸ニ幸シ東京ト改稱ス

〔269〕 鳥羽伏見ノ戰爭ノ起リハ如何

慶喜既ニ政權ヲ解キ政朝廷ニ歸スルト雖モ費用ノ充ツヘキナキヲ以テ朝議其封五百萬石ヲ收メテ國用ニ供シ三百萬石ヲ給シテ慶喜ヲ議定職ニ列セントス因テ德川慶勝松平慶永ヲ大坂ニ遣リ慶喜ヲ諭シ其入京ヲ命シ且ツ小隊ヲ以テ京ニ入ルヘキヲ論ス慶喜命ヲ奉ス然レトモ意自ラ安ンセス德川ノ臣族等尾越

ノ言ヲ以テ信スヘカラストシ會桑二藩ノ兵ヲ先鋒トシ京ニ入ル朝議乃チ薩長ノ兵ヲ出シテ伏見鳥羽ノ兩道ヲ塞ク之ヨリ先キ朝廷會桑二藩ノ宿衛ヲ止メ毛利父子ノ官爵ヲ復シ三條實美以下ヲ召還シテ官位ヲ復ス(慶應三年十二月九日)慶喜此議ニ與ラサルヲ憤リテ書ヲ上リ遂ニ松平容保等ヲ率テ大坂ニ至ル朝議之ヲ怪ミ會桑二藩ノ入京ヲ禁ス是ニ至テ遂ニ戰端ヲ開ケリ

德川慶喜ハ何ニヨリテ恭順ノ實ヲ表セシヤ

東征ノ官軍道ヲ分テ大ニ進ム德川ノ臣族相曾シテ軍事ヲ議ス時ニ慶喜既ニ前非ヲ悔テ恭順ヲ主トシ獨リ勝安房大久保一翁等ト謀リ臣屬ニ諭シテ城ヲ出テ上野寛永寺ニ屏居シテ罪ヲ待ツ海道ノ先鋒既ニ品川驛ニ至ル安房固ヨリ參謀西鄕隆盛ト相知ル乃チ具サニ慶喜恭順ノ意ヲ陳ス隆盛之ヲ有栖川總督宮ニ啓シ江戸攻擊ヲ中止ス勅使柳原前光江戸城ニ入リ宣旨ヲ傳フ曰ク慶喜ノ死一等ヲ減シテ水戸ニ屏居セシム曰ク江戸城及ヒ軍艦兵器ヲ獻セヨ曰ク逆ヲ助クルモノ特ニ死一等ヲ減ス罪ヲ定メテ之ヲ奏セヨ慶喜退テ水戸ニ徙ル

會津城攻擊ノ略況ヲ記セヨ

官軍諸道ノ賊兵ヲ破リ漸ク會津ノ城下ニ集ル城傍ニ天寧寺山アリ官軍之ニ據リテ日ニ城中ヲ攻擊シ城樓ヲ破摧ス城中大ニ苦ムト雖ヒ或ハ故サラニ紙鳶ヲ飛ハシテ餘暇ヲ裝フ參謀伊地知正治山縣有朋板垣退助等相謀テ曰ク懸軍敵地ニ入リ曠日彌久セハ恐クハ變ヲ生セン如カス勝敗ヲ一舉ニ決センニハ乃チ諸軍ノ向フ所ヲ定メ攻擊甚タ力ム時ニ城中糧饋已ニ支ヘス降伏ノ議起リ使者ヲ遣ハシテ其情ヲ陳ス官軍乃チ之ヲ許ス容保父子城ヲ出テ、軍門ニ降リ城地兵仗ヲ献ス城兵四千九百人皆降ル實ニ明治元年九月廿三日ナリ

箱館戰爭ノ結局ハ如何

激戰數次賊軍頻リニ破ラレ退テ五稜郭ニ走ル參謀中山良三五稜郭ニ至リ榎本ニ說クニ順逆ヲ以テシ之ヲ降サントス榎本曰ク命ヲ奉スル能ハス當サニ軍門ニ相見ルベシト更ニ海軍律書二卷ヲ出シ良三ニ附シテ曰ク某曾テ歐洲ニ在リ見聞スル所ヲ錄スルモノナリ聊カ君カ厚意ニ酬フ苟モ國家ニ益アラハ幸之ニ過キスト參謀書ヲ榎本ニ與テ懇ニ之ヲ謝シ又酒五樽ヲ贈テ將士ノ勞ヲ慰ス既ニシテ榎本衆寡敵スヘカラサルヲ度テ衆ニ代リ自殺セントス衆之ヲ諫止ス時ニ官兵田嶋敬藏來テ榎本ニ說クニ順逆ヲ以テス榎本等乃チ衆ニ代リ刑ニ就カンヿヲ議シテ降ヲ約ス乃チ日ヲ期シテ郭ヲ開カシム期ニ至リ榎本鎌二郎大鳥圭介等出テ、軍門ニ降ル之ヨリ前後相踵テ降ルモノ千餘人北海始テ平ク時ニ明治二年五月十八日ナリ

外國公使朝見ノ始ハ如何

明治元年三月英佛蘭諸國ノ公使人朝シテ天皇ニ謁見シ新政ノ盛事ヲ賀ス之ヲ其始トス

廢藩置縣ノ始末如何

明治二年薩長土肥ノ四藩主率先上表シテ封土ノ私有スベカラサルヲ論シ版籍ヲ奉還センヿヲ請フ其略ニ曰ク天祖國基ヲ建テシヨリ皇統一系万世無窮ニシテ普天ノ下率土ノ濱其有ニアラザルナク其臣ニアラサルナシ之レ我國体ニシテ且ツ興ヘ且ツ奪ヒ尺土一民モ之ヲ私セシメサルハ之レ朝廷ノ大權ナリ然ルニ中世以降紀綱一タヒ弛ヒシヨリ權ヲ弄シ柄ヲ爭フモノ踵ヲ接シテ起リ王民ヲ私シ王土ヲ攘ミ朝廷徒ニ虛器ヲ擁スルヿ六百余年今大政古ニ復シ万機宸斷ニ出ツ臣等謹テ版籍ヲ奉還セント列藩之ニ倣フ朝廷之ヲ許シ知事ヲ置キテ朝令ヲ循行セシメ假リニ藩主ヲ以テ藩知事トナス是ニ於テ封建ノ制一變セリ尋テ公卿大名ヲ廢シテ華族トス明治四年七月十四日詔シテ藩ヲ廢シテ縣ヲ置キ各藩知事ノ職ヲ解キテ舊封現石ノ十分一ヲ給シ之ヲ東京ニ移住セシメ全國ヲ分テ三府數十縣トシ府ニ知事ヲ置キ縣ニ令ヲ置キテ之ヲ治セシム是ニ於テ數百年來封建ノ制全ク廢レテ古昔王朝郡縣ノ治ニ復ス之ヲ我邦地方政治ノ一大變革トス時ニ紀元二千五百卅一年ナリ

征韓論ノ原因及其影響如何

朝廷新政ノヿヲ朝鮮ニ通シ舊好ヲ修メントス然ルニ朝鮮ノ答書頗ル悖慢ナリ陸軍大將近衛都督兼參議西鄕隆盛參議後藤象二郎板垣退助副島種臣江藤新平等征韓ノ論ヲ主張シ意氣頗剴切ナリ會右大臣岩倉具視歐洲ヨリ歸朝シ執テ大ニ之ヲ不可ナリトス事遂ニ已ム隆盛等病ト稱シテ出テス相踵テ官ヲ辭ス物議恟然タリ遂ニ延テ佐賀ノ亂トナリ萩ノ亂トナリ鹿兒島ノ大亂トナリ多ク豪傑ヲ失フノミナラス夥シ

ク國財ヲ費耗セリ實ニ維新以後ノ大不幸ナリ

臺灣征討ノ原因結果ヲ問フ

明治四年十一月臺灣ノ土蠻我琉球人ノ漂泊セルモノヲ暴殺シ又七年三月備中ノ漂民ヲ剽掠セルヲ以テ之ヲ清國政府ニ計ルニ答フル所頗ル曖昧ナリ是ニ於テ征臺ノ議起リ陸軍中將西鄕從道ヲ以テ都督トシ陸軍少將谷干城海軍少將赤松則良ヲ以テ參軍トシ之ヲ討ツ諸藩風ヲ望テ降ル然ルニ清國之ヲ以テ濫リニ臺灣ヲ討ツトナシテ異議ヲ立ツ全權公使柳原前光辨論數回清人遂ニ服セス乃チ參議大久保利通ヲ特命全權辨理大臣トシ清國ニ遣ハス利通遂ニ清國政府ヲ屈セシメ清國ヲシテ償金五十万兩ヲ出サシメ永ク航海ノ客ヲ保護スルヲ約シテ歸ル

西南ノ役ノ起リハ如何

征韓論ノ議合ハズシテ西鄕隆盛等ノ官ヲ辭スルヤ跡ヲ屏蟄ニ託シテ自ラ耕シ又皆ヲ捐テ私學校ヲ起シ學徒ヲ集ム數年ニシテ學徒益多ク勢力漸ク强クシテ時ニ劍擲ヲ學ヒ銃隊ヲ操シ慷慨激昂無事ニ苦ム者ノ如シ明治十年二月大坂鎭臺ノ士官三菱會社ノ赤龍艦ニ駕シ鹿兒嶋縣下櫻島ニ赴キ其彈藥製造所ノ火藥ヲ載シテ港ヲ發セントスルヤ私學校ノ徒之ヲ刼奪シ警部中原尙雄等ヲ捕ヘ揚言シテ曰ク大久保川路等ノ密囑ヲ受ケ西鄕大將ヲ刺殺セントスル者ナリト是ニ於テ縣令大山綱良檄ヲ沿道ニ傳ヘ西鄕大將政府ニ問ハントスル所アリ護兵ヲ率ヒテ東上スルヲ告ク使者熊本鎭臺ニ至ル少將谷干城叱シテ之ヲ卻

〔278〕

ク專ラ防禦ノ備ヲナス之ヨリ先キ朝廷河村純義ヲ遣ハシテ其狀ヲ訊ハシム私學校ノ徒兵器ヲ弄シテ其上陸ヲ拒ミ將ニ官艦ヲ奪ハントス乃チ有栖川熾仁親王ヲ征討大總督トナシ山縣有朋河村純義ヲ參軍トシ以テ之ヲ討シ詔シテ西鄕以下ノ官爵ヲ削ル

西南ノ役谷干城熊本城ヲ守ルヿヲ記セヨ

鹿兒島ノ亂賊軍進テ熊本城ヲ圍ムヿ數重陸軍少將谷干城堅ク守テ屈セス賊兵急ニ之ヲ陷レント欲シ日夜砲擊已マスト雖モ城中爲ニ少シモ動カス然ルニ圍ヲ受クルヿ已ニ五十餘日ニ及ヒ糧食乏シク餘ス所僅々十餘日ヲ支フルノミ之ニ於テ戰事四飯ノ制ヲ減シテ三飯トシ間々粥或ハ菽麥ヲ用テ之ヲ補フ而シテ文官ハ一日兩度糧粥ヲ食フノミ一片ノ肉以テ養ニ供スルナク或ハ廢馬ヲ屠リ或ハ濠中ノ鯉鮒ヲ取リテ之ヲ食フニ過キス城中乃チ議シテ八代口ノ官軍ト聯絡ヲ通セントト欲シ奥少佐一大隊ヲ率ヰ圍ヲ潰シテ出ツ是ニ於テ官軍始テ聯絡ヲ通シ諸道益進擊ス

〔279〕

始テ太陽曆ヲ用ヒシハ何レノ時ナルヤ

明治五年十一月九日詔シテ大陽曆ヲ用ヒ此年十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日トシ時間ハ晝夜ノ長短ニ隨ヒテ各十二時ニ分チシヲ晝夜平分二十四時トナス

〔280〕

維新後戸籍ノ法如何

明治四年戸籍法ヲ改メ華士族神官僧侶平民皆其住地ニ就テ戸籍ニ編入シ穢多非人ノ稱ヲ廢シテ一般民籍ニ編入ス又華族ヨリ平民ニ至ルマテ婚嫁ヲ許シ華士族ト雖モ官ニ在ルモノヲ除ク外農商ノ業ヲ營ムヲ許ス而シテ古來平民僧侶ノ如キ苗字ヲ稱スルヲ得サリシモノモ亦皆之ヲ稱セシム是ニ於テ戸籍ノ法大ニ整ヒ戸數人員生死ノ數詳ニ之ヲ知ルヲ得ルニ至レリ

〔281〕

全外交ノ景況如何

王政復古以來大ニ外國ト交ヲ修メ横濱箱館神戸新潟長崎ヲ以テ開港場トシ盛ニ交易ヲ行フ是ニ於テ西洋文物ノ我國ニ輸入スルモノ日ニ月ニ盛ニ政治制度ヨリ衣食住ノ事物ニ至ルマテ之ヲ彼ニ取リテ舊樣ヲ改メ風俗大ニ變化シ前代未曾有ノ進化ヲナセリ現今好ヲ通スルモノ亞米利加合衆國、魯西亞、英吉利、佛蘭西、葡萄牙、瑞西、白耳義、丁抹、獨逸、澳地利、伊太利、西班牙、瑞典、那威、支那、朝鮮、布哇、墨斯哥、等二十余國ニ及ベリ亦盛ナリト云フベシ

〔282〕

同宗教沿革ノ大要ヲトフ

明治元年詔シテ神佛ノ混淆ヲ禁シ佛像ヲ以テ神体トナスヲ禁シ又佛語ヲ以テ神号トナスヲ停ム五年修驗宗ヲ廢シテ天台眞言ノ兩本宗ニ歸入セシム後僧侶僧官ヲ廢シ各宗ニ管長ヲ置キテ宗内一切ノ事ヲ統ベシム又耶蘇教ハ歐米各國ヨリ宣教師ヲ派遣シ教會ヲ立テ頻リニ布教ヲ力ムヿ之ヲ信スルモノ亦漸ク多シ

〔283〕

朝鮮事變ノ大略ヲ語レ

明治十五年朝鮮ノ兵卒亂ヲ起シテ王宮ヲ襲ヒ我公使館ヲ圍ム公使花房義質舊闘シ圍ヲ衝テ濟物浦ニ走リ英艦ニ投シテ僅ニ免ルヲ得タリ陸軍中尉堀本禮造等暴徒ノ殺ス所トナル朝鮮乃チ償金五拾萬圓ヲ出シ亂黨ノ巨魁ヲ嚴罰シテ罪ヲ謝ス後償金ノ内四拾壹萬圓ヲ彼政府ニ還ス朝鮮喜ブ十七年ニ至リ内亂再ヒ起リ公使竹添進一郎國王ノ依頼ニヨリ入テ王宮ヲ衛ル清兵韓兵ト合シテ我兵ヲ要擊シ又我公使館ヲ燒ク陸軍大尉磯林眞三等之ニ死ス其他在留日本人ノ暴掠ニ逢フモノ頗ル多シ乃チ井上馨ヲ全權大使トシ朝鮮ニ遣ハシテ談判ヲ開キ償金ヲ得兇徒ヲ刑ス尋テ伊藤博文ヲ清國ニ遣ハス談判數回ノ後一ノ條約ヲ結ヒ事始テ平ク所謂天津條約是ナリ

維新後刑律ノ沿革如何

明治ノ初メ命シテ磔刑、火刑、晒、引廻、鋸刑等ノ慘刑ハ皆之ヲ廢シ二年新律綱令ヲ定メテ各藩制ヲ異ニスル ノ弊ヲ改ム五年懲役法ヲ設ケテ笞杖罪ニ代フ六年更ニ改定律令ヲ頒布シ復讎ヲ禁シ拷問梟示等亦廢ス十三年ニ至リ刑法治罪法ヲ頒チ士族ノ閨刑ヲ廢シ死刑ハ絞首ニ止ル尋テ陸海軍ノ刑法治罪法ヲ改定シ本邦ノ刑政大ニ備ハル現行ノ普通刑名ハ左ノ如シ

重罪　死刑、徒刑〔無期有期ニ分ツ〕、流刑〔同上〕、懲役〔重輕ノ二種ニ分ツ〕、禁獄〔同上〕

輕罪　禁錮〔重輕ノ二種ニ分ツ〕　罰金

別ニ公權剝奪停止等ノ附加刑アリ而シテ司法省ニ於テ全國ノ法律ヲ司トリ大審院控訴院ヲ始トシ重輕

罪ノ裁判所アリ判事檢事各職ヲ分テ之ヲ掌ル明治二十三年ニ至リ裁判所構成法ヲ制定シテ更ニ從來ノ組織ヲ改メ地方裁判所區裁判所ヲ置キ大ニ其面目ヲ變更セリ

同教育ノ景況如何

全國ノ教育ハ文部省ニ於テ之ヲ督シ大學及ヒ高等尋常ノ中學校高等尋常ノ小學校ヲ始メ高等尋常ノ師範學校諸專門學校並ニ女學校諸種ノ私立學校等各地ニ起リ軍事ニハ陸軍大學士官學校海軍兵學校アリ商業ニハ商業學校アリ其他博物館書籍館幼稚園ノ設頗ル多ク一々枚擧スルニ遑アラス初メ明治五年學制ヲ定メ十二年ニ至リテ之ヲ廢シテ教育令ヲ頒チ十三年之ヲ改正シ十八年再ヒ之ヲ改正シ十九年帝國大學令ヲ定メ二十三年小學校令ヲ改正頒布シ更ニ學事通則ヲ定ム教育都鄙ニ普ク僻村陬邑亦學校ヲ設ケザル所ナキニ至レリ亦盛ナル哉二十三年十月三十日殊ニ教育ニ關スル勅語ヲ發シ玉フ是ニ於テ道德教育ノ方針一定シテ復タ動カスベカラズ

同兵制ノ概略ヲ聞カン

明治四年始テ東山西海ノ二道ニ鎮臺ヲ置キ尋テ東京仙臺名古屋大坂廣島熊本ノ六鎮臺トシ北海道ヲ加ヘテ七軍管トス六年徴兵令ヲ制シテ武門武士ノ常職ヲ解キ士民ノ別ナク身体強壯ノモノヲ撰ビテ兵ニ服セシム之ニ於テ兵農ノ分レシモノ一ニ歸セリ別ニ近衛兵アリ皇宮ヲ衛ル而シテ兵式ハ佛蘭西ニ倣フ海軍ハ志願兵ヲ募テ之ニ充ツ初メ横須賀ニ東海鎮守府ヲ置キシカ後佐世保、吳、舞鶴、室蘭ノ各地ニ鎮

守府ヲ置キテ軍港トシ益其擴張ヲ謀レリ而シテ兵式ハ多ク英吉利ニ倣フ亦北海道ニ屯田兵ヲ置キ平時土地ヲ開墾セシメ事アレハ兵役ニ服セシム又憲兵アリテ軍人ノ非違ヲ視察シ警備隊アリテ緊要ノ諸島ヲ守ル是ニ於テ兵制大ニ備ル

〔287〕

同通信ノ便ハ如何ナル有様ニナレルヤ

明治二年電信線ヲ東京横濱ノ間ニ架シテ通信ヲ開キ四年郵便ヲ東京西京大坂ノ間ニ設ケテ書狀ノ往復ニ便シ五年鐵道ヲ東京横濱間ニ布設シテ運輸來往　便ヲ開ク之ヨリシテ電信ノ架設鐵道ノ布設及ヒ郵便ノ施行各地ニ普ク如何ナル山村僻邑ト雖ヒ通信ノ不便ヲ訴フルヿナキニ至レリ加フルニ歐米各國ト聯合郵便ノ條約ヲ結ヒ電信線モ亦海底線ヲ架シテ外國ニ通セリ之ニ依テ殖産興業ノ道亦從テ大ニ興レリ縮地ノ法亦盛ナリト云フベシ

〔288〕

同税法ノ大要ヲ舉ヨ

明治五年地所永代賣買ノ禁ヲ解キ土地ヲ人民ノ私有トナシ地券ヲ發行ス同六年詔シテ地租ヲ改正シ從來米納ノ制ヲ廢シテ金納トシ地價ノ高下ヲ定メテ其百分三ヲ地租ト定ム十年ニ至リ更ニ減シテ地價百分ノ貳分五厘トス八年租税賦金ヲ分チテ國税府縣税ノ二種トス國税ハ大藏省ニ収入シテ國用ニ供スルモノニシテ府縣税ハ其地方ノ費用ニ供スルモノナリ即チ今ノ地方税ト稱スルモノ之ナリ而シテ地方税ヲ課スルニハ制限アリテ始メハ地租五分一ヲ超ユベカラサルノ制ナリシガ十三年ニ至リ三分一以内ト改ム而シテ土地ニ賦課スル區町村費十九年ヨリ地租七分ノ一ニ超過スルヲ得サラシム

〔289〕

同諸制度ハ如何ニ整備セルヤ

明治政府鋭意シテ治ヲ圖リ勉メテ諸制度ヲ整備セシメ教育、衛生、警制、勸業、軍事ハ固ヨリ論ヲ待タス其他ノ事大小トナク一々諸條例ヲ定メ諸規則ヲ制シ又專賣特許條例商標條例ヲ設ケテ盛ニ商工業ノ信用ヲ保護セリ明治二十一年市町村制ヲ發布シテ地方自治ノ基ヲ立テ二十二年ニハ萬法ノ根本タル帝國憲法ノ發布アリ加フルニ二十三年ニ至リ民法商法民事訴訟法等ノ一大法律ヲ制定シ又府縣郡制ヲ頒チタリ是ニ於テカ我國ノ諸法律殆ト完備シ其法條ノ緻密周到ナル泰西ノ諸國ト相讓ラサルニ至レリ

〔290〕

新聞紙發行ノ始ハ如何

明治元年柳川春陰横濱ニテ始メテ新聞紙ヲ刊行ス尋テ東京ニ新聞雜誌、日々新聞ノ發兌アリ是ヨリ諸種ノ新聞紙大ニ世ニ行ハルヽニ至レリ

〔291〕

明治十八年十二月官制改革ノ大要ヲ記セヨ

始メ六省ヲ置キ太政官ヲ以テ其冠首トシ諸省ハ專ラ指令ヲ太政官ニ仰キ太政官ハ批ヲ下シテ之ヲ施行セシム明治十八年太政大臣三條實美上表シテ其制ヲ改メント請フ其畧ニ曰ク今ノ制タル蓋シ一時ノ權宜ニシテ親政統一ノ体ヲ得サルノミナラス各省長官ノ責任ヲ輕クスルモノナリ故ニ太政官諸省ニ冠タルノ制ヲ改メ内閣ヲ以テ御前ニ事ヲ奏スルノ所トシ其中一人ヲ撰テ中外ノ職務ニ當ラシメ以テ各部ノ

統一ヲ得セシムベシ此レ親裁ノ体ニシテ立憲ノ義亦之ニ外ナラス云々天皇之ヲ嘉納セラレ詔シテ太政大臣左右大臣參議各省卿等ヲ廢シ更ニ伊藤博文ヲ以テ内閣總理大臣トシ各省皆大臣ヲ置キテ其責ニ任ス内閣ハ乃チ万般ノ政務ヲ總理シ天皇万機ヲ親裁セラル・所ニシテ諸省ハ宮内外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信ノ十省ニシテ從來ノ工部省ヲ廢ス而シテ宮内省ハ内閣ノ外ニ立チテ獨リ皇室ニ隷セリ立憲政体ノ基礎是ニ於テ成ル

現時爵位ノ制ハ如何

明治十七年華族令ヲ定メ公侯伯子男ノ五爵ヲ設ク此五爵ハ勳等及ヒ位階ノ外特ニ設クル所ナリ位階ハ維新以來屢改革アリテ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階ト定メ從四位以上ヲ勅授トシ正五位以下ヲ奏授トス

明治二十二年二月十一日ハ特ニ吾人ノ記臆スヘキ日ナリト云フハ何故ナリヤ

嗚呼此日ヤ實ニ東洋未曾有ノ大典ヲ擧行セラレタルノ日ナリ空前絶後ノ慶事タル帝國憲法ヲ發布セラレタルノ日ナリ蓋ニ明治十四年十月十二日ヲ以テ國會開設ノ詔ヲ發セラレ是ニ於テ此大憲ヲ煥發シ玉ヘリ其勅ハ畧ニ曰ク朕國家ノ隆盛ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニヨリ現在及將來ノ臣民ニ對シ此不磨ノ大典ヲ宣布ス朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ奬勵シ相共ニ和衷協同シ益我帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ

永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此負擔ヲ分ツニ堪フルヿヲ疑ハサルナリト此日議院法衆議院議員撰擧法會計法貴族院令ヲ發布シ又別ニ皇室典範ヲ定ム是ニ於テカ皇室ノ安泰政府ハ權限及ヒ臣民ノ權利義務等秩序整然トシテ復動カスベカラス立憲政府ノ基礎益鞏固トナレリ此日ヤ全天下ノ人民歡呼湧クカ如ク踊躍盤舞シテ之ヲ祝シ洋々タル和氣ハ至ル所ニ充溢セリ嗚呼立憲ノ政体ヲ以テ自ラ誇ル所ノ歐州各國ト雖モ其始メ憲法ヲ得ルヤ皆君臣相爭ヒ上下相戰ヒ甚シキハ君主ノ頭ヲ斷チテ怪マス砲烟彈雨悲風慘澹タル中ニ於テ之ヲ得タリ和氣靄々君臣歡呼ノ中ニ於テ此大憲ヲ得タルモノ獨リ我日本帝國アルノミ我國ノ光榮幾何ソヤ吾人ノ幸福如何ソヤ之レ豈特筆大書スヘキノ慶事ニアラスシテ何ソヤ

帝國議會開設ノ始及ヒ其來歷如何

王政維新ノ始五條ノ聖誓ヲ出シ給フヤ公議輿論ヲ重スルノ風漸ク上下ニ行ハレ明治七年後藤象二郎江藤新平板垣退助等民撰議院設立ノ建白書ヲ上ルヤ天下囂然トシテ其遲速ヲ論シ十年以後ニ至リテハ各地ヨリ總代ヲ出シテ之ヲ請願スル者漸ク多シ又政府ニ於テハ明治八年ニ元老院ヲ設ケ〔廿三年帝國議會ノ開設ニ方リ之ヲ廢ス〕十二年ニ至リテ府縣會ヲ開ク明治十四年十月十二日天皇遂ニ明治二十三年ヲ期シテ國會ヲ開キ以テ立憲ノ政体ヲ建テンコヲ勅シ玉フ是ニ於テ朝野皆其準備ヲ怠ラス以テ其期ノ至ルヲ俟ツ二十三年ニ至リ其十一月廿五日ヲ以テ帝國議會ヲ召集セラレ同廿九日ヲ以テ其開院式ヲ擧行シ玉フ帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヨリ成リ貴族院議長ハ伊藤博文ニシテ衆議院議長ハ中嶋信行

之ニ任セリ之ヲ第一期ノ議會トナス帝國萬歳ノ祝聲湧クカ如ク瑞烟祥々ノ中ニ於テ皆之ヲ慶賀セサルナシ曩ニハ君臣歡呼ノ中ニ於テ大憲ノ發布アリ今亦和氣洋々ノ中ニ於テ此盛典ヲ擧ケラル宜ク世界万國ニ誇稱スヘキナリ之レ聖天子ノ鴻恩ニ出ルモノニシテ皇國ノ盛運蓋シ窮極スル所ナシ吾人臣民幸ニシテ此東洋未曾有ノ盛時ニ逢フ四千万ノ同胞ガ撼天動地ノ歡聲ヲ以テ之ヲ祝シ之ヲ喜ブ固ヨリ其處ナリ嗚呼盛ナル哉

〔295〕

假議事堂ノ燒失セシハ何レノ時ナルヤ

第一期帝國議會開會中明治二十四年一月二十日火アリ假議事堂ヲ燒ク宏大ノ建築壯麗ノ高廈瞬間化シテ日比谷原頭ノ灰トナル惜ミ哉

〔296〕

湖南事變トハ何ヲ云フヤ

明治二十四年五月魯國皇太子ニコラス親王我國ニ來遊セラル朝廷ノ待遇最モ渥シ太子巡遊シテ近江國大津ニ至ル津田三藏ナルモノアリ乃チ太子ニ加フ太子幸ニシテ重傷ヲ負ハズ報宮廷ニ達ス天皇大ニ愕カセ給ヒ直ニ駕ヲ命シテ大津ニ至リ之ヲ慰問シ玉フ之ニヨリ幸ニシテ事ナキヲ得タリト雖モ一時上下ノ驚愕物ノ譬フベキナク天下萬衆親王ノ奇禍ヲ慰問スルト同時ニ三藏ノ狂ヲ惡マサルナク殊ニ陛下親ラ駕ヲ枉ケサセラルヽニ至テハ一層ノ感慨ヲ深フシタリ咄三藏何者ゾ假令精神ノ錯亂ニ依ルト云フト雖モ國賓ヲ傷ケ宸襟ヲ惱マサセタルノ罪免ルベキニアラサルナリ

〔297〕

濃美ノ震災ヲ記セヨ

明治二十四年十月二十八日濃美ノ地大ニ震フ山崩レ地裂ケ堤防破壞シテ田園荒蕪シ人畜ノ死傷萬ヲ以テ數フニ至ル會火大ニ起リ岐阜大垣名古屋ノ各地殆ト全ク灰燼ニ付ス親子相別レ夫妻相離レ兄弟相索メテ得ズ歸ルニ家ナク食フニ米鹽ナシ飢寒交々迫リ救援ヲ求メントスルモ四隣皆此クノ如シ其慘狀豈筆紙ノ能ク盡ス所ナランヤ朝廷直ニ金ヲ出シテ之ヲ賑ハシ政府亦別ニ救恤金數百萬圓ヲ頒チ天下ノ公衆義捐以テ之ガ救濟ヲ計レリ之ヲ聞クモノ誰カ酸鼻セサラン實ニ稀ニ見ル所ノ震災ナリトス

〔298〕

第二期議會ノ始末ハ如何

明治二十四年十一月二十六日天皇貴族院ニ行幸シ両院議員ヲ會合セシメ第二期議會ノ開院式ヲ行ハセラレ帝國ノ隆昌ト人民ノ幸福トヲ以テ目的トシ和衷協同シテ益々其公務ヲ盡サンヿヲ望ム云々ノ優詔ヲ下シ玉フ次デ議ヲ開ク議政府ト合ハス遂ニ一大衝突ヲ來シテ十二月二十五日解散令ノ不幸ヲ見ルニ至レリ是ニ於テ議員各其撰擧區ニ歸ル貴族院亦衆議院ノ解散ト共ニ停會セラル之ヨリ先キ議長伊藤博文辭シテ他ニ轉シ蜂須賀茂昭其後ヲ承ク

〔299〕

第三期議會ノ始末ハ如何

第二期議會解散ノ後更ニ明治二十五年二月十五日ヲ以テ總撰擧ヲ行ヒ五月六日ヲ以テ開院ノ式ヲ行ハル之ヲ第三期ノ議會トス天皇親臨シ玉フヿ前例ノ如シ更ニ議長ノ撰擧ヲ行ヒ星亨之ニ任セラル次テ議

ヲ開キシガ中途不幸ニシテ七日間ノ停會ヲ命セラルヽニ至リシト雖モ六月十四日會期滿チテ無事閉院ノ式ヲ行フ

政体變遷ノ要領ヲ問フ

上古ハ祭政一致ニシテ列聖相繼キ祖宗在天ノ靈ヲ奉シ以テ天業ヲ治ム而シテ政体ハ所謂君主獨裁ナリト雖モ歷朝民ヲ愛スル子ノ如ク士民各其所ヲ得タリ其治敎ヲ任スルニハ國造縣首等アリテ其職ヲ世々ニシ以テ王畿ノ藩屏タリ孝德天皇ノ朝ニ至リ其弊ヲ改メ之ヲ廢シテ國司郡司ヲ置キ朝廷全國ヲ直轄ス郡縣ノ制是ニ於テカ成ル後源氏政ヲ執リ諸國ニ守護ヲ置キ莊園ニ地頭ヲ置クニ及テ封建ノ勢全ク成ル後建武ノ中興アリト雖モ未タ久シカラスシテ舊ニ復シ再ヒ純然タル封建ノ政治トナリ其基礎益固シ政武門ニ歸シテヨリ六百八十四年ニシテ明治維新王政復古藩ヲ廢シテ縣ヲ置キ復ヒ郡縣ノ制度トナル之レ大勢ノ赴ク所ニシテ封建制度ハ以テ世ノ開明ニ伴フニ足ラサルヲ知ルナリ明治二十三年更ニ帝國議會ヲ開キ以テ立憲ノ政治ヲ立ツ政体ノ變改此ノ如シト雖モ然レトモ建國ノ大体ニ至リテハ確然不拔ニシテ動クコトナク万世一系ノ皇室ヲ仰ケリ之レ我國体ノ万國ニ異ナル所ニシテ寶祚ノ隆天壤ト共ニ窮極スルコトナシ

種痘ノ制ハ何レノ時ヨリ一定セシヤ

從來各府縣ニ於テ適宜之ヲ行ハシメシガ明治十八年ニ至リ種痘規則ヲ定メテ全國一般ニ之ヲ屆行セシ

ム

福島中佐單騎遠征ノ事實ヲ略記セヨ

明治二十六年六月下旬陸軍歩兵中佐福嶋安正單騎西比利亞ノ荒野ヲ跋渉シテ歸朝ス之ヨリ先キ安正陸軍少佐タリ普都伯林府ニ在リ其歸朝セントスルニ方リ單騎西比利亞ヲ跋渉シテ其内地ノ探險ヲ遂ケンヿヲ企テ明治二十五年二月十一日ノ佳辰ヲトシテ單騎蹄ヲ起ス騎スル所ノ駿馬ヲ「凱旋」ト名ク之レ安正ノ大ニ愛スル所ノ馬ナリ聞ク者皆其剛膽冒險ニ驚カサルハナシ魯都ニ至リ皇帝ニ謁シ勳章ヲ受ク更ニ行クヿ若干程ニシテ馬遂ニ疲レテ斃ル乃チ莫斯科ノ魯營ニ就キ更ニ一馬ヲ購ヒ之ヲ「烏拉」ト名ケ騎シテ復タ發ス烏拉山ノ巔ニ登リ四方ヲ望ミ笑テ曰ク「烏拉ノ山我ヨリ低キヿ一丈」ト更ニ劍ヲ以テ石ニ刻シテ曰ク「大日本帝國陸軍歩兵少佐福嶋安正經過此地」ト雄壯ノ氣想フヘシ其茫々タル西比利亞ノ荒野ヲ經過スルヤ或ル時ハ數百ノ狼群ニ追ハレ或時ハ蠻夷ト共ニ馬矢ノ中ニ寢ヌ其炎威熾クカ如キノ時ニ方リテヤ夜行ノ危險ヲ犯シテ極北ノ野ヲ越ヘ北風凛々膚ヲ裂クノ日ニ方リテヤ幾丈ノ積雪ヲ踏テ幾ニ凍死ノ難ヲ免レ千辛万苦嘗メ盡サヽル所ナシ畏クモ事、聖聽ニ達シ官一等ヲ進メラレ又若干金ヲ賜フ是ニ至テ名譽ト屬望トヲ負ヒ更ニ滿州ヲ經テ浦擔斯德港ニ出テ船ニ搭シテ恙ナク歸朝ノ道ニ就ケリ貴顯士女ノ之ヲ歡迎スルモノ頗ル多ク人皆其雄膽ヲ稱シテ空前ノ壯遊トナス曰ク日東唯此快男子アリ

朝鮮防穀事件ノ顚末ヲ略記セヨ

我政府ハ朝鮮政府ト條約ヲ結デ曰ク若シ朝鮮政府ニ於テ水旱兵擾等ノ爲メ境内食料ヲ缺クヲ恐レ米穀ノ輸出ヲ禁セントト欲スルトキハ其期ヨリ一ケ月以前ニ於テ地方官ヨリ我領事館ニ照知シタル後ニアラサレハ之ヲ決行スルヲ得ズト然ルニ我明治二十二年彼レ朝鮮官吏ハ其條約ニ違背シ定規ノ手續ヲ履マスシテ不法ニモ防穀令ヲ施キ其賣買ヲ嚴禁シ其輸出ヲ禁止シタリ是ニ於テ我商民ノ被リタル損害頗ル多シ乃チ我政府ハ商民ノ稟請ヲ納レ相當ノ査竅ヲ經テ韓廷ニ向ヒ之レカ賠償ヲ求メタリ然ルニ韓政府ハ依違不斷ノ政畧ヲ執リテ或ハ其責メアラストシ或ハ條約ニ違背セストシ徒ニ遷延時日ヲ移スノミニシテ我要求ヲ納レス年所ヲ重ヌルヿ四年公使ヲ替フルヿ三人ニ至リ現辨理公使大石正巳嚴シク談判ヲ開キ將ニ最後ノ手段ニ訴ヘントセシガ彼政府遂ニ我ニ屈シ賠償金拾壹萬圓ヲ拂フヲ約シテ平和ニ局ヲ結ブヲ得タリ實ニ明治二十六年五月ノ事ナリ之ヲ防穀事件ノ顚末トス

明治廿四年一月卅一日印刷
同　廿四年二月一日出版
同　廿四年八月十日再版印刷
同　廿四年八月十三日出版
同　廿六年七月三日三版印刷
同　年　月十日發行

福岡縣福岡市因幡丁五十八番地ノ一寄留
著作者　青木俊太郎

同縣同市博多中島町四十番地
發行兼印刷者　林彦之助

福岡縣福岡市博多中島町四十八番地
發兌書肆　林磊落堂

正價貳拾五錢

版權所有